



平成22年度 文化庁美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業
徳島平和ミュージアムプロジェクト

報告書



2011.3

平成22年度 文化庁美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業

徳島平和ミュージアムプロジェクト 報告書



2011.3

徳島平和ミュージアムプロジェクト実行委員会
(徳島県立博物館内)

刊行にあたって

昨年（2010年）は、戦後65年の節目にあたりました。戦争体験の記憶が急速に薄れてきている昨今ですが、いまだに地球上から戦争がなくなる現実を踏まえ、私たちはこれからも戦争の残酷さと平和の尊さについて学び続けなければなりません。

この節目にあわせ、徳島平和ミュージアムプロジェクト実行委員会を組織し、徳島県内（徳島県立博物館、徳島県立図書館、道の駅 貞光ゆうゆう館、海陽町立博物館、松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館）で戦争と平和をテーマにした展示や、これと関連するワークショップ等の普及交流事業を展開し、多くの方々の観覧・参加をいただきました。会場によっては、当初は予定していなかったボランティアのご協力を得ることができたり、地元在住の皆様から歓迎の声をいただいたりするなどして、実行委員会や会場となった施設の関係者のみならず、広く県民の皆様とともに学び、考えることができた実感しています。

今回の事業を好評のうちに終えることができた理由の一つに、従来の地方博物館で行われてきた戦争展示（例えば、徳島県立博物館で1995年に開催した企画展「戦争から豊かな未来へ」）とは違った切り口があった点が挙げられます。具体的には、ノースウェスト芸術文化博物館（アメリカ合衆国ワシントン州）が所蔵する答礼人形「ミス徳島」を約20年ぶりに里帰りさせ、1920年代の日米間で行われた平和と友情のための人形交流を紹介することを事業の中心に据えた点です。また、徳島県立博物館での展示に限定されますが、一方では戦争そのものの残酷さと民衆生活への影響についても重視し、地域に根差した戦争関係資料の紹介と戦争体験の継承にも意を払いました。これらが相まって、子どもから高齢者まで、様々な年齢の方々にかかわっていただくことができたものと考えています。

全事業の終了にともない、ここに記録をまとめた報告書を刊行します。徳島平和ミュージアムプロジェクトの成果と課題を広く共有していただき、次のステップへとつなげていくことができれば幸いです。

最後になりますが、文化庁、ノースウェスト芸術文化博物館をはじめ、事業の趣旨をご理解いただき、ご協力賜った多くの皆様に心からお礼申し上げます。

2011年3月5日

徳島平和ミュージアムプロジェクト実行委員会会長
(徳島県立博物館長)

大原 賢二

目 次

刊行にあたって

大原 賢二

3

§ 1 プロジェクトの記録

5

I	プロジェクトの概要	長谷川賢二	7
II	答礼人形「ミス徳島」の里帰り	長谷川賢二	9
III	特別陳列「海を渡った人形と戦争の時代」	長谷川賢二	11
IV	特別陳列「海を渡った人形と戦争の時代」をめぐる批評と感想		22
	徳島県立博物館の特別陳列「海を渡った人形と戦争の時代」を考える	山辺 昌彦	22
	観覧者の声から		24
	神山町神領小学校児童の作品		28
	徳島市洪野小学校5年生の感想		29
V	巡回展「海を渡った人形と平和への願い」		30
	つるぎ町会場	長谷川賢二	30
	海陽町会場	郡司 早直	31
	松茂町会場	松下 師一・船井由美子	34
VI	答礼人形「ミス徳島」お別れ会	長谷川賢二	40
VII	答礼人形「ミス徳島」の調査・修復		41
	「ミス徳島」の調査・修復に携わって	青木 勝	41
	「答礼人形ミス徳島」の調査・修復、点検に関する報告	磯本 宏紀	45
VIII	企画展「図書委員が選ぶ戦争の本」	高橋 律子	47
IX	シンポジウム「近代四国における戦争と地域社会」		49
	シンポジウムの概要	石尾 和仁	49
	高知県における日露戦争戦没者慰霊	小幡 尚	50
	善通寺における乃木神社・護国神社の建設	野村 美紀	57
	戦略爆撃と中小都市空襲 ～第20航空軍B29による愛媛県への空襲を中心に～	藤本 文昭	64
	戦時体制の進展と徳島の農村女性	佐藤 正志	76

§ 2 プロジェクトに寄せる思い

85

メッセージ	バレリー・ウォール	87
ミス徳島の里帰りに感動	栗原 祐司	88
答礼人形「ミス徳島」再び「平和と友情の使者」として	山田徳兵衛	90
「平和の使者」—青い目の人形	友滝 洋子	91
巡回展のお手伝いを経験して	郡司 宏子	92
「海を渡った人形と戦争の時代」特別展から平和を考える	村澤 普恵	93
親善人形異聞	原田 一美	94
人形交流は人間交流 —「ミス徳島」里帰り展に	高岡美知子	96
徳島平和ミュージアムプロジェクト事業「海を渡った人形と戦争の時代」展に寄せて	大栗 仁	97
徳島で出会ったドラマ	染川 香澄	98

付録 報道等の記録

101

§ 1

プロジェクトの記録

プロジェクトの概要

実行委員会委員（徳島県立博物館） 長谷川 賢二

1 前提にあった認識

アジア・太平洋戦争の終結（1945年）から65年。戦争の記憶は次第に、そして確実に希薄化しつつある。そこで、改めて戦争の歴史を振り返るとともに、地域における歴史的資産として戦争関係遺跡や戦没者の遺品、空襲被災遺物、戦時下生活資料などを収集・保存し、活用しながら、戦争と平和について考えていくことが求められる。

また、徳島県においては、1945年7月4日未明に徳島市街が空襲を受けたことから、毎年夏になると、学校教育や県民の学習会、マスコミ報道等において戦争に関するものが多くなる。徳島県立博物館における学校への実物資料貸し出しにおいても、徳島空襲関係資料の需要は多い。したがって、戦争は地域史を学ぶ上で普遍的かつ最重要のテーマということができものの、関心は徳島空襲に偏りがちであるし、現実感が乏しいという問題がある。そこで、さまざまな観点から戦争について学んだり、考えたりする機会を創り出し、今後における県民各層、とくに子どもを中心とする若い世代の学びに資することが要求されるであろう。

徳島平和ミュージアムプロジェクトは、以上のような認識から計画したもので、平成23年度文化庁美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業に採択され、実施に至った（事業期間 2010年5月20日～2011年3月15日）。

2 事業内容

今回のプロジェクトは、徳島県立博物館において、企画展「戦争から豊かな未来へ」（1995年）以来、15年ぶりの本格的な戦争展として構想していたものを核としている。これに国際交流や地域連携の推進を含み込むことで、地域的な博物館活動の向上をも視野に入れたものである。

とくに大きく取り上げることにしたのは、1927

年、悪化しつつあった日米関係を憂慮した宣教師・ギュリックと実業家・渋沢栄一を中心として取り組まれた、友情と平和のための人形交流（アメリカからの「青い目の人形」と、日本からの答礼人形の交換）であった。アメリカ合衆国ワシントン州のノースウェスト芸術文化博物館（Northwest Museum of Arts & Culture、以下、本書では原則的に同館の公式の略称であるMACと表記する）所蔵の答礼人形「ミス徳島」を里帰りさせ、アメリカから贈られた「青い目の人形」（徳島県では神山町神領小学校所蔵のアリスだけが残っている）とともに「主役」として扱ったのである（写真1・2）。

これは、人形というソフトな入口から、「戦争と平和」という重いけれども、重要な課題へとアプローチする回路を設けたいという意図によるものでもあった。とくに小学生など、子どもに抵抗のない事業とすることを重視したことも理由の一つである。

こうして実施した事業の中心は、展示であった。経費・規模の両面で中心に位置づけたのは特別陳列「海を渡った人形と戦争の時代」（徳島県立博物館）である。人形交流とその後の戦争の時代における兵士や民衆の生活を扱った。戦争展や答礼人形里帰り展は類例が多いが、前者は重々しく、子ども向けにはなりにくい。また後者は、子どもを含む多様な層に受け入れられやすいが、人形自体が焦点となり、交流が破綻した後の戦争についてリアリティに欠く。それらの問題点を克服すべく一体的な構成を目指した。

また人形交流の部分については、巡回展「海を渡った人形と平和への願い」としてパッケージ化し、道の駅 貞光ゆうゆう館、海陽町立博物館、松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館で開催した。特別陳列全体を巡回したかったが、経費や会場の条件から、やむを得ず人形交流だけに絞ることになったのである。だが、会場によって

は独自の味付けも施され、よい意味での広がりがあったと思う。

さらに、徳島県立図書館では、高等学校の図書委員が推薦する図書の紹介展である企画展「図書委員が選ぶ戦争の本」を開催した。これらすべての展示を通じて、歴史的・現代的な観点を複合させるものでもあった。

特別陳列や巡回展に関連し、シンポジウムやワークショップなど、各種の普及交流事業も行った。静態的な展示にとどまらず、観覧者が参加でき、主体的に思考できる事業を目指した。また、ホームページ (<http://www.museum.tokushima-ed.jp/2010kibanseibishienjigyo/>) を開設し、事業の進捗状況等について情報発信した。

なお、ミス徳島の里帰りは約20年ぶりのことであり、MACの了解のもと、株式会社吉徳の全面的なご協力により調査・修復を行い、新たな知見も得られた。

3 実施態勢

このプロジェクトは、国際交流や地域連携の要素を含みながら事業を進めようとしたことから、さまざまな立場からの視点・協力を得られるようにするため、実行委員会を組織して実施した。ま

た、とくに子ども向けの内容を考えることを中心にサポートいただくため、アドバイザーを委嘱した。実行委員会の事務局は徳島県立博物館に置いた。

なお、プロジェクトは実行委員会だけの手で成したのではない。本書巻末に掲げるが、多くの機関・団体、個人のご協力の賜物であった。時間が不足して焦る中、さまざまな情報・資料を快く提供くださった答礼人形「ミス三重」の里帰りを実現する会（現・ミス三重の会、以下、本書では現名称を用いる）には特段の謝意を表したい。



写真1 ポスター。向かって左にアリス、右にミス徳島を配置。

実行委員会関係者一覧

会 長	大原 賢二	徳島県立博物館長
副 会 長	村澤 普恵	財団法人徳島県国際交流協会 国際交流・協力シニアコーディネーター
監 事	石尾 和仁	四国地域史研究連絡協議会幹事
会 計	田村 恭子	徳島県立博物館普及課課長補佐
委 員	原田 一美	児童文学作家
	高岡美知子	元武庫川女子大学教授
	大栗 仁	神山町神領小学校長
	露口 幾也	徳島県立図書館企画課課長補佐
	郡司 早直	海陽町立博物館学芸員
	松下 師一	松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館主査兼主任学芸員
	高島 芳弘	徳島県立博物館副館長
	長谷川賢二	徳島県立博物館人文課長
	磯本 宏紀	徳島県立博物館主任
	山田 量崇	徳島県立博物館主任学芸員
アドバイザー	染川 香澄	ハンズ・オン プランニング代表



写真2 展示内容をまとめた解説パンフレット（図録）

答礼人形「ミス徳島」の里帰り

実行委員会委員 長谷川 賢二

2010年7月13日、MACのスタッフであるブルック・シェルマン氏とともに、頑丈な箱に納められた答礼人形「ミス徳島」が関西国際空港に到着し、そのまま徳島へと搬送された。そして午後10時過ぎ、徳島県立博物館に到着した。待望の里帰りが実現したのだった。プロジェクトのメイン事業というべき、特別陳列「海を渡った人形と戦争の時代」のオープン4日前のことだった(写真1)。



写真1 ミス徳島と付属する資料などが納められた箱

翌日、開梱と税関の検査、シェルマン氏と徳島県立博物館学芸員による点検が行われた(写真2)。16日には、これまでに里帰りした答礼人形の修復を数多く手がけてこられた株式会社吉徳の青木勝秘書室長による着付けと展示作業が行われ、無事にオープンの日を迎えた。それから約3か月



写真2 ミス徳島の開梱が終わった直後。左端がブルック・シェルマン氏

の間、多くの方がミス徳島と対面したのである。

ところで、ミス徳島の里帰りは今回が初めてではなかった。1988年、日本国際文化協会・朝日新聞・そごう美術館の主催により、全国のそごうを巡回して「お帰りのさい答礼人形 青い目の人形展」が開催されたことがある。その際、ミス徳島も帰国し、徳島でも展示されたので、一度は里帰りしていることになる。だが、そのときの会期は10日間ほどであったし、すでに20年ほど前のことである。徳島県民の多くは見たこともないのではないと思われる。今回は、7~10月の間、県内4会場を回って展示されたし、詳細な調査や修復も行われたので(11~46ページ参照)、初の本格的な里帰りであったといっていよう。

今回の里帰りは、あっさりと実現したものではなかった。当初、ミス徳島について詳しく、MACのスタッフと懇意である高岡美知子氏(実行委員会委員)を通じて打診を行ったものの、MAC側の運営体制の変動があったため、交渉ははかばかしくなかった。その後、事業の中核となる徳島県立博物館が窓口となって、実行委員会会長でもある大原館長を中心に交渉・調整を進めることにした。文化庁の事業採択時期との関係で、与えられた時間が少なかった上、前提となる事前の交流がなかったため、コミュニケー



写真3 バレリー・ウォール氏

ションがうまくとれずに難航した。

最終的には、里帰りの意義を認め、最大限の配慮をいただいたロナルド・レクター館長、コレクション担当のバレリー・ウォール学芸員のおかげで、無事に事業を実施し、好評のうちに終わることができた（写真3・4）。とくに、病身であるにもかかわらず、献身的に準備を進めていただいたウォール氏がいなければ、里帰りはなかったかもしれない。彼女に心からの感謝を捧げたい。

すべての事業が終わり、再び頑丈な箱に戻されたミス徳島は、2011年3月1日、迎えに来たウォール氏やお礼に向かう大原館長らとともにMACへと旅立った（写真5）。



写真5 返却にあたっての点検が終わった後、ウォール氏とミス徳島を囲んで撮影したもの。

Escorting Miss Tokushima

Contact: Rebecca Bishop, Communications Manager
Northwest Museum of Arts & Culture (MAC)

2316 W First Avenue, Spokane, WA 99201
Direct Phone: (509) 363-5344 Switchboard: (509) 456-3931 Fax: (509) 363-5303

Email: Val Wahl, Museum Collection Curator val.wahl@northwestmuseum.org

The Doll Who Crossed the Sea

(Spokane, WA) The Tokushima Prefectural Museum in Japan has requested a "homecoming" of the MAC's Japanese Friendship doll, Miss Tokushima, named for this Tokushima Prefecture (similar to a state.) The year 2010 is auspicious as it marks the 150th year of official relations between Japan and the United States.* Miss Tokushima, an original 1927 *torei* doll, will be displayed for viewing at four different venues in Tokushima Prefecture between July and October. The title of the exhibit tour is "The Doll Who Crossed the Sea."

When American missionary, Dr. Sidney L. Gulick returned to the US in the late 1920s after more than 20 years in Japan, the state of US-Japan relations greatly troubled him. He wanted to sow seeds of friendship in the open minds of children so he created a simple idea: the Doll Plan. In 1927, almost 13,000 American dolls were collected from across the United States and sent to Japan. Honored by this gesture, Japanese Viscount Eiichi Shibusawa commissioned skilled doll makers to create fifty-eight 32" tall, formal display dolls.

Many of the original 58 Japanese doll ambassadors have had homecomings. Instrumental with the Tokushima Homecoming committee is Michiko Takaoka, past director of the Japanese Cultural Center at Mukogawa Fort Wright Institute and Miss Tokushima's biggest fan. Michiko and her husband have retired to Japan and been supportive in the arrangements to bring the doll home.

Museum standards require that the doll and her accessories be accompanied by a courier. MAC Museum Collections Curator, Val Wahl, is being assisted by Brooke Shelman (graduate level museum studies degree, UW). Brooke will escort Miss Tokushima and her formal tea ceremony set and represent the MAC at the host museum in Japan. Shelman will leave Spokane on July 12, returning July 16.

The 4 venues are as follows:

Tokushima Prefectural Museum

Sadamitsu YuYu House (Tsurugi Town)

Matsushige-cho History Museum (Matsushige Town)

Kaiyo-choritsu Museum (Kaiyo Town)

Although in very good condition, there will be an opportunity to have the original doll manufacturer do some work to stabilize Miss Tokushima. The MAC can then continue to display her in the original mission of goodwill between Japan and the US.

* In 1860, as the Tokugawa era drew to a close, the *Kanrin Maru*, captained by Kaishu Katsu, set sail for San Francisco, marking the first time a Japanese-piloted ship crossed the Pacific. 2010 is the 150th anniversary of this extraordinary but little known historical event -- the first official Japanese mission to the West following over 200 years of self-imposed isolation. The mission's objective was to ratify the Treaty of Amity and Commerce, and it traveled through the U.S. establishing the foundations for business and cultural relations between the U.S. and Japan. Americans turned out in great numbers to meet the mission and on its final stop in New York City, the visitors were greeted with a parade on Broadway.

写真4 MACのホームページに掲載されたミス徳島の里帰りについての記事

ノースウェスト芸術文化博物館

Northwest Museum of Arts and Culture (略称MAC)

アメリカ合衆国ワシントン州スポケーン市にある博物館。先住民等の文化、地域史、美術を主たるテーマとしたコレクションを所蔵しており、展示、教育活動、各種のイベントを行っている。詳しくはホームページ (<http://www.northwestmuseum.org/>) を参照していただきたい。



特別陳列 「海を渡った人形と戦争の時代」

実行委員会委員 長谷川 賢二

(1) 会期

2010年7月17日（土）～9月5日（日）

(2) 会場

徳島県立博物館（企画展示室・文化の森多目的活動室）

(3) 展示の概要

2つの大テーマから構成し、それぞれに1室ずつ宛てた（写真1～3）。

①人形が結んだ友情—「青い目の人形」と答礼人形

「青い目の人形」がやって来た／アメリカへ旅立った答礼人形



写真1 会場入口



写真2 第1部の様子

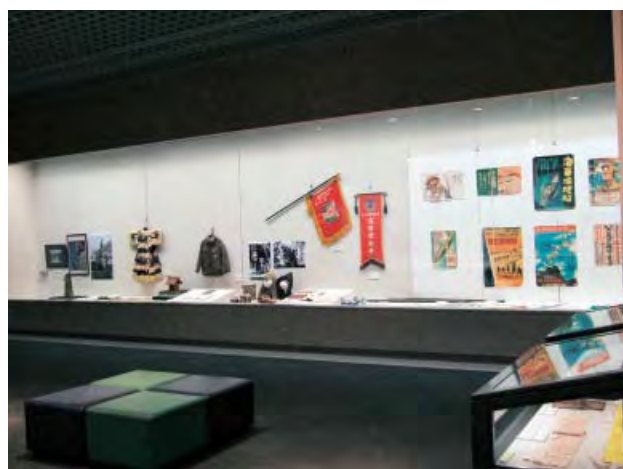


写真3 第2部の様子

②戦争とくらし

昭和初期のくらし／戦場へ／戦時下のくらし
／1945年7月4日—徳島が焼きつくされた日
第1部では、「青い目の人形」アリスと答礼人形「ミス徳島」を中心として、1927年に日米間で行われた平和と友情のための人形交流とその背景などを紹介した。四国に残る「青い目の人形」のうち、愛媛県と高知県の計4体と関連資料も展示した。

第2部では、主として地域の人々の生活と戦争とのかかわりを中心としながら、アメリカを含む諸外国との長い戦争の時代について紹介した。

両テーマが分断されないよう、第2部にも戦時下の人形について紹介するパネル展示を行ったほか、動線の最後には、現在、アリスとミス徳島が学習などに活用されていることを紹介した。人形を介して一体感をもたせるようにした工夫である。

また、ミス三重の会が制作したDVDを常時再生したり、パソコンを置いてEラーニング教材「徳島大空襲」（インターネットにより公開しているものと同じ。<http://www.museum.tokushima-ec.ed.jp/e-learning/tokushima-kushu/index.html>)を視聴できるようにした。

(4) 観覧者数

10,364人

内訳 個人：小学生1,821人、中学生143人、
高校・大学生123人、その他8,003
人
団体：幼稚園・保育所2（123人）、小
学校2（136人）、高校1（15人）

(5) 普及交流事業

(a) 紙芝居&展示解説（写真4・5）

■開催日 7月17日（土）・18日（日）・19日
（月・祝）・25日（日）、8月15日（日）・
29日（日）、9月5日（日）

(※) 7月17・18日、8月15・29日、9月
5日は、2回ずつ実施

(※) 当初予定していたのは、7月17・18日、
8月29日（いずれも2回）で、他は
臨時開催である。

■講師

7月17日・18日 高岡美知子氏（実行委員

会委員）、長谷川賢二

19日 大原賢二（実行委員会会長）、長谷
川賢二

25日 長谷川賢二

8月15日 青少年育成アドバイザーの会

29日 高岡美知子氏、ペンデル・パトリ
ス氏（金城学院大学講師）、長谷川賢二

9月5日 青少年育成アドバイザーの会、
長谷川賢二

■参加者

7月17日 ①32人、②59人

18日 ①45人、②51人

19日 20人

25日 20人

8月15日 ①42人、②10人

29日 ①41人、②42人

9月5日 ①32人、②43人

(b) シンポジウム「近代四国における戦争と 地域社会」（第3回四国地域史研究大会） （写真6）

■日 時 7月25日（日）12:30～17:00

■会 場 文化の森イベントホール

■参加者 102人

■内 容 49～84ページ参照

(c) 記念演奏&講演会（写真7・8）

■日 時 8月1日（日）13:30～15:00

■会 場 文化の森イベントホール

■講師・演題等

徳島邦楽集団「THE DOLL」

原田一美氏（実行委員会委員）



写真4 高岡氏とパトリス氏による紙芝居



写真5 青少年育成アドバイザーの会による紙芝居



写真6 報告者によるディスカッション



写真7 徳島邦楽集団による演奏



写真9 駆けつけていただいた原田一美氏による説明



写真8 講演する原田一美氏

「青い目の人形アリスちゃん」

■参加者 101名

■内 容

演奏の部、講演の部の2部構成とした。演奏された作品は、原田一美著『青い目の人形』をモチーフとし、朗読と演奏を組み合わせ構成されたものである。また、講演では、徳島県内に唯一現存している「青い目の人形」アリスをめぐる歴史を通じ、平和を守る意義についてお話いただいた。

(d) 神山町神領小学校招待遠足「アリスの里からこんにちは」(写真9)

■日 時 8月10日(火) 9:30~12:00

■会 場 特別陳列会場ほか館内

■参加者 102人(児童88、教員14)

■内 容

「青い目の人形」アリスが保存されている神山町神領小学校の子どもたち全員を招待し、特別陳列や常設展、収蔵庫などを案

内した。答礼人形ミス徳島の里帰りを機に、人形交流と戦争についての学習を深めるとともに、博物館に親しむ機会になったようである。

(e) ワークショップ「絵手紙をかこう！」

(写真10)

■日 時 8月22日(日)

10:00~12:00、13:30~15:00

■会 場 特別陳列会場

■講 師 竹内伸子氏(絵手紙作家)

■参加者 第1回:26人、第2回:24人

■内 容

小学生を対象として実施した。講師の指導により、アリスとミス徳島を題材にした絵手紙(ハガキ)を作成した。里帰りへの感謝の念を示すとともに、今後の交流につながることを期待して、参加者1人につき1通ずつMACに送った(17~21ページ



写真10 観察しながら絵を描く子どもたち

参照)。

(f) ワークシートの作成・配布 (写真11~13)

子どもの観覧を助け、楽しみながら学んでもらうという趣旨でワークシートを作成した。A4判両面カラー印刷で、それぞれの面を第1部用(巡回展「海を渡った人形と平和への願い」でも使用可)、第2部用とし、いずれも各3問のクイズ形



写真11 ワークシート (第1部用)



写真12 ワークシート (第2部用)



写真13 豆本になったワークシートやシール

式とした。折りたたむと豆本になるようにし、工作的な要素も盛り込んだ。

内容は、小学校高学年なら自力で解答できることを前提に、展示を見て考えることを重視して、考えたこと、感じたことを自由に記入する形式を中心とした。ただし、過去の経験から、幼児や低学年の子どもの利用も多数に上ると予想されたので、保護者と子どもがいっしょに利用する場合も想定した。会場受付で配布と答え合わせを行い、完答すれば、シートにシールを貼った。

(g) ハンズオン・コーナーの設置

(写真14~18)

子どもからおとなまで触れて学べるよう、大テーマごとにハンズオン・コーナーを設置した。

第1部では、ミス三重の会から提供された紙芝居や人形交流が行われた時期の小学校教科書(復刻版)、関連図書を閲覧できるようにした。紙芝居については、観覧者が自由に演じて遊ぶことが



写真14 第1部のハンズオン・コーナー



写真15 スケッチ作品の展示コーナー

できるよう、舞台や拍子木なども配備した。

また、「どの人形がすき？」というタイトルと額縁を印刷したケント紙を常備し、自由に展示資料のスケッチができるようにもした。作品は、会



写真16 スケッチ作品の一例



写真17 塗り絵



写真18 第2部のハンズオン・コーナー

場壁面に順次展示した。さらに、幼児でも楽しめるものとして、アリスとミス徳島をもとにした塗り絵を用意した。

そのほか、資料の少ない徳島県内の「青い目の人形」について、観覧者からの情報を得られることを期待し、自由に記入できるカードを用意した。

第2部については、戦時中の教科書（復刻版）、戦場の経験が綴られた手記、徳島大空襲被災遺物（空襲時の熱で溶けた後、固着した磁器片）に触れることができるようにした。

(h) 徳島市渋野小学校5年生の校外学習

(写真19)

- 日 時 9月2日(木) 12:30～15:30
- 会 場 特別陳列会場
- 参加者 34人(児童31、教員3)
- 内 容

この特別陳列は、会期を概ね夏休み期間に合わせたことから、遠足などの学校行事での利用には適さなかった。そのような中にもかかわらず、渋野小学校から平和学習及びキャリア教育（博物館の仕事）の一環としての来館希望をいただいたので、受け入れた。子どもたちは、ワークシートの活用や学芸員による解説を伴いながら見学した。

プロジェクトにおける普及交流事業とは性格を異にするが、あわせてここに記録した。



写真19 学芸員の解説を受けながらの見学

(5) 所感

慌ただしく、そして盛りだくさんの展覧会だった。そう感じるのは、ミス徳島の里帰りがオープン直前であったこと（9ページ参照）や、2室をつないで開催するというやや大規模な展示であることから準備の作業量が多くなったためである。さらに、会期中には普及交流事業を多数行い、週末には概ね何らかの行事を行っているような形態になったことも理由であろう。

各種の普及交流事業のなかでも、紙芝居、邦楽演奏会、絵手紙作成、招待遠足などは、当館では経験のない試みでもあったが、実行委員会のメンバーやアドバイザー、その他多くの方々の協力を得て、充実したプログラムを展開することができた。とくに絵手紙作成は、じっくりと資料に向き合うことにつながるがよく分かり、今後の活動にも活かせるものであったと思う。

子どもを中心とする若い世代の関心を惹きつけるため、「青い目の人形」アリスと答礼人形ミス徳島のイラストを多用し、人形の愛らしさを強調することで誘導を図った。そのせいか、人形交流を紹介した第1部には女性や子どもの関心が向けられがちで、第2部のほうは戦争経験者を中心とする高齢者の関心が強かったように思う。もちろ

ん、第2部を観覧した人たちは年齢・性別を問わず、展示された資料や同行した家族等との会話から、戦争の残酷さについて考える機会になったように見受けられたが、展示全体の一体感は十分ではなかったのかもしれない。

別に触れたように（7ページ参照）、今回の展示は当館にとっては、1995年以来、15年ぶりとなる戦争展であった。観覧者の様子を見ながら、この間の戦争経験者の高齢化を実感した。今後ますます、戦争体験の継承は困難になっていくであろう。それだけに、実物資料やデータを収集している博物館は、積極的に戦争体験の継承と平和学習に貢献していくべきであろうし、取り組み方を検討していかなければならないと考える。

ところで、会期中、ボランティアを買って出てアリスをテーマにした紙芝居の持参・上演をしてくださった方、飛び入りで楽しく紙芝居を演じてくださった方、展示がきっかけとなって資料を寄贈くださった方などがいた（写真20・21）。ほかに、広報に協力くださった方も多い。当館及び実行委員会だけでなく、県民のみならずにも運営にかかわっていただけた展覧会となったと思う。支援いただいたすべての方に心から感謝申し上げます。



写真20 取材に来た徳島北高校放送部員が紙芝居に挑戦



写真21 会期中の寄贈資料を紹介したコーナー

絵手紙ギャラリー

ワークショップ「絵手紙をかこう！」に参加した子どもたちが描いた絵手紙を掲載した。あわせて、講師の竹内伸子氏、事業アドバイザーの染川香澄氏の作品も掲載した。

子どもたちの絵手紙はすべて、ミス徳島を所蔵している MAC に送った。これに対し、ウォールとシェルマンの両氏から電子メールでメッセージが届いた。

☆☆☆☆☆☆☆☆ 子どもたちの作品 ☆☆☆☆☆☆☆☆



大杉 さくら



賀川 和葉



賀川 健介



金田 まなみ



金田 あやみ



河野 響稀



河野 桜季



後藤 梨沙



佐藤 溪



土井 望雪



土井 健太郎



中村 太一



新居 小春



新居 千夏



新居 明果



原内 あすか



原内 雄基



原内 大輝



日野 緋奈



福島 奈緒子



福島 崇人



松浦 愛天



宮武 優太



宮武 駿太



山本 拓実



山本 あかり



吉原 幸恵



和田 さやか



和田 あいか

☆☆☆☆☆☆☆☆
事業アドバイザーの作品

染川 香澄

☆☆☆☆☆☆☆☆





講師の作品 竹内 伸子



MAC からのメッセージ

バレリー・ウォール氏より

The hand made postcards arrived! They are so charming! I have shared them with Brooke, as well as the others on staff who are familiar with the project and hold Miss Tokushima dear.

ブルック・シェルマン氏より

Valerie showed me the picture cards you sent to us, they are wonderful! I am hoping they can be shown with Miss Tokushima when she returns to us.

特別陳列「海を渡った人形と戦争の時代」をめぐる批評と感想

徳島県立博物館の特別陳列「海を渡った人形と戦争の時代」を考える

東京大空襲・戦災資料センター戦争災害研究室主任研究員

山辺 昌彦

全体的評価

徳島県立博物館の特別陳列「海を渡った人形と戦争の時代」を2010年7月17日に見学したが、その感想と関連して考えたことを、博物館から提供された準備関係資料をも参考にして、書いていきたい。

まず、最初に確認しておきたいことは、実力をもった県立博物館の展示として、地域に密着しながら、適切な資料を選んで、よく整理して配置し、完成度の高い、優れた展示会であったことである。趣旨としても、戦争の時代を、それがもたらした苛酷さや悲惨さを中心に批判的に紹介し、平和の尊さを再認識し、平和の意義を改めて考えるというものであった。

近年の県立博物館の本格的な戦争展示としては、2005年の山形県立博物館「戦争と子どもたち—学校・暮らし」、2006年の長野県立歴史館「戦時下の子どもたち—信州の15年戦争」、群馬県立歴史博物館「子どもたちと戦争」、2008年の愛媛県歴史文化博物館「愛媛と戦争—伝えたい戦争の記憶・平和な未来へ」などがあり、その延長線上に位置付けられるものである。

その上で、特徴的なことは、「人形が結んだ友情—『青い目の人形』と答礼人形」と「戦争と暮らし」という事実上、2つの展示会を同時に開催したという点にあるといえる。もちろん、友情と平和の使者として送られた人形が、虐待された戦争の時代ということで、繋いでいる。特にトピック展示1「戦争と人形たち」がその役割を果たしていた。

「人形が結んだ友情—『青い目の人形』と答礼人形」について

ここでは、徳島県関係の、青い目の人形と答礼

人形とを一緒に展示したことに、まず特色がある。青い目の人形は徳島のアリスが主展示となっているが、パスポートなど付属資料もよく残っている。さらに、徳島だけでなく、愛媛県に残る3体、高知県に残る1体と、四国に残る青い目の人形も集めている。答礼人形「ミス徳島」は1988年に1回里帰りし、「そごう」で展示して以来、約20年ぶりということであるが、こちらも道具類も展示している。ここでの展示は、人形を中心資料として際だつように配置し、付属資料もきちんと揃えて、資料を大事にし美術展示のようでもあり、重々しい雰囲気での展示であった。人形交換の意義や平和が破られ、戦争になって、特に交換人形が日本で虐待されたことも、もちろん伝えている。

「戦争と暮らし」について

こちらは、一般の平和のための戦争展という感じで、私には親しみやすい展示であった。総合的な内容構成であり、しかもほとんどが館蔵品であり、地域の戦争を伝える資料中心に展示していた。

この中は「昭和初期の暮らし」「戦場へ」「戦時下の暮らし」「1945年7月4日 徳島が焼きつくされた日」に大きく分かれている。「戦場へ」は「徳島の軍隊」「戦争の拡大」「兵士たちの足跡」などに分かれているが、ここでは、県内の軍事施設建設関係資料、「満州事変」開始直後の「大日本関東軍司令官の布告」、戦死した兵士の遺品などが目立った。

「戦時下の暮らし」は戦意高揚、苦しい生活、防空、戦争と子どもなどについて、それぞれの実態を系統的な資料配置で的確に伝えていた。その中でも、徳島市から疎開した学童がつくった「特攻隊ニツツケ」などの紙芝居や、徳島の真光寺の疎开学寮で大阪市立南恩加島国民学校からの疎开学童16人が火事で焼死したことを、お寺や地元、そして大阪市立南恩加島小学校の児童が追悼を続けていることの紹介が印象的であった。

「1945年7月4日 徳島が焼きつくされた日」と題した徳島大空襲の展示は、アメリカ軍の伝単、

爆弾、被災品、被災写真などを、数多く展示していた。その中でも、工場罹災報告書、出土した被災遺物の展示や、アメリカ軍の作戦任務報告書の内容を詳しく紹介することで、徳島市空襲の実態を伝えようとしていたことが特徴的であった。

なお、他地域では、戦後65年の2010年ということで、岡山市デジタルミュージアム・平塚市博物館・熊谷市立図書館郷土資料展示室などが充実した空襲展示を開催していた。

前回（戦後50年の企画展「戦争から豊かな未来へ」）との比較

徳島県立博物館にとって、このような戦争展示は、戦後50年の1995年以来、15年ぶりである。戦後50年の1995年には、多くの地域博物館で平和の視点から戦争展示があり、博物館の戦争展示が形態的にも内容的にも確立する画期となった。¹⁾

そのうち、本別町歴史民俗資料館・蕨市立歴史民俗資料館・豊島区立郷土資料館・八王子市郷土資料館・福生市郷土資料室・栗東歴史民俗博物館・桜ヶ丘ミュージアム・四日市市立博物館・向日市文化資料館・大山崎町歴史資料館・箕面市立郷土資料館・福岡市博物館などのように、2010年の現在まで、毎年のように継続して、戦争展示を開催している博物館もある。

また、江戸東京博物館・室蘭市民俗資料館・日立市郷土資料館・水戸市立博物館・熊谷市立図書館郷土資料展示室・葛飾区郷土と天文の博物館・新宿歴史博物館・台東区立下町風俗資料館・川崎市市民ミュージアム・平塚市博物館・沼津市明治史料館・知立市歴史民俗資料館・宇治市歴史資料館・和歌山市立博物館・鳥取県立博物館などの地域博物館が、戦後50年と戦後60年の2005年に戦争展示を開いている。このうち江戸東京博物館・熊谷市立図書館郷土資料展示室・平塚市博物館などは、戦後65年の2010年にも戦争展示を開催している。しかし、戦後60年の時ではなく、戦後50年と戦後65年に戦争展示を開催したところも、徳島をはじめ、板橋区立郷土資料館・八潮市立資料館などがある。

徳島の場合、戦後50年の時の企画展「戦争から

豊かな未来へ」では、「この戦争では数多くの日本兵が戦死するとともに、アメリカ軍の日本全土にわたる空襲や原爆投下などによって、多くの尊い生命も失われました。一方、日本は、この戦争で戦場となった中国などのアジアの国々をはじめ、日本の植民地であった朝鮮半島などの人びとに対して、苦しみをあたえ、大きな犠牲をはらわせた。（中略）改めて、悲惨な戦争の歴史を正面から見つめ、歴史の教訓から、永遠の平和をもとめなければなりません。」という趣旨で開催され、南京事件、731部隊、毒ガスを生産していた大久野島、抗日運動、沖縄戦、日本各地の空襲、原爆などの資料を、他の博物館などから提供してもらい展示していた。

前回に比較すると、今回は館蔵資料の展示が充実し、より地域に密着した展示になった点の変化であるが、加害展示がほとんどなくなった点は、もうひとつの変化である。これらの点は、他の地域博物館における戦後50年の展示会と戦後60年の展示会を比較した時と同じような傾向といえる。

注

- 1) 拙稿「地域の歴史博物館における戦後五〇年関係の特別展・企画展の概観」（『歴史科学』第147号 [1996年] 所収）



徳島県立博物館の企画展「戦争から豊かな未来へ」（1995年）の図録

観覧者の声から

徳島県立博物館特別陳列「海を渡った人形と戦争の時代」の会場にアンケート用紙を置き、観覧者に自由に回答していただいた。ここでは、アンケートのうちの自由記入欄の内容を年齢階層別に配列した。展示がどのように受け止められたかがうことができるだろう。

なお、用字、文体等は原文のままにしてあるが、文意を理解しやすくするために句読点を補った場合がある。

1 小学生以下

- 日本とアメリカが戦争したことが、テレビとでよくわかった。
- アメリカとのつながりを感じた。
- 人形のことがよくわかった。
- いろいろせんそう時代の事が分かった。
- せんそうのかなしみやくるしみがわかった。学校のじゅぎょうのやくにたつと思う。
- 昔のつかっていた物が見れて、よかった。
- 人形のことをいろいろしれてよかった。クイズがおもしろかった。
- クイズがむずかしかった。
- しらなかったことがいっぱいしれてよかった。
- 日本とアメリカが戦争してくわしい事が、わかった。
- クイズがあったので、すごくちゅうもくして見る点が分かりやすかった。
- 本物の人形などがあってよかった。
- せんそうはかだとおもいました。
- 戦争はもうおきてはいけないと思いました。
- 戦争は前から思っていたけどあらためてではいけないと思った。
- ミス徳島がみえてよかった。
- 絵を書いたりするのが楽しかったです。
- 戦争のつらさをまだ分かっていないひとがいると思うから、この展示はやめない方が分かってもらえる。
- べんきょうになった！
- 昔の事が知る事ができてよかった。

- 戦争のてんじ物の中には家にあるものがあった。人形がとてもきれいだった。
- 文がわかりやすかった。またみにきたいと思った。
- ほとんどよかった。

2 中学・高校生

- 戦争の中でもちゃんと人権を考えられる人がいたんだと分かってよかった。
- 当時の徳島のやばさがすごかったです！徳島のは見たことなかったのでも役立ちました!!
- とても人形が近くで見られてよかったと思う！
- 当時の人の使っていたものがリアルに見れて心が苦しくなりました。
- 見たことのない、めったに見られないものが見れて良かったです。
- 学校の宿題にします。
- 人形を使うことによって、戦争の悪さがさらによくわかった。
- 知らなかったこといっぱいあった。

3 19～24歳

- 幼い子もたくさんいて、昔あった本当のことを誰もが知る機会を提示するのは、大切ですばらしい展示だと思いました。
- 絵かきコーナーがあり、紙しばい、テレビなど子どもにもわかるように展示されていてよかった。
- アメリカ兵が空襲予告のビラをまいていたということに驚きました。確かに民衆に味方だと思わせ降伏を説得することは有効でしょうが、それを受け入れることは社会的に非常に困難だったのだらうと思います。
- 戦争のことを知ることができて、よかった。これからは学んでいきたいと思う。
- 人形の事を初めて知りました。

4 25～34歳

- 初めて戦争の遺品に触れられて、よかった
- 日米の交流史を学ぶ上で、ユニークなそしてとても大切なテーマだと思いました。人形と戦争は反対のようで、実は深いつながりがあるのですね。

- もう少し子供にも分かる様にしてほしいです。
 - 兵隊さんの日誌など読めたら、もっとよかった。字が小さいし難しいのでゆるされる範囲でよいので、大きくしたり、わかりやすく書いたものを展示してくれたらよかった。
 - かわいらしい人形だと思った。その背景にある悲しみも伝わってきた。
 - 子供と一緒に楽しめるのが良かった。
 - 貴重なお人形が見られ大変良かったです。
 - 戦争体験記や貴重な寄贈品を展示していただき、感謝します。
 - 徳島空襲のことや人形のことあまり知らなかったがいろいろ紹介されてよかった。
 - 戦争を知らない、昔話のようだと思っていました。日本の歴史の一つだという感覚でしたが、体験者のノートなど、より現実味を持って見ることができました。戦争を体験した人の貴重な話をもっと大切にしていくなさだと思ったし、世代を越えて交流していく必要があると感じました。
- 5 35～44歳**
- 人形→戦争への表現がうまく伝わりました。
 - 良かった点：当時の事がらがりアリティにイメージできました。いかに愚かであったかを確認できた。悪かった点：今の現代、この展示の意味意図が理解できるわけがないであろう。残念であるが、もう無意味であろう。
 - 知らなかった本当の戦時下での生活をかきまみる事が出来た。
 - 戦争体験していない娘とともに、私も当時の大変さなどを感じることができました。アリスの他にも何体かの人形が残っていたこと、うれしく思います
 - ミス徳島の里帰りを実現したのはすばらしいと思いました。
 - 人形を通して子どもも戦争平和について考えるきっかけとなった。
 - なかなかこんなゆっくり戦争について考える機会がないので、とても参考になりました。ありがとうございました。
- あどけない人形がたどった年月を考えると、罪がないのに壊されたり捨てられたりした中を、しっかりと今まで保存されたのだと感慨もひとしおだった。当時の小学生が異国の人形なんか焼いてしまえだとか、それを大人がまじめに新聞に取り上げるのが愚かでこういう視点で戦争を考えるのも目からウロコだった。映画にしてもおもしろいと思う。
 - 戦争・平和について大切なこと、現実には徳島でもあったことと感ずることができた。平和を守っていけるようにみんなで行きたい。地球平和になるといいなと思う。
 - 実際に目で見て戦争中の事が良く分かった。若い世代の人にもっと見てほしい。
 - 人形から生々しい戦争のじつたいがみれた。徳島の町は本当にめちゃくちゃだったんだ。写真は生々しくわかりやすかった。
 - 戦争は絶対ダメ！
 - 夏休み中には戦争の歴史を振り返ることのできる展示をお願いします。
 - 現代なら友好交流のために何が贈られるだろうか？と疑問に思った。
 - 人形だけかと思いきや、戦時中の貴重な資料などたいへん感じ入りました。
 - 戦争前中後のくらしがわかったのがよかった。
 - 新聞で読んだ「神領小の女性教師とその教え子が命がけで人形を守った」というエピソードが知りたくて来ましたが…。気がかりのままになってしまいました。しかしじっくり観れてよかったです。
- 6 45～54歳**
- 戦争なんてわからない世代として、こういっただのを見て少しは感じられていいと思います。青い目のお人形は…という歌がわかる世代は何才ぐらいからなのかなと思いました。
 - 平和が一番です。
 - ミス徳島と戦争を関連づけているのはすばらしい。小中学生に夏休みの課題として、とにかく見ることをすすめたい。
 - 第一部の人形で、身近なものから平和について

考えられ、第二部でもくらしに密着した展示でわかりやすく、子どもと一緒に来たけど子どもにもわかりやすかったようです。毎年戦争展やってほしいです。

- 次回楽しみにしています。
- 戦時中の人々の心がよく感じられた。
- 昔の徳島の写真や戦争の悲しさがよくわかる。もう一回見にきたい。ミス徳島は何故か少しさみしそうだ。とてもよかった。
- 青い目の人形についてと戦争に関わる写真がセットになっていて、平和の大切さについて説得力があると思いました。ありがとうございます。
- 戦争をはさんで、日米親善の変化があるのがわかった。米国から送られた人形はきれいに保存されていた。
- 改めて戦争をしてはいけないという気持ちになりました。ミス徳島の今にも動きそうな愛らしさが心に残りました。
- 少し違ったところから戦争を考えるきっかけになった。今後も何度もこのような企画をしてほしい。ありがとうございます。
- 関東より引っ越して来て、関東での歴史しか知らなかったが、地域ごとの戦争の歴史を知ることができました。まだまだ知らないことの多い徳島を知るためにもこの様な展示会、イベント等を行ってほしいです。

7 55～64歳

- 戦争はいけないと思いました。
- 体験記は特に興味深かったです。又、徳島の空しゅうの予告がされていたびら等、本当によくわかり貴重な資料だと思いました。
- 戦争の現実を静かに考えさせられました。
- 戦争のこわさ、むごたらしさが人間だけでなく、すべてのものにかかわることを思い知らされました。ありがとうございます。
- 身につまされる思い。
- 空爆前のその後の写真にとっても見入ってしまいました。
- 戦争時の様子が資料や物品等を通して生々しく

知る事が出来、貴重な品々を見せていただく事で大変勉強になりました。人形共に大切に保管されているのに驚きました。

- 目で確認することによってより強く記憶に残った。
- 真光寺の（地蔵さま）場所はどこでしょうか？徳島県内？知りたかったです。
- アメリカのちらしをもう少し見やすく（大きく）して欲しかった。戦争時アメリカ側はどうだったか知りたかった。
- 胸がつまる思いです。戦争は本当になくさないといけないと思います。
- 家族孫と先月来てよかったので今月はお墓参りをして足を運びました。
- 徳島大空襲の事がよくわかりました。是非父母をつれてきたいと思います。
- 夏休みということでこういう展示を機会に平和教育を文化の森でも開催すると良いと思った
- 平和ボケした最近の自分を、大いに反省した。
- 以前に話で聞いた事があり、実物を見るのが楽しみでした。本当に見ることができ満足です。日本の文化のすばらしさを再発見しました。とともに平和であることに感謝し、戦争は絶対にしてはいけないと思いを新たにしました。有難うございました。
- 言葉では言いあらわせない心に感じるものがあった。
- 大変貴重な資料を集め展示して頂きありがとうございました。企画実行された方々に深く感謝いたします。
- 戦争時代の色々な苦労等がよくわかりました。

8 65～74歳

- 非常によかった。帰って家族にも伝えたい。いろいろ話し合いをしたい。
- 幼少2才の頃のことなのでなつかしくよみがえる。第2室の写真（市内）がなつかしい。親が生きていたら見せてあげたかった。人形の着物が立派で、大事に保管されていることに感動した。素晴らしい展示でした。ありがとうございます。

- 何とも表現のしようのないかわいいミス徳島に出会えて幸せな気分になりました。当時一流の人形師の方が心をこもった素晴らしい人形をつくり、アメリカへの答礼人形として贈ったことに敬意を表したい思いです。調度品も素晴らしく、人形共に全くいたみがないことも驚きでした。無料の素晴らしい企画をして下さった博物館にも感謝。多くの人に観て欲しいです。
- 人形と戦争の様子と一緒の展示がよかった。
- ミス徳島を実物が見られてよかった。とても可愛く美しかった。戦争のこと徳島の戦災説明していただいてよくわかりました。
- やはり特に戦争などは風化させない事が大切。いつまでも後世にありのまま云い伝えたい。
- 平和の大切さを強く感じた。今もある民族的対立、どう克服するか問題。
- 戦後65年にもなり遠い出来事ですが、小学校4年で終戦。学童疎開8ヶ月、四国へ転校して2ヶ月後に戦災を受け徳島の田舎っ子とのたたかい。言葉・腕力。今仲好しです。
- よかったと思います。なつかしいことがたくさんありました。
- 実物（人形）を通して日米友好の様子がよくわかった。印刷等の資料より訴えているものがある。このような方法で小さい子供に平和の大切さを知ってもらいたい。
- 人形にも悲しみがあった事が分かった。戦争の事を知らなくて、この徳島もいろいろ大変な目にあったようですね。
- 戦争に寄って大変悲しい体験をしたお人形に私も想像して悲しくなりました。でもこれからいろいろな人々に見て頂いて楽しいお顔になっていくでしょうね。
- 「海を渡った人形」と「戦争の時代」を同時に見られ、とても感動しました。
- 80年以上も前に海を渡った人形が、再び日本の地を踏むことを実現させたこの展示会は素晴らしかった。戦時中のいろいろな物も懐かしく拝見しました。
- 色々な資料を沢山集められて大変感動しました。
- 昔を思い出し、父母の苦労をおもい写真を感慨

深く見ました。江口昭氏遺品のご両親に宛てられた遺書はとても立派なもので涙が出ました。

- 戦後の様子がわかった。私は5才だったので少し覚えているだけだった。
- 昔の現品を見れてよかったです。
- すばらしく思います。そして今の自分の幸せをあらためて大切にしたいです。
- アメリカによる空襲も先に予知されていたのに受け入れずに落とされた、後の悲惨な戦後があった事…考えさせられました。
- よい勉強になりました。
約25年前の文化の森用地造成中のことを思い出しつつ戦後65年を振り返ることができました。
ありがとう。
- 生身の戦争体験者の手記は御苦労がしのばれました。空襲で母と妹弟を亡くしたので、涙がこぼれて仕方なかった。
- アリスちゃんが一体でも徳島に残っていて本当によかったです。阿部ミツエ先生の勇気ある行動を今、生きている私達も見習って平和のために出来ることをしなければと思いました。

9 75歳～

- 戦争を語る文物が民間にあるのではないか。
- 資料が多くよくあったものと感心しました。人形の長い年月が感じさせない美しさへの感心。ありがとうございます。戦争は今もどこかで行われている。残念です。



じっくり展示を見る観覧者

神山町神領小学校児童の作品

特別陳列「海を渡った人形と戦争の時代」に関連する普及交流事業として実施した招待遠足「アリスの里からこんにちは」（13ページ参照）の感想がまとめられた作品である。

2010年（平成22年）8月10日 火曜日

 	<p>全校生徒がバスに乗って文化の森に行きました。そこは、アリスちゃんとミス徳島の人形が展示していました。はせかわさんと原田さんか人の事や日本とアメリカの事に、分りやすくて教えてくれました。</p>	<p>ミス徳島</p> 	<p>ミス徳島 アリスちゃん 新聞</p>
<p>感想 ハハハ</p> <p>アリスちゃんとミス徳島の事がよく分かりました。日本とアメリカの事もよく分かりました。とても勉強になりました。</p>	<p>アリスちゃん</p> 	<p>大西広華 一日一回 クイズ テーマは「アリスちゃん」</p>	
<p>編集後記</p> <p>私は文化の森に何回も来た事があるけど、ふたたび行けない部屋に入れたのでとても楽しかったです。</p>	<p>たぐさんの化石</p> <p>行った事がない部屋に入ると、石がたぐさんありました。私達は、マンモスの毛ヤアンモナイトや、ふんの化石などを見ました。マンモスの毛は、何かの根っこにも見えませんでした。とても勉強になりました。</p>  <p>アモナイト</p>	<p>アリスちゃんは昔、神領小学校に来ました。すうと、今は何さいでしょう。</p> <p>A 90さい B 85さい C 83さい</p>	

徳島市渋野小学校5年生の感想

徳島市渋野小学校5年生が、徳島県立博物館における特別陳列「海を渡った人形と戦争の時代」を見学した（15ページ参照）際に行った感想を、抄録した。素直な感動や疑問などがうかがえる。

- 人形…人形は、日本とアメリカを仲良くするものなんだなと思いました。戦争で人形をやかれたのは、残念だなと思いました。
戦争…戦争は思ったものよりもすごく大変だなと思いました。食べ物も、イモとかでのりきるのは、大変だったと思います。今の方がすごくいいなと思いました。
- ここに来るまでは戦争の事などは何も知らなかったけど、ここに来て初めてよく知ることができました。昔は日本とアメリカが仲良かったのに、あの戦争があったのは、とても残念に思います。いつまでもアメリカと日本が仲良くしてほしいです。これからは私たちの手で戦争を起こさないようにしなければいけないと思いました。
- ギュリックさんががんばって日本とアメリカが仲良くなるよう人形をたくさん日本に送ったのに最後はうまくいかず、日本とアメリカが戦争をしてしまって残念だと思います。しかも、お金をたくさん集めて作った人形も捨てられたり、焼かれたりして悲しいです。
- お互い仲よくなるための事をしたのに、どうしてなんだろうと思ってます。
その時代に生きていた人たちはとてもつらかったのでしょうか。
- むかしのもののお父さんに聞いてもおばあちゃんに聞いてもわからなかったけど、実際に体験してみて、くわしくわかりました。とくに、アリスやミス徳島のことは全然わからなくて、なかなか情報もとれないのでナゾでした。もっともっと調べていきたいです。質問をしてみた人から聞いたことがすごくくわしすぎて、むずかしかったです。「ギュリックってだれ？」とか思ったけれど、聞いてみると、い

い人なんだなあとと思いました。アメリカから日本へ、日本からアメリカへなんて船で行けてスゴイと思いました。ミス徳島はどんな材料で作られたんだろう？小物まで持ってくるのは大変じゃないかなと思った。写真で見るより、本物で見た方がリアルですごいなと思った。むかしの写真を見てみて、今の子どもより、力があつたり、元気だったんだなあとと思う。今も、アリス・ミス徳島は大切にみつかわれているんだなとあらためて思った。外国から借りたものなので、展示中も大切にみつかわっていることがよくわかった。

- 人形をもらったりあげたりして関係をよくしようと思ったのに戦争が起こったので、今の時代に生まれてきてよかったと思った。これから戦争は起こってほしくないと思いました。
- 戦争は、してはいけないと思いました。戦争はこわいと思いました。徳島大空しゅうがあったとは知りませんでした。びんがとけるほど、すごいねつがあるんだなと思いました。
- 戦争が起こる前は、人形たちも、大切にされていたけど、戦争が始まると、すぐてきの人形になって、やかれたりしたので、戦争はざんこくだなと思いました。
- とても大切な役割をはたす人形なのは、すごいと思いました。アリスは本当に大切にみつかわれているのだろうと思った。大変な時代だったんだなあとと思った。
- ギュリック宣教師がていあんして、アメリカから日本に人形を送り、日本からアメリカにお礼としてお金を集めて人形を送ったことにすごく感動しました。小学校の先生のきゅうりょうが40～50円なんて、思ってもいなかったのでびっくりしました。

巡回展「海を渡った人形と平和への願い」

つるぎ町会場

実行委員会委員
長谷川 賢二

(1) 会期

2010年9月18日（土）～9月20日（月・祝）

(2) 会場

道の駅 貞光ゆうゆう館（ギャラリー）

(3) 展示の構成

- ① 「青い目の人形」がやって来た
- ② アメリカへ旅立った答礼人形

(4) 観覧者数

1,467人

(5) 所感

貞光ゆうゆう館のあるつるぎ町貞光は、アジア・太平洋戦争末期の1945年1月、大阪から疎開中だった児童29人のうち16人が焼死する悲劇があったことで知られている。毎年1月29日の命日

には、地域を挙げて、亡くなった児童の供養が行われている。そのような土地柄から、戦争と平和をテーマとした展示を開催するにはふさわしいと考え、貞光ゆうゆう館のギャラリーを会場としてお借りした。

ゆうゆう館は観光・交流拠点であることから、多くの観覧者が期待できる週末及び祝日の連続した時期を会期とした。ただし、ギャラリーはオープンスペースであるため、展示ケースの仮設や監視・解説要員の配置など、今までに経験のない準備や調整が必要だった。施設のスタッフには、使用にあたりさまざまな配慮をいただき、とくに支障なく開催することができた。

開催中、近隣地域からの観覧も多く、巡回展に対する期待が高かったことがうかがえた。ミス徳島の精巧さやかわいらしさに感嘆の声が挙がったり、アリスが小振りであることに驚きの声もあったりした。

日常的に博物館とのかかわりの薄い地域であるだけに、博物館活動への理解を広げる機会にもなったと思う。



会場の様子

海陽町会場

実行委員会委員（海陽町立博物館）

郡司 早直

(1) 会期

2010年9月23日（木）～10月3日（日）

(2) 会場

海陽町立博物館（エントランスロビー・企画展示室）

(3) 展示の構成

①巡回展

「青い目の人形」がやって来た／アメリカへ旅立った答礼人形

②原田一美著『青い目の人形—海を渡った親善人形と戦争の物語—』挿絵原画展

(3) 観覧者数

360人

(4) 普及交流事業

(a) 紙芝居「青い目の人形アリスちゃん」の上演

■開催日 9月24日（金）・9月28日（火）・10月2日（土）

■講師 町内の読み聞かせのグループ「にもの会」

■参加者 117人

9月24日（金）10:30～ 海南保育所（24人）

9月28日（火）10:30～ 海陽幼稚園（53人）

10月2日（土）13:30～ 一般（26人）

15:00～ 一般（14人）

(b) 「発見！ふるさとの伝統文化」現地講座（徳島県教育委員会主催）

■開催日 10月3日（日）

■講師 郡司早直

■参加者 26人

10月3日（日）14:30～ 行事のなかで巡回展の展示解説も併せて行った。

(5) 所感

当館での巡回展を振り返り、良かった点について最初に述べてみたい。

1) 10日間の短い会期中に土・日・祝祭日が5日あった（敬老の日と土日2回）ことは、巡回展の開催にプラスであった。たとえば、会期中に一般の団体の来館者は、初日の敬老の日と最終日の日曜日にあったが、来館者には常設展と巡回展の二つの展示を観覧していただくことができた。団体には学芸員による巡回展の展示解説も行い、県内外からの来館者に巡回展の内容を知っていただく機会になったことは幸いであった。

2) 紙芝居「青い目の人形アリスちゃん」の上演が決まり、当館に隣接する海陽幼稚園や海南保育所の子どもたちが先生の引率で来館し、博物館との交流の機会が生まれたことは有意義であった（写真1）。1927年にアメリカから贈られた青い目の人形が、小学校のみならず幼稚園にも配布された経緯を踏まえると、小学校に上がる前の子ども



写真1 紙芝居を見る子どもたち



写真2 高岡美知子氏の来館

たちにアリスのことを知ってもらえたことは良かったと思う。また、紙芝居の上演にご協力いただいた町内の読み聞かせのグループ「にもの会」から、今後とも当館との連携で子どもたちと交流できたら嬉しいとの話をいただいたこと、答礼人形研究家の高岡美知子氏（実行委員会委員）が当館までお越しになり、町内の方とも交流ができたこと等も印象的な出来事であった（写真2）。

3) お絵かきや塗り絵をとおして、子どもたちにアリスとミス徳島をよく見てもらえたこと、また、他県等の答礼人形と比較して楽しんでいる様子や、塗り絵をした小さな子が絵を描いている子を見て、自分も描いてみようかとチャレンジしていたこと等、微笑ましい場面がたくさん見受けられた（写真3・4）。会期終了後にまた人形を見たいと言って来館した何人かの小学生もいた。また、町内の小学生全員と先生方には、徳島平和ミュージアムプロジェクトのパンフレットと学習シート一式を普及活用役に役立てていただくために配布することができた。



写真3 お絵かき等をする子どもたち



写真4 子どもたちが描いた絵より

4) 『広報海陽』No.53（2010年9月1日 海陽町発行）の裏表紙に、当館巡回展のお知らせが全面カラーで掲載されたこと。町内すべての家庭に配布され、公の定期刊行物に掲載されたことで、後世、記録としての意味においても貴重な一頁になったと思われる。

次に、開催全般をとおして気づいた問題点に触れてみたい。

1) 紙芝居の上演中に来館された方々に対する配慮に欠けていたことが挙げられる。これらは、保育所や幼稚園の子どもたちが紙芝居を見ていた時間に起きたことであったが、一つは上演中に来館された方が、職員が気づく前に常設展示の一部の解説ボタンを押されたことによって音が反響し合い、紙芝居の上演に影響がでたという内容である。幸いなことに、紙芝居のお話が終了する手前での出来事であったのが救いであった。もう一つは偶然上演中の時間に、ある小学校が他の行事のついでに来館され、小学生らの話し声が紙芝居の上演に影響すると考えられたため、慌てて小学校に注意を促したことである。後者のケースの場合、玄関受付横のエントランスロビーで、アリスやミス徳島と恐らくは初対面した、まさにその瞬間に注意を促したので、楽しみにしていたと思われる子どもたちや引率の先生の気持ちに負の影響をもたらしたことは否めないと思う。上演中は音声付きの装置の電源を切っておく等の細かい配慮が必要であったし、上演中であることがわかる大きな表示等を設置して、事前に周知を徹底しなければならなかったであろう。

2) 巡回展の展示会場を、エントランスロビーの一部と企画展示室とを一続きの会場にする形で設営したが、アリスやミス徳島を中心としたエントランスロビーの展示に比べて、企画展示室の展示は会場の照明が多少暗いこともあってか、やや目立たなかったという印象があった。来館者の中には、アリスやミス徳島の展示の方は見ても、企画展示室の展示を見過ごされた方も中にはおられたのではないかと危惧する。展示会場図を示すことや、順路表示にもっと工夫が必要であったと思う。

3) 町内を中心とする小学校や中学校等への巡回展の具体的な内容についての周知が遅れ、学校行事に組み入れていただく余裕が十分になかったと思われることも挙げておきたい。『広報海陽』にて各家庭に巡回展のお知らせをした後、できるだけ学校からの引率によって巡回展を見学してもらえるように、町内の小学校と中学校に周知や啓発を兼ねてのお願いにまわったが、残念ながら児童や生徒の来館は少ない結果に終わってしまった。ちょうど運動会や体育祭の学校行事と重なったこともその理由の一部にはあったと思われる。10月2日(土)には紙芝居を2回上演する催しも組んだので、町内には防災無線を使ってお知らせし、一人でも多く巡回展に来てもらえるように、できる限り周知に努力した。

巡回展において当館で工夫したことを次に挙げてみたい。

1) 原田一美著『青い目の人形 ～海を渡った親善人形と戦争の物語～』の挿絵(榊田務・鎌田邦宏)に使われた貴重な原画一式を展示できたことを筆頭に挙げたい。これらの原画の公開は初めてで、本を読まれたことのある方々にも原画をご覧に入れることができ、青い目の人形アリスのお話をより身近に感じていただけたのではないだろうか。原画一式をそれぞれ当館所蔵の等しいサイズの額に入れ、壁面にストーリーに沿って説明しやすいように展示してみた(写真5)。この原画の展示をご案内していた時、かつて町内の高校で榊田務氏に教わったという方が、氏のことを懐かしそうに話してくれたことや、県立博物館の展示



写真5 原田一美著『青い目の人形』の挿絵の原画展示より

を観覧後に当館の巡回展をご覧になった方から、当館に来て原画を見ることができて良かったと言われたことも嬉しい話題であった。原画は、巡回展の二つの会場(当館と松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館)で展示することができた。

2) 巡回展の会場面積が企画展示室一室だけでは足りず、エントランスロビーの一部も利用して、有料の常設展示場との間にパネルを数枚立てて仕切り、巡回展との会場を明確に区別した。館の入口の正面には、アリスとミス徳島の2体を一つの大きいエアタイトケースに並べて陳列し、巡回展の顔となる2体の人形の展示が引き立つようにした。

3) 保育所と幼稚園の子どもたちには人数が多いことを配慮し、パネルで仕切られた常設展示側のエントランスロビーの広い場所で紙芝居を見もらった。小学生未満は常設展示も無料なので、良い選択であったと思う。また、一般向きに上演した2回の紙芝居は、企画展示室に会場をつくり、天井に吊り下げた展示用のバナーがちょうど間仕切りの役目になって、狭いながらも落ち着いた空間をつくり出すことができたように思う。

4) 広報誌の紙面づくりや看板づくりにあたっては、子どもにも大人にも親しみをもってもらえる、誰もが内容をイメージしやすい題材を選んだ。具体的に言うと、平和の象徴であるハトが人形を運ぶイラストや、海を渡って生まれたところに帰ってくるカメのイラスト等を入れ、背景に地元海陽町の大里海岸を撮影した画像を使用した(写真6)。

最後に、新たな経験となったことについて記し、



写真6 巡回展の看板(左)と広報記事

当館における巡回展の報告を締めくくりにする。

1) 少人数のスタッフで、搬入日を含めて2日間の短い時間で展示会場を設営したことは、大きな自信につながった。集中力と忍耐力、チームワークの大切さを改めてこの仕事をしてみて強く実感した。展示作業はある意味地味な裏方作業といえるだろう。できることから早めに着手し、最後に何とか形が出来上がったあの時の達成感は、他に置き換えられぬような感覚を味わうことができた。

2) 個人的なことで恥ずかしいが、青い目の人形のことに関しては、今まで歌の歌詞やメロディーでしか知らなかった。この機会に歌の背景にある人形交換に関わる歴史をいろいろと学習できたことに感謝している。

3) 日米間の戦争により大半の青い目の人形が失われたなかで、わずかに生き残った人形の展示をとおして、戦争から守られた資料が今日もなお人々に感動を与え続けてくれることに気づかされた。当館には、同じように戦争をくぐり抜けて現在に伝えられてきた日本刀等を多数展示、収蔵しており、戦争で失われた数多くの遺産についても改めて考える良いきっかけを与えていただいたものと思う。

4) アメリカの博物館からも資料をお預かりし、他館との連携、国を越えての博物館の仕事を通じて、自身の所属する博物館以外に対しても興味関心を広げることができたように思う。

この度ミス徳島の里帰りプロジェクトに参加したことで、平和の尊さを再確認できた。これからは学芸員としてだけではなく、一人の日本人として平和の尊さを後世に伝えていきたいと思う。ミス徳島には、アメリカに戻ってからも、二度と戦争の過ちを冒すことのない平和な世界への願いを伝えるメッセンジャーとして長生きしていただきたいと思う。

松茂町会場

実行委員会委員(松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館)

松下 師一

松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館

船井 由美子

(1) 会期

2010年10月9日(土)～17日(日)

(2) 会場

松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館
(文化財展示室・同室前廊下)

(3) 展示の構成

①巡回展

「青い目の人形」がやって来た／アメリカへ旅立った答礼人形

②原田一美著『青い目の人形—海を渡った親善人形と戦争の物語—』さし絵原画展



写真1 「ミス徳島」展示のようす

(4) 観覧者数

次に掲載する表のとおり。

〔表〕 開催期間中の観覧者数と主な出来事

	月日	観覧者数	主な出来事（取材、団体見学、イベント、など）
第1日	10月9日(土)	42人	徳島新聞が取材（翌日の朝刊に掲載）
第2日	10月10日(日)	78人	新居浜市長寿会が団体見学 徳島市立図書館が取材（図書展示会の参考として）
第3日	10月11日(月・祝)	242人	当館前のグラウンドで松茂町民運動会を開催 淡路人形浄瑠璃館が取材 (人形ゆかりの歴史調査)
—	10月12日(火)	—	(休館日)
第4日	10月13日(水)	294人	喜来小学校6年生（6人）が仕事体験学習「ミス徳島」広報係 松茂小学校2年生（102人）が団体見学 松茂幼稚園年長組（34人）が団体見学
第5日	10月14日(木)	101人	夜間開館日／人形師 人形洋（甘利洋一郎）が見学 人形師 人形尚（吉田尚行）が見学 阿波人形浄瑠璃ふれあい座が団体見学
第6日	10月15日(金)	90人	松茂町視覚障害者グループが来館・展示体験 (音訳ボランティア「まつばざく」が帯同・介助)
第7日	10月16日(土)	180人	関連行事として阿波人形浄瑠璃芝居を公演 徳島新聞社が取材
最終日	10月17日(日)	206人	紙芝居上演（2回公演／14時00分～、15時00分～） お別れセレモニー開催
観覧者合計		1,233人	

（5）普及交流事業等

①「原田一美著『青い目の人形 ―海を渡った親善人形と戦争の物語―』さし絵原画展」

巡回展で当会場の前の会場であった海陽町立博物館のご厚意により、同館が企画された原田一美著『青い目の人形』のさし絵（柘田努・鎌田邦宏画）原画展を開催した。

会期は巡回展と同じ10月9日～17日、会場は巡回展（文化財展示室）前の廊下である。この廊下

には、ギャラリーとして使用できる設備（外光遮光窓、ピクチャーレール、照明設備）があり、その長い形状を活かして左右の壁をUターンして展示資料を見学する順路を組んだ（写真2）。

なお、廊下奥には、原田一美氏と長年交流がある当館初代館長・笹田博之氏（松茂を短歌で残す会 会員）が、協賛の短歌を詠み、それを額装して掲示した（写真3）。

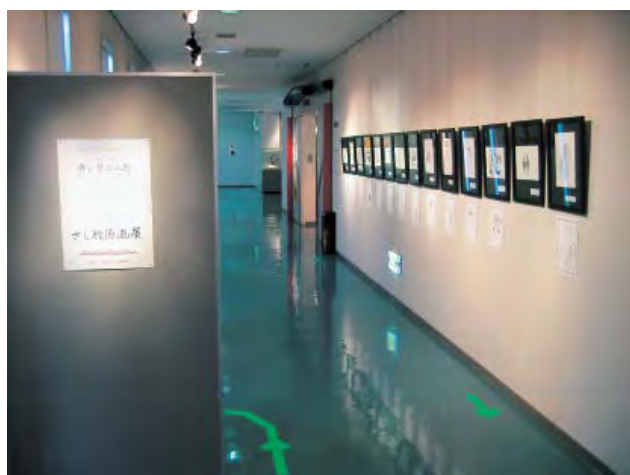


写真2 さし絵原画展の会場



写真3 人形展示を讃える短歌



写真4 紙芝居上演会

② 紙芝居上演会

展示最終日の10月17日（日）、当館研修室を会場に、「青い目の人形」アリス・ジョンストンちゃんをテーマにした紙芝居（原作・原田一美、絵・徳島工業高校〔現・徳島科学技術高校〕）の上演会を開催した（写真4）。

○上演者名

青少年育成アドバイザーの会

○上演時刻と観客数

14時00分～ 観客15人

15時00分～ 観客25人

③ 阿波人形浄瑠璃芝居上演

展示7日目の10月16日（土）14時00分から、当館屋外舞台を会場に、協賛企画として阿波人形浄瑠璃芝居「傾城阿波の鳴門 順礼歌の段」（太夫・三木早苗、三味線・吉岡寿子、人形・ふれあい座）の上演を行った。人形による文化交流・国際交流を意図しての協賛企画である。

さわやかな秋の快晴に恵まれ、巡回展見学のため居合わせた15人の観客が、阿波国（徳島県）伝統の阿波人形浄瑠璃芝居の実演を楽しんだ。

④ 仕事体験学習「1日広報係」

巡回展示の準備に取り組んでいた9月下旬、松茂町立喜来小学校の6年生担任から相談があり、「喜来小学校の特色ある教育として『仕事体験学習』を実施するので、それへ協力して欲しい」と依頼された。当資料館としては、学校と連携して巡回展の学習効果を高める観点から受諾した。

展示4日目の10月13日（水）午前中、喜来小学

校から6年生6名の児童が来館し、巡回展の「1日広報係」に任命した。巡回展をPRするポスター・チラシの作成、学校内での掲示・配布が係の仕事である。

2名ペアで作業を開始し、まずは会議室で相談しながら下書き作成に取り組んだ（写真5）。

続く清書は、実際に展示を見ながら展示室の中で作業を行った（写真6）。ご観覧中のお客様には、ちょっとご迷惑をおかけしたが、児童に「実物の魅力」「ライブ感覚」を体感してほしいと思い、あえて展示室内ワークショップで最後の仕上げとした。

できあがった原画はすぐに印刷して、その日の午後から、6名の児童によって喜来小学校内で掲示・配布された。また、巡回展期間中は、展示室前にも掲示しておいた。



写真5 「1日広報係」下書きの作成



写真6 展示室で仕上げ作業中

（6）所感

① 巡回展を終えて

当初、当館が実行委員会に参加し、巡回展を引



写真7 ご近所お誘い合わせのうえ見学

き受けた理由は、「従来の来館者とは違う客層が、この機会に足を運んでくださるのではないか。」という、ある意味単純な思いつきであった。しかし、答礼人形「ミス徳島」と「青い目の人形」アリス・ジョンストンの苦難の史実を知ることにつれて、またそれら人形に係わる日米交流の歴史（その明と暗）を学ぶにつれて、何か背筋が伸びる思いがした。この事業には、世俗的な「話題性」や「集客力」とは違う魅力、「自由」と「平和」という普遍的価値・哲学的価値を問い糺す魅力に溢れていたのである。

10月9日（土）の展示初日から、観覧者数は順調に増加した。確かに、従来からの当館の利用者に加えて、町外からわざわざ足を運んでくださった観覧者も少なからず確認でき、「話題性」「集客力」に間違いはなかった。また、町内公立小学校もこの事業に素早く反応し、松茂小学校2年生の団体見学と、喜来小学校6年生の「1日広報係」(既述)が実現した。戦争の史実に学び、平和と国際理解を考える教材として、愛らしい2体の人形は、その存在自体が教職員と児童の心を強く揺さぶる「歴史の証拠」であった。

それだけに、2体の人形の生い立ちを語る「展示解説書」と「展示キャプション」の果たした役割は大きかった。時系列に整理され、表現も簡潔にして分かりやすく、観覧者の史実への理解を助け、愛らしい2体の人形の証拠性（実物の魅力）を引き立てていた。事務局（徳島県立博物館）学芸スタッフの努力と工夫に、心からの敬意を表したい。

それと、ちょっとした作業でA4判シートが豆

本に変化するワークシートも好評であった。展示室の中で歴史の証拠を探る「探偵」活動と、シートを本に変える「工作」活動を兼ね備え、子ども達の興味を惹くには十分な仕掛けであった。

さて、巡回展の全体を俯瞰すれば総じて好評であり、実行委員会の取り組み全体に異議を申す点は無いのだが、受け入れた当館として自らを省みれば、2点ほど反省すべき点があったように思う。

第1は、直前までレイアウトが定まらなかった点である。巡回展受け入れ準備のため県立博物館と海陽町立博物館の展示を視察したが、展示室の形状も広さも違い、また搬入可能な資料点数も絞り切れていなかったため、思った以上に展示作業に時間がかかった。最終的に文化財展示室（南側半分）の順路を逆回りにし、展示室前廊下も使用してレイアウトを定めたが、もう少し効率よくできたのではないかと反省している。

第2は、広報に関する点である。開催1か月前の9月初旬から、町の広報誌と行政無線、当館ホームページを利用して広報に取り組んできたが、どうも周知しきれなかったように思う。時期・エリア・媒体について、もう少し工夫できたのではないかと反省している。

② 展示と視覚障碍

展示6日目の10月15日（金）、松茂町内在住の視覚障碍者グループが、音訳ボランティア「まっばぎく」メンバーに伴われて来館した。音訳ボランティアとは、視覚障碍者に行政情報・生活情報を連絡・通知することを目的に、町広報誌などを音読して録音テープを制作しているボランティアグループのことである。ここ5年くらい、機会をみては視覚障碍者の社会参加のため、帯同・介助しながら当館を利用いただいている。

しかし、当館利用に当たっては、根本的に難しい課題がある。「資料館」「博物館」「美術館」という施設は、そもそも「見る」ことを前提にした施設なのである。「見る」ことができない視覚障碍者に、どのように施設の良さを感じ取ってもらうか、これは正直至難の業であろう。

私見を申せば、これは「触る」と「聴く」で代



写真8 木偶人形を触ってみよう



写真9 触感で素材や形状を感じる



写真10 音訳ボランティアによる展示実況

替するしかない（まれに「臭う」もあるかも知れないが）。「触る」ことによって具体的な興味関心・疑問を持った上で、「聴く」ことによって情報・知識を得て理解することが適当であろう。

ただ、今回の来館のきっかけは、「青い目の人形」や「ミス徳島」への関心であったが、さすがに触ってもらうわけにはいかない（すべて借用品であり、私が許可できるものではない）。そこで代わりに、

館蔵資料の中から木偶人形（オープン展示の現代人形師の作品）に触ってもらうことにした（写真8・9）。「ミス徳島」の市松人形とは違うが、ともに日本伝統の人形である。材料である胡粉や木綿の触感、からくりのおもしろさ、髪の毛や衣装の仕様を感じていただいた。

視覚障碍の皆さんも、最初は恐る恐る触っていたが、慣れてくると興味がわいて、積極的に人形の造作や素材を探るようになった。学芸員への質問も、「胡粉の原料は何か、どう作るのか。」「髪の毛は本物なのか?」といった具体的なものになっていった。

その後で、「青い目の人形」や答礼人形に関するビデオ（「ミス三重」をテーマにした作品）からナレーションとBGMを聴いていただいた。答礼人形展示の理由を理解してもらい、館内の雰囲気を感じてもらったためである。ナレーションが分かりやすかったこともあり、「青い目の人形」と答礼人形への関心が高まったように感じられた。

そして最後に、巡回展会場へ足を運んだ。市松人形の「ミス徳島」と木偶人形は違う人形であるが、胡粉や髪の毛、衣装など、共通の部分もある。そのイメージを参考に、音訳ボランティア「まつばぎく」メンバーが、詳細な実況解説を行い、視覚の障碍と、触覚が使えないハンディを何とか補った（写真10）。表情を見るに、楽しんでいただけたのではないかと思う。

お帰りの際、「まさか木偶人形に触れるとは思わなかった。」と、微笑みながら話しかけてくださった。やはり「触る」は、視覚障碍者も楽しめる展示を考える上で、鍵になる言葉である。

（以上、松下）

③ アリスちゃんの「洋服」小考

今回の展示で、答礼人形「ミス徳島」とともに観覧者の注目を引く、「青い目の人形」アリス・ジョンソンちゃんの「洋服」について、気づいた点を記す。

当館に展示中のアリスちゃんは神領小学校の制服を着ているが、本来の洋服は別に展示してあるワンピース型のドレスである（写真11）。この洋服、



写真11 制服を着たアリスと本来の洋服



写真13 ペチコートの縁取りに注目



写真12 本来の洋服は子ども用ワンピース



写真14 着替えとして制作された洋服

しゃれた仕立てになっており、80年以上も前のものでありながら、現在でも通用するデザインであるように思う。

日本は、明治時代に洋服が入ってくるまで、着丈・胴回りを自由に調整する着物文化であった。小さな女の子たちの着物も、背丈さえ合わせれば体にフィットする。ところが、西洋の洋服文化(特に上流貴族層)においては、16世紀頃からコルセットを用いて大人の女性の体形を整えることが広まり、18世紀に入るといよいよウエストを細く締め付け、胸元の広いドレスが一般的になる。いわゆる「子ども向け」の機能的な服装は無く、大人用の亜流であった。

ところが、18世紀後半、ルソーの自然主義が社会に普及し、「子どもの身体をきつく縛ったり、固定することは、身体の成長だけでなく、精神にも悪い影響を与える」と考えられるようになった。それで流行したのが、ワンピース型ドレスである。

アリスちゃんの本来の洋服も、ワンピース型

のドレスである(写真12)。きっと着心地がよく、活動しやすい洋服であっただろう。また、洋服の生地は木綿であるが、浴衣に用いる堅い素材の木綿ではなく、綿ローンの肌にやさしい生地を使用している。

あわせて、ペチコート(下着)の縁取り(写真13)にも注目して欲しい。洋服とともにレースが発達したので、この縁取りはボビンで製作された手作りのレースであろう。後に着替えとして日本で制作された洋服(写真14)のレースと比較してみると、その違いがよくわかる。

たかだか人形の「洋服」と、軽く考えてはいけない。この小さな「洋服」の中に、形(デザイン)、色、刺繍、レース、等々、日本の服飾史(和服の歴史)に無いものがたくさん詰まっている。21世紀の私たちが見ても感慨深いのだから、昭和2年(1927年)当時の神山の人々は、目の前にやってきた小さな西洋文化に、たいへん驚いたに違いない。

(船井)

答礼人形「ミス徳島」お別れ会

実行委員会委員 長谷川 賢二

巡回展の最終会場である松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館での会期が終わると、答礼人形「ミス徳島」は株式会社吉徳（東京）で調査・修復を受けた後、MACへ返却する予定となっていた。また、ミス徳島とともに展示されてきた「青い目の人形」アリスもまた、神山町神領小学校へ返却されることになっていた。

したがって、巡回展の閉幕をもって、2010年7月の里帰り以来、徳島県内で展示されてきたミス徳島が県民の目に触れることはなくなるし、1927年に日米両国を結んだ徳島ゆかりの人形が並ぶ機会もなくなるのであった。

そこで企画したのが、「お別れ会」と銘打ったセレモニーである。事業計画を立案した段階では、巡回展終了時にMACの館長や学芸員を招いて記念フォーラムを開催する予定だったが、都合が合わずに断念したという経緯もあったことから、せめて「故郷」の県民が別れを告げる場をもちたいと考えたのである。

お別れ会には、実行委員会のメンバー及び各会場の関係者、観覧者など、約25人が集まったほか、マスコミの取材もあった。中には、海陽町立博物館及び松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館で展示された原田一美著『青い目の人形』挿絵原画の作者の一人である鎌田邦宏氏の姿もあった。

松下師一氏（実行委員会委員）の司会のもと開会し、大原賢二実行委員会会長のあいさつ、特別陳列及び巡回展の各会場担当者による事業報告、出席者のスピーチが、順次行われた。最後に、来場していた子どもの発声とともに、全員で「さようなら」と声をかけ、散会した。

ここに至るまでの経緯を思い起こした、実に感慨深い一時だった。

- 日時 2010年10月17日（日）16:00～16:30
- 会場 松茂町歴史民俗資料館・人形浄瑠璃芝居資料館
- 内容
 - ①会長あいさつ
 - ②各会場事業報告
 - ③スピーチ
 - ④お別れのことば



大原会長のあいさつ



ミス徳島に「さようなら」

答礼人形「ミス徳島」の調査・修復

「ミス徳島」の調査・修復に携わって

株式会社吉徳秘書室長

青木 勝

2010年7月17日から開始した特別陳列「海を渡った人形と戦争の時代」、そして10月17日までの巡回展「海を渡った人形と平和への願い」の終了後、10月26日に「ミス徳島」をお預かりして、早速翌日に「吉徳病院」に入院させました。そして、2011年1月18日のお引渡しまでの約3ヶ月の間、十二世山田徳兵衛の指揮の下で、私は「ミス徳島」の調査・点検、修復及び着付けの監修を担当しました。

今まで数多くの答礼人形たちの修復を進んでお引き受けしてきたことから、私も彼女たちの美しさと品位の虜になった一人です。それは、これらが日本の少女の清らかな美しさと、凛とした気品とを併せ持つすばらしい人形であり、同時に往年の名匠たちの製作技術の粋を一身に集めた第一級の美術品であるからです。写実的な目・鼻・口・耳を備えた顔立ちのあどけなさ。昭和2年の答礼人形について、当時の人形組合が「遣米使節たるお人形の竣工」に際し、「特に名工の丹念を凝らした麗顔玉の如き容貌に、衣裳は色とりどりの友禅縫模様の三枚袷に、錦糸燦たる帯姿凛々しく、華麗で而かも高尚な拵えは、先ず申分なき出来栄と見受けた」と表現しています（『東京玩具商報・昭和2年9月20日』）。そこからは当時、彼女たちを製作した人々のなみなみならぬ意気込みが伝わってきます。

○ 答礼人形の構造

手の指の形状は、手の甲のくぼみから指の関節の皺、指頭のふくらみ、そして爪にいたるまで実に精巧につくりだされています。手のひらには生命線、頭脳線、そして感情線までがはっきりと溝を刻んでいます。アメリカではそのあまりのかわいさに握手の連続で、人形の手が黒光りするほど汚れたというの納得ができます（図1参照）。

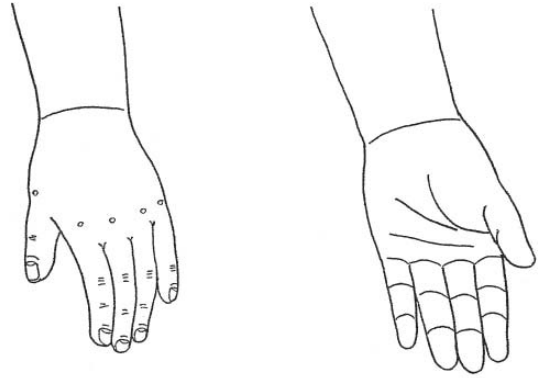


図1

また羽二重の足袋を脱がすと、足の指の形状も手と同様に実にリアルで、足の底には土踏まずまでつくりだされています（図2参照）。

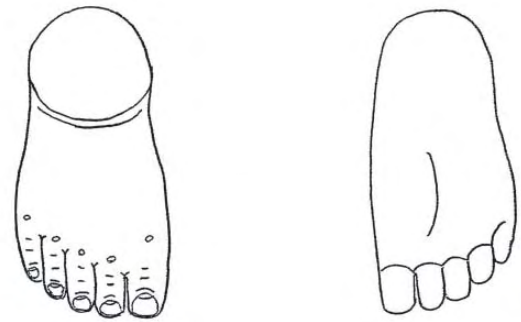


図2

人形は通称「泣き子」と呼ばれる仕様で、胴には発声装置のフイゴ笛が埋め込まれています。「泣き子」とはフイゴ笛を仕込んだ人形を指す専門用語です。発声装置は二枚の木の板を上部で合わせて、和紙と布で末広型の袋状のフイゴを作り、これに笛を取り付けた細い竹の筒を通してあります。加えて人形の胴の厚さに寸法を合わせて木製の足の付いた甲羅状の板をそれぞれ前後に取り付けますので、胴を押すとフイゴの中の空気が竹の筒を通る時に笛が鳴るのです。筒の両端に笛があり、往復音を発します（図3参照）。

足には、腰と膝を折り曲げて、正座ができる三つ折れ人形の技法が用いられており、各部所ごとにさまざまな工夫が凝らされています。股関節・腰と大腿部及び膝関節、膝と下腿部にあたる部分をそれぞれ蝶番で固定し、正座ができる構造に

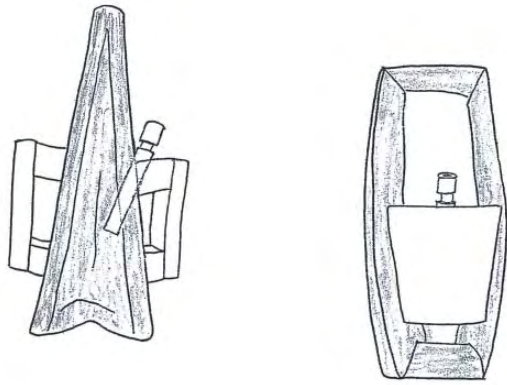


図3

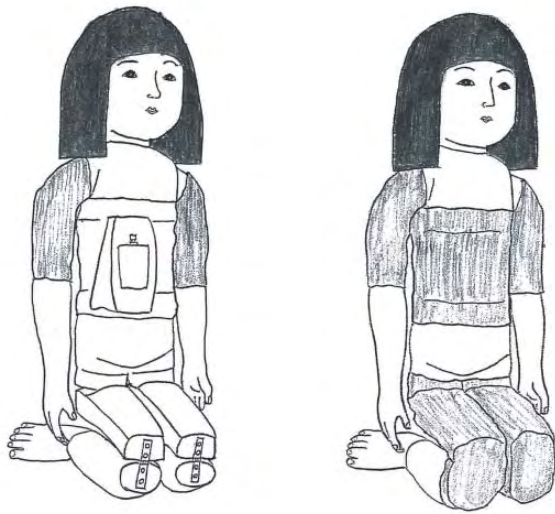


図4

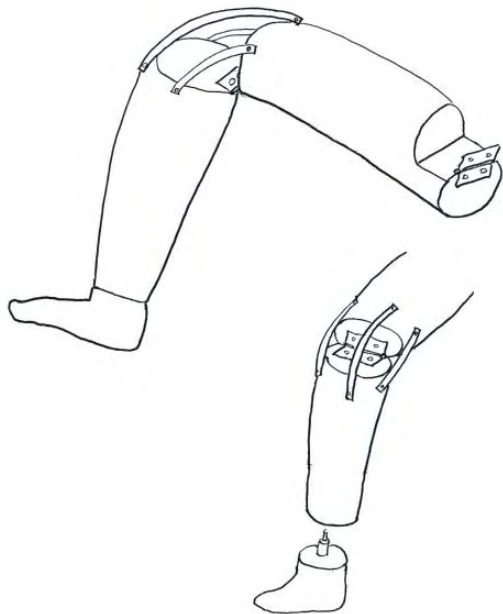


図5

なっています。また、人形が座った時、どうしてもふくらはぎに押される大腿部の裏側は、ふくらはぎのカーブに合わせてやや内側に彫り込んであります（図4参照）。さらに膝部分には前面と左

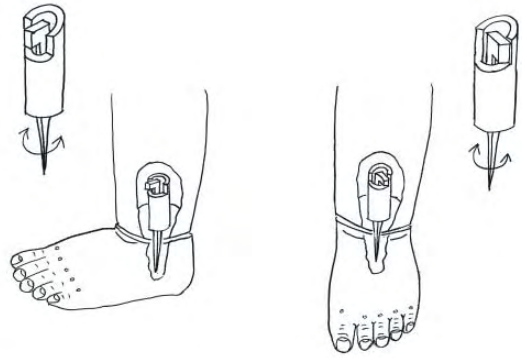


図6

右側面の3ヶ所に直立を補強するためのゴム紐が取り付けられています（図5参照）。

足先にも工夫が凝らされていて、正座の際に足首から先が外側に向くように、足首に固定された釘状の軸が下腿部に埋め込まれた竹の筒の中で回転します。竹の筒の上部は段差をつけてあり、人間と同様、足首が真後ろまで回転しないように左右それぞれ約90度で止まるストッパーの役割を果たしています（図6参照）。

髪は人毛でつくられ、頭頂には旋毛も表現されています（写真1参照）。ちなみに答礼人形の多

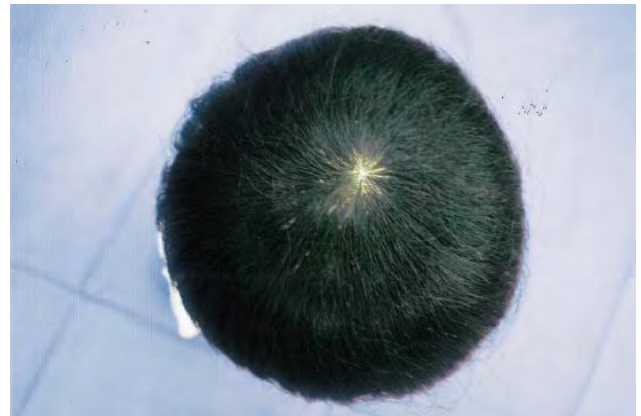


写真1



写真2

くは口を結んでいますが、「ミス徳島」はやや口を開き、精巧な歯をのぞかせています（写真2参照）。

○ 「ミス徳島」の修復

入院後、直ちに頭・胸・腰・脚を分解する大手術にとりかかりました。胴体からフイゴ笛を取り出した際、笛を固定するため腰部内側に詰められていた紙に『光龍齋』の印が押されているのを見つけました（写真3参照）。今まで修復した東京製の答礼人形のほとんどは、背中に『東京雛人形卸商組合〇〇〇作』という和紙が貼られていましたが、いつどこで剥がれてしまったのか、「ミス徳島」にはありませんでしたので、これはこの度の新発見となりました。



写真3

修復箇所（図7～10参照）

【頭部】

- 顔…鼻の頭と鼻の右下の汚れ及び傷を治し、色合わせをした胡粉を塗る。
- 左右の側面のひび割れ…桐塑を補填し胡粉を塗る。
- 頭のぐらつき…再度、紐を取り付け直し、固定する。
- 髪の毛の乱れ…時間をかけて丁寧につげ櫛でとかし、整髪する。

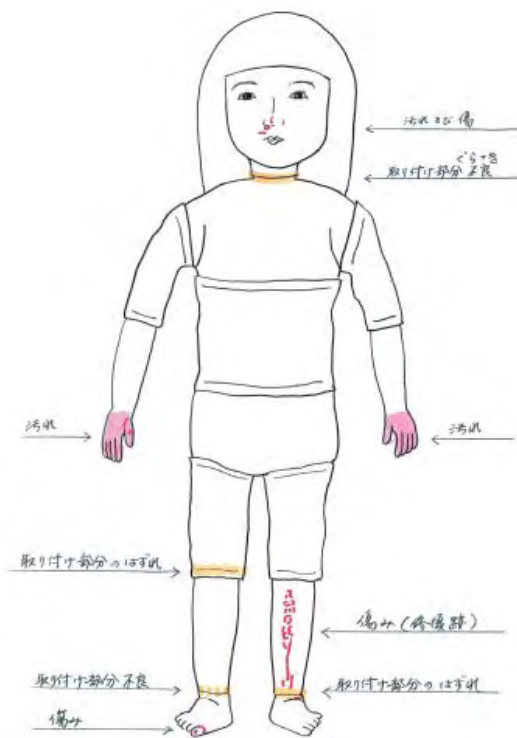


図7

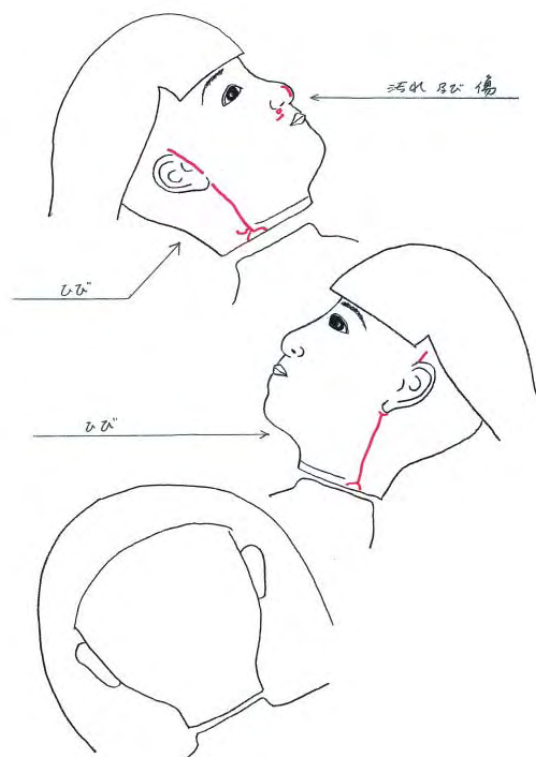


図8

【手】

- 右手の親指の傷…桐塑を補填、胡粉を塗る。

【脚部】

- 右膝の関節部の取り付けのはずれ…蝶番のネジを締め付ける。

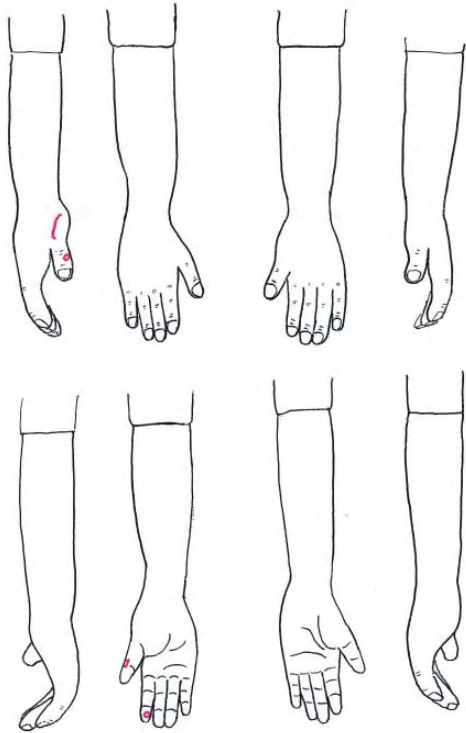


図9

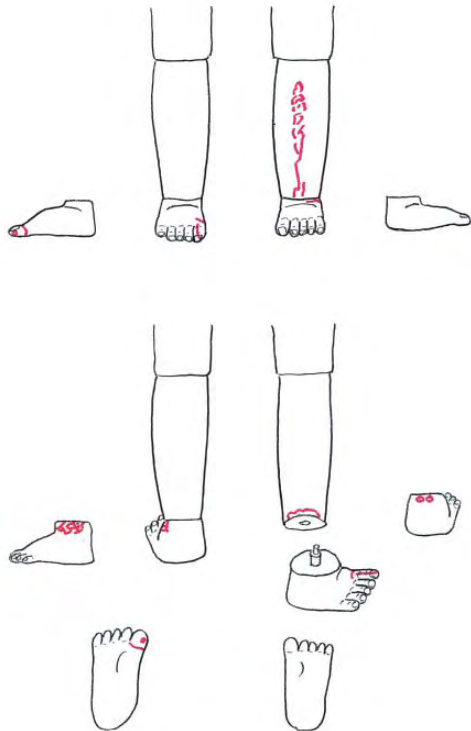


図10

- 左膝の関節部…蝶番のネジを締め直す。
- 両膝のゴムの劣化によるゆるみ…前面及び左右側面のそれぞれ3ヶ所に新しいゴム紐を取り付ける。
- 左右の脛の傷及び剥落…桐塑を補填、胡粉を塗

る。上塗り後に再度脛にひび割れが生じたため、さらに養生した上で胡粉を塗る。

【足】

- 右足の親指のひび割れ…桐塑を補填、胡粉を塗る。
- 両足の踵の傷…胡粉を塗る。
- 右足首の取り付けの不良…可動式の器具を補修して取り付け。
- 左足の取り付けのはずれ…米国で固定されていた木の軸を除去して、新たに竹の筒と竹の軸で可動式の器具を取り付ける。なお、左足の空洞の中に破損した欠片があり、摘出する。

この度「ミス徳島」の作者は、二代目滝沢光龍齋であることが判明しました。なお、光龍齋作の答礼人形は、この他に里帰り第1号の「ミス広島」を始め、「ミス岐阜」「ミス茨城」「ミス兵庫」「ミス長崎」「ミス富山」などの15体があります。

「ミス徳島」の治療に携わってくれた人形師の三代目松乾齋東光さんは、「一職人が平和の架け橋に役立つことは、とても嬉しい」と語っていました。私も、この度の修復に関われたことを、心から誇りに思います。

いま、ここに美しくよみがえった彼女が、元気な姿で、100年後も、200年後も、多くの人々に、平和の大切さを語り続けてくれることを切望してやみません。

※イラスト 筆者

「答礼人形ミス徳島」の調査・修復、 点検に関する報告

実行委員会委員（徳島県立博物館）

磯本 宏紀

2010年12月14日（火）、「答礼人形ミス徳島」の調査・修復、点検および運搬のため、立ち合った。当館特別陳列「海を渡った人形と戦争の時代」および巡回展「海を渡った人形と平和への願い」終了後、株式会社吉徳へ依頼したものである。当日は、株式会社吉徳秘書室長の青木勝氏と同行した。

修復作業は、株式会社吉徳からの依頼により、有限会社岩村人形（千葉県市川市）の工房において行われた。岩村人形は市松人形等の製作、修復を専門に行う人形工房で、過去にも「答礼人形」の製作、修復の実績があり、初代が他の「答礼人形」の製作に係わった工房である（写真1）。

当日は、以下の順で修復作業および点検を行った。それまでに順次行われてきた修復箇所を点検し、次の順で各部位の接合作業を行った。

- ①腰部詰め紙の確認（写真2）
- ②腰部詰め紙（新聞紙）の確認（写真3・4）
- ③足首可動部の修復箇所の確認
- ④脚部膝部分の修復箇所の確認（蝶番とゴムの付け替え）（写真5）
- ⑤腰部笛の装着
- ⑥上半身と下半身の腰部布接合作業（生麩糊による接合で以下同じ）（写真6）
- ⑦脚部膝部分布接合作業
- ⑧糊の乾燥と接合確認



写真1



写真2



写真3



写真4

修復、点検後、簡易梱包の上、東京都台東区の株式会社吉徳本店まで運搬した。



写真5



写真6

なお、修復作業の過程で次の2点についての発見があった。いずれも、「答礼人形」の腰部詰め紙によるもので、製作者によって詰められたものと推定できる。

写真2は、「光龍齋」の印が押された詰め紙であり、市松人形、菊人形等を手がけた人形師滝澤光龍齋の作であることがわかるものである。滝澤光龍齋は、最も多くの「答礼人形」を手がけたともいわれる人物で、「ミス徳島」もその中の一つであったことがわかる。

写真3・4の新聞紙は、「東京日日新聞」「昭和二年四月十日発行」「第壹萬八千百七十七號附録」「第三種郵便物認可」の文字を見ることができる。製作者が『東京日日新聞』を入手して詰め込んだものと考えられ、「ミス徳島」は、この日以後の完成であることが確定できる。新聞紙を4分の1ほどに破り取り、腰部への詰め紙としたものであるが、その紙面には少女が西洋人形を抱いて微笑んでいる姿を写した写真が掲載されている。

なお、この新聞記事については、実際の紙面の確認作業を行っているが、「附録」であったためか各図書館等の所蔵がなく難航している。現在継続して調査中である。

企画展 「図書委員が選ぶ戦争の本」

徳島県立図書館 高橋 律子

(1) 会期

2010年7月21日（水）～8月29日（日）

ビーは閲覧室とはフロアが異なっており、観覧者と同数とはいえない

(2) 会場

徳島県立図書館（1階展示ロビー）

(3) 内容

徳島県内の高校図書委員が、戦争をテーマに選んだ絵本や小説・写真集など41冊を、図書委員による紹介文とともに展示した。展示した図書は別掲のリストのとおりである。

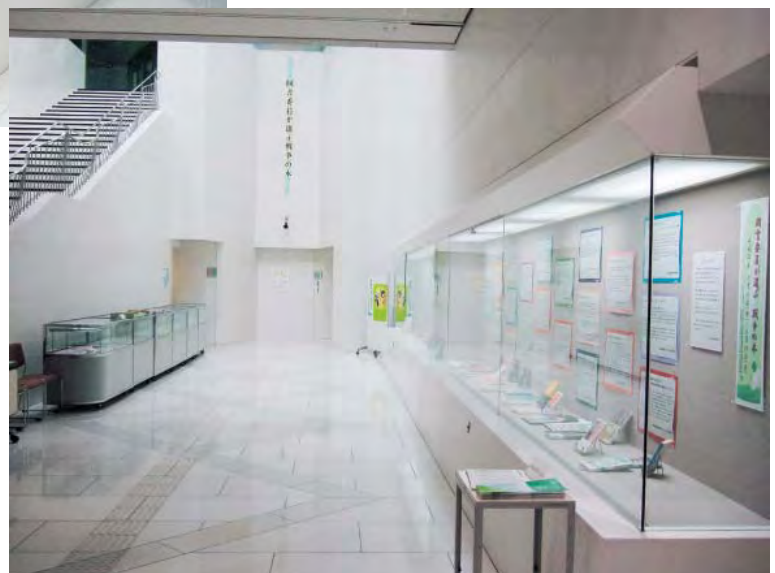
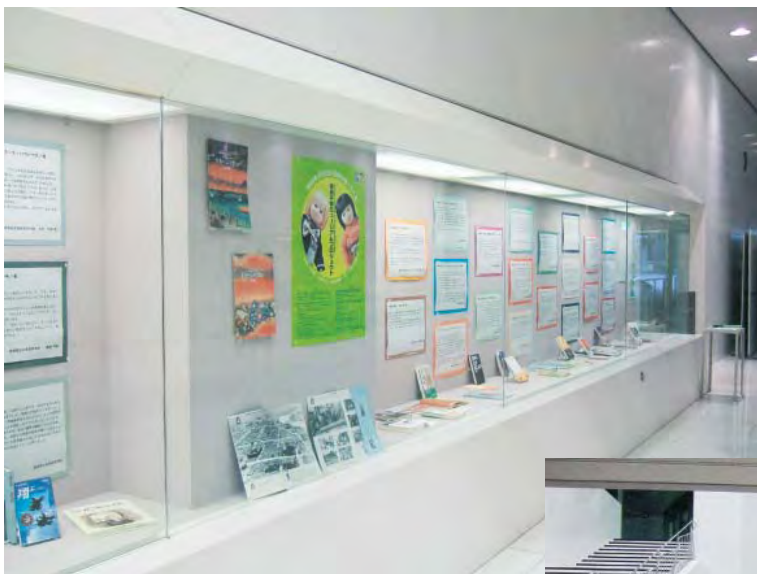
(4) 所感

絵本から小説・記録文学まで多岐にわたった本が紹介され、その内容は第一次世界大戦から現代の世界の紛争まで及び、広い視野で捉えられた「戦争の本」が紹介された。

会期中、紹介された本で複本のあるものは、子どもの本コーナーで「展示図書」としてまとめて配架し貸出を行ったが、内容的には、一般資料コーナーに配架したほうがより利用されたかもしれない。

(4) 観覧者数 不明

参考：会期中の閲覧室利用76,509人（展示ロ



「図書委員が選ぶ戦争の本」展示リスト

書名	著者等	出版社	推薦学校
あのころはフリードリヒがいた	ハンス・ペーター・リヒター	岩波書店	勝浦高校
あらしのあと	ドラ・ド・ヨング	岩波少年文庫	徳島文理高校
「慰安婦」と出会った女子大生たち	神戸女学院大学石川康宏 ゼミナール	新日本出版社	徳島北高校
生きのびるために	デボラ・エリス	さ・え・ら書房	徳島北高校
沖縄に生きて	池宮城 秀意	サイマル出版社	鴨島商業高校
風が吹くとき	レイモンド・ブリッグズ	篠崎書林	池田高校
空爆の歴史	荒井信一	岩波新書	脇町高校
黒地の絵	松本清張	新潮社	富岡東高校
子ども兵の戦争	P. W. シンガー	日本放送出版協会	徳島商業高校
サダコ (sadako will leben)	カール・ブルックナー	よも出版	徳島北高校
サニーのおねがい 地雷ではなく花を下さい	葉 祥明	自由国民社	ひのみね支援学校
縞模様のパジャマの少年	ジョン・ポイン	岩波書店	阿波農業高校
少年は戦場へ旅立った	ゲイリー・ポールセン	あすなろ書房	川島中学高等学校
戦争遺跡から学ぶ	戦争遺跡保存全国ネットワーク編	岩波書店	富岡西高校
戦争で死んだ兵士のこと	小泉吉宏	メディアファクトリー	城東高校
戦争はなぜ起こるか	佐藤忠男	ポプラ社	板野高校
戦争を起こさないための20の法則	鎌田 慧	ポプラ社	海部高校
ちいちゃんのかげおくり	あまんきみこ	あかね書房	新野高校
父の戦地	北原亜以子	新潮社	城西高校神山分校
茶色い戦争	笠原 淳	新潮社	城ノ内中学高等学校
出口のない海	横山秀夫	講談社	徳島北高校
天皇と特攻隊	太田尚樹	講談社	阿波高校
ドイツ統一戦争	望田幸男	教育社	城南高校
トミーが三歳になった日	ミース・バウハウス	ほるぷ出版	那賀高校
ナガサキに翔ぶ	山脇あき子	新日本出版社	徳島中央高校
夏の花	原 民喜	晶文社	名西高校
野坂昭如戦争童話集 ②	野坂昭如	新潮社	城北高校
はだしのゲン	中沢啓治	汐文社	三好高校
八月六日上々天気	長野まゆみ	河出書房新社	鳴門高校
バルトの楽園	古田 求	潮書房	徳島科学技術高校
一つの花	今西祐行	岩崎書店	盲学校
兵士ピースフル	マイケル・モーパーゴ	評論社	穴吹高校 貞光工業高校
歩調取れ、前へ!	深田祐介	文芸春秋	美馬商業高校
まっ黒なおべんとう (絵本)	児玉辰春	新日本出版社	辻高校
窓ぎわのトットちゃん	黒柳徹子	講談社(青い鳥文庫)	徳島北高校
水木しげるの娘に語るお父さんの戦記	水木しげる	河出書房新社	城西高校 徳島中央高校
炎える母	宗左近	日本図書センター	小松島高校
夕凧の街 桜の国	こうの史代	双葉社	阿波西高校
ルトウカのノート	ルトウカ・ラスケル	PHP研究所	小松島西高校
六千人の命のビザ	杉原幸子	朝日ソノラマ	鳴門第一高校
私が見た戦争	石川文洋	新日本出版社	徳島北高校

シンポジウム 「近代四国における戦争と地域社会」

シンポジウムの概要

実行委員会監事（四国地域史研究連絡協議会）

石尾 和仁

このシンポジウムは、四国地域史研究連絡協議会と徳島平和ミュージアムプロジェクト実行委員会との共催により、第3回四国地域史研究連絡協議会大会（徳島大会）として開催したものである。

四国地域史研究連絡協議会の発足や活動の経緯は次のとおりである。

2007年10月に、地方史研究協議会の第58回大会が高松市で開催された。その高松大会の成功は、2年間をかけて四国各県で準備報告会（2巡、合計8回の研究集会）を積み重ねるとともに、運営委員となった各県の関係者が高松市に集まって会議を行うなど、準備期間を通じての四国各県の研究団体の取り組みをその前提としたものであった。

この高松大会を承けて、その一体感の気運を継続させるためにも、各県の研究団体の連携の必要性が協議されることになった。協議の結果、各県に1人ずつ世話人をおき、日常的な情報交換（研究集会の情報など）を行いながら、年に1回各県持ち回りで研究大会を開催することにした。会の名称も、四国各県の研究団体がゆるやかに連携することを目的とすることから、「四国地域史研究連絡協議会」とした。

こうして発足した四国地域史連絡協議会では、2008年11月に松山市で第1回研究大会を開いた（テーマ「四国遍路研究前進のために」）。また、2009年11月には高松市で「四国の大名—大名の交流と文化—」をテーマとして第2回大会を開催した。

こうした前提の上、2010年7月に開催した第3回大会が「近代四国における戦争と地域社会」をテーマとした今回のシンポジウムである。徳島県立博物館で開催中であった特別陳列「海を渡った人形と戦争の時代」ともタイアップして、近代四国の社会情勢や人々の暮らしが、戦争によってどのような影響を受けたのか、また、どのように変容していったのかを考えるために企画したもので

ある。

シンポジウムは、次のように、四国各県に基盤を置く研究者に4本の研究報告をお願いし、それぞれの地域社会や人々が、近代社会の大きなうねりのなかで戦争とどのように関わらざるを得なかったのかを論じていただいた。熱意あふれる報告と会場からの積極的な発言が相まって、充実したものになった。以下に、当日の報告内容をもとにまとめていただいた論考を掲載したので、参照願いたい。

（日程）

2010年7月25日 12:30～17:00

文化の森イベントホール

小幡 尚氏

「高知県における日露戦争戦没者慰霊」

野村美紀氏

「善通寺における護国神社と乃木神社の建設」

藤本文昭氏

「戦略爆撃と中小都市空襲～第20航空軍B29による愛媛県への空襲を中心に～」

佐藤正志氏

「戦時体制の進展と徳島の農村女性」



高知県における 日露戦争戦没者慰霊

高知大学准教授

小幡 尚

はじめに

本稿の課題は、高知県における日露戦争戦没者慰霊⁽¹⁾の具体相を、葬儀と埋葬の局面に着目して明らかにすることである。

日本近代史研究においては、戦没者慰霊をめぐるさまざまな問題について多くの研究がなされてきた。例えば、国による戦没者祭祀についての研究は、靖国神社を対象としたものを中心に多くの蓄積がある。近年では、地域における戦没者慰霊についての研究も進展し、忠魂碑・忠霊塔・軍用墓地などを扱った研究が多く公にされている。しかし、その際に検討の対象とされるのは特定の埋葬施設である場合が多く、ある地域全体の状況を扱ったものはほとんど見られない。また、市町村などで行なわれた戦死者の公葬については、その存在がよく知られているにも関わらず研究が進展しておらず、明確な定義もなされていない状況である。

つまり、亡くなった兵士たちがある地域においてどのように弔われていたのかという問題は、未だにほとんど解明されていないと言い得る。地域における戦没者慰霊の問題を考えていくためには、まず、戦死没者たちの遺骨がどのように帰還し、どのような葬儀が執り行なわれ、どのような墓地に葬られたのかという点に関する基本的な史実を明らかにする必要があるのである。

本稿では、日露戦争の戦没者たちが地域社会においてどのように弔われたのかという問題を、高知県全体を対象として検討する。

本題に入る前に、検討の前提となる事項についていくつか確認しておく。

近代日本における初めての本格的な対外戦争は1894年（明治27）に勃発した日清戦争である。その10年後の1904年（明治37）2月には日露戦争が

起こり、翌1905年（明治38）年9月にいたるまで続いた。

高知県に初めて置かれた軍隊は、歩兵第44連隊である。44連隊は、1897年（明治30）に高知県土佐郡朝倉村（現在の高知市朝倉）の兵営に入っている。同連隊は香川県の善通寺に置かれた第11師団に属していた。これ以後、太平洋戦争の敗戦にいたるまで、44連隊は高知県の郷土部隊として地域社会に大きな影響を与えていくこととなる。

44連隊の編制が日清戦争終結後であったため、同連隊が初めて国外へ出動したのは日露戦争においてである。1904年5月に中国大陸に渡ると、乃木希典率いる第3軍に編入され、日露戦争最大の激戦として知られる旅順要塞の攻撃に参加している。この攻撃を初めとする数々の戦闘において、同連隊からは多くの戦死者が出ている。日露戦争を通じた戦没者は2,287名を数える（歩兵第四連隊編『連隊歴史』同隊、1936年改訂増補版）。

つまり、高知において一度に多くの戦没者を出した初の戦争が日露戦争なのである。『明治三十六年 高知県統計書』（高知県、1905年）によれば、1903年（明治36）末現在の県の人口は642,714人であった。「明治三十八年」版の同書（1907年）には、県内の日露戦争戦没者に関する統計である「三十七八年戦役戦病死者市町村別」が所収されている。それによれば、県全体の戦没者は2,538名である。また、当時県内にあった全198市町村（市は高知市のみ、同市以外の町村は全て人口10,000人未満）の全てにおいて1人以上の戦没者が生じている。これは、それまでに全くなかった事態であり、地域社会に非常に大きなインパクトを与えたであろうことが想定される。

高知という地域が「戦争」そして「戦没者」というものに対面し、それらを受容する基点となったのが日露戦争だと考えられる。本稿で、日露戦争を扱う理由はここにある。

I 遺骨の帰還と補充大隊の対応

最初に、遺骨の帰還について見ていくこととする⁽²⁾。

44連隊の戦没者の遺骨は、戦地から第11師団の

留守師団（善通寺）へ送られ、さらに44連隊の兵営に置かれた補充大隊へと送付された。補充大隊に遺骨が送付される際には、同隊の兵士が善通寺まで受領に行き、彼等と共に海路で高知に運ばれた。例えば、「遺骨の到着と恭迎」（『高』1904年10月21日）では、「我第四十四連隊出征軍人中戦死若くは病死せし人々の遺骨は先きに軍曹小島光太郎氏久竹房太郎、西森兼弥の二兵士を引率し受取りの爲め善通寺に出張し」、「昨日午前十時を以て土州丸にて帰着したり」、と描かれている。遺骨が高知に到着した様子を報じた新聞記事は数多く見られる。

高知市内に遺骨が到着する際には、官吏・軍人・地域諸団体・学校の生徒などが出迎えた。先に掲げた記事には、「出迎の爲め農人町埠頭に参集せしは玉井補充大隊長、千頭同副官、三松司令官其他将校兵士を始め中川書記官、藤好警部長、各兵事会員、各婦人会員、日本赤十字社高知支部幹事、各学校生徒其他各団体員等五六百名…高知恤兵通信会長五藤正形、高知武揚協会会長近藤正英二氏」と記されている。

その後、遺骨は、市の中心部より7キロほど西にある朝倉の兵営へ向かう。「遺骨は黒布を以て掩はれたる箱に納め数名の白張を纏へる人夫恭しく之れを担ぎ出迎の一小隊其の前衛となり他の一小隊は柩の両側を警衛し次に恭迎者肅々として之れに付添ひ」、「通路の両側には付近の人々整立して之れを目送し」たという（同前記事）。

朝倉に到着した遺骨は、在営兵の出迎えを受けた後、朝倉兵営の中に安置された。同年10月7日の記事（「遺骨の到着」『土』）では、「もと第二大隊長室なる営内の安置所に納めて合祀」されたと述べられている。兵営内の遺骨は急速に増加したようである。そのため、同月18日には「場内狭小を告」げたという理由で、安置場所が元の場所の「北側なる広場」へと変更されている（「祭壇場の変更」『高』10月19日）。

日露戦争において戦没した兵士たちの遺骨はどのように葬ることにされていたのであろうか。当時、陸軍の兵士たちの埋葬のあり方を規定していた法令が、「陸軍埋葬規則」（1897年8月17日制定

公布）である⁽³⁾。陸軍省によって定められた同規則には、「凡ソ軍人軍属戦地ニ於テ死亡シ又ハ戦地ニ於テ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ之ニ起因シ戦地外ニ於テ死亡シタル者ハ陸軍埋葬地ニ葬ルヲ例トス」（6条）と定められていた。つまり、戦没兵士の遺体は陸軍埋葬地へ埋葬することを原則としていたのである。ただし、同条文は更に「但シ親族ヨリ遺体ノ下付ヲ願フトキハ之ヲ許ス」⁽⁴⁾と続いており、遺族への遺骨の下付も認められていた。

ここにある陸軍埋葬地とは、一般に陸軍墓地と呼ばれる墓地のことである。同墓地は陸軍省によって設けられた墓地であり、いわば「国営」なのである。陸軍墓地は原則として連隊毎に置かれた。44連隊の兵営近くにも「高知朝倉陸軍墓地」が設置されていた。

1904年8月18日付『土』に載せられた「遺骨遺髪受取方心得」という記事には、「留守第十一師団にて定められたる戦地より護送の下士以下死亡者の遺骨遺髪取扱方法の要領」が紹介されている。そこには以下の記述がある。

▲戦地にて死亡したる者 遺骨遺髪は元来陸軍墓地へ葬むる事普通なれども遺族の願ひに依りては遺骨若くは遺髪を下げ渡さる、事となれり

1904年10月9日に掲載された『高』の「遺骨の下付及埋葬心得」と題する記事には、朝倉の補充大隊が示した遺骨等に関する規定が紹介され、「郷里に於て埋葬を営まんと」する遺族のための「遺骨下付願」と、「陸軍墓地へ埋葬希望の遺族」のための「遺骨埋葬願」の2つの書式が示されている。

すなわち、遺族たちは埋葬場所として「郷里」と「陸軍墓地」のどちらかを選択することができたのである。遺骨の下付を願い出た場合は、葬儀をせずに下げ渡された上、軍から埋葬料が支給されることとなっていた。陸軍墓地への埋葬を希望した場合には、補充大隊による葬儀が執行された後、陸軍墓地へ埋葬されることとなる。補充大隊による葬儀は計4回行なわれている⁽⁵⁾。それらの対象者は合計48名であった。つまり、残りの2,200名以上の戦没者の遺族は、陸軍墓地への埋葬では

なく、遺骨の下付を希望したこととなる。

遺骨の帰還を報ずる記事と同様に、遺骨の交付についての告知も新聞紙上に頻繁に見られる。それらによれば、補充大隊において「遺骨交付式」という式典が行なわれていたことが分かる。例えば、1905年8月8日付『土』の「兵営雑俎」では、同月25日に「補充大隊に奠祭せる中島少尉外四百余人の遺骨交付式を同隊の営庭に於て執行する」と報じられている。

遺骨の下付の際には、市町村及び郡に一定の役割を果たすことが求められた。1904年10月16日の『土』の紙面には、遺族へ遺骨を下付する際には「関係町村長を遺族代表者として多数の遺骨を受領せしめん筈なり」とする記事が掲載されている（「遺骨の下付に就て」）。同年11月19日付の『土』には、同月21日から遺骨の交付が行なわれることを報じる記事が掲載され（「遺骨の交付」）、「交付規定」が示されている。それによれば、交付については大隊から「県庁に通報」し、「県庁は之を各郡市町村に通報す」とされていた。そして、「通報に接したる郡市町村長は交付前日迄に交付請求書を当隊に差出す」と定められていた。また、1904年11月19日付『高』の「連隊記事」では、「遺骨の受取人は可成其町村長又は兵事会長総代となり来り貰へば双方の手数及費用も減ぜらるべし」との「玉井大隊長」のコメントが紹介されている。

II 市町村及び県の対応

遺骨の下付から葬儀、そして埋葬へといたる過程において、市町村などが大きな役割を果たした。ここでは、市町村と郡、そして県の対応について見る。

郡長・市町村長が朝倉の兵営で遺骨を受領し、郷里へと運搬したという事例は新聞紙上に多く見られる。例えば、1904年11月26日には「本日大隊に於て遺骨を受取る筈なるは高岡郡長が管内各町村を代表してと其他二ヶ村」であるとの報道がある（「連隊記事 遺骨の受取」『高』）。また、同年12月6日付『土』には「一円高知市兵事会長は…遺骨受領の為め来十日補充大隊へ出頭の筈」とある（「遺骨の受領」）。「一円」とは、時の高知市長

一円正興のことである。つまり、市長が「兵事会長」という立場で遺骨を受領するということである。「兵事会」については後述する。

更に詳しい状況を報じている記事もある。香美郡夜須村出身の戦没者5名の遺骨を、同村の助役と遺族とで受領し、共に村へ帰ったことを報じた記事（「遺骨恭迎式」『高』1904年12月11日）では、遺骨が村に入る際に「兵事会、婦人会、青年会其他学校職員生徒無慮一千五百名」が出迎え、その後「遺族に遺骨を交付し茲に恭迎式を執行した」とされている。葬儀の前に、ここにある「恭迎式」、あるいは「奉迎式」等の儀式を執行している町村も多かったのである。

遺骨が郷里へ帰った後、葬儀が執行された。日露戦争において戦没者が生じ始めた頃においては、葬儀の対象とされる戦没者が1人であるものがほとんどである。つまり、戦没者が生じる毎に葬儀を執り行なっていたわけである。

「故内藤一等卒葬儀彙報」という記事（『土』1904年5月24日）は、「高知市出身の近衛歩兵一等卒内藤辰猪氏の遺髪…其他の遺物」が同市在住の父の元に届いてから葬儀の執行が決定するまで状況を報じたものである。この中では、「高知市兵事会より寄贈せし祭染料にて遺族をして葬儀を営ましむるのみにては其名譽を表彰する上に於て不充分」という判断から、町内の有志が「遺族と交渉の上葬儀を町葬全様に為さん」と考えた、とされている。

日露戦争で戦没者が生じ始めた当初より公葬が執行されていたわけではないようである。その初期においては、葬儀執行の主体は主に遺族・親族であったと考えられる。戦死という要因によって、地域の住民たちあるいは何らかの住民組織による葬儀への援助がなされ始め、それが地域や市町村を挙げての葬儀へと発展していったと考えられる。

『高』・『土』の両紙ともに、日露戦争戦没者の葬儀広告が数多く掲載されている。日露戦争初期の葬儀の広告を見ると、執行主体が親族・遺族となっており、そこに町村の兵事会が名を連ねているものが多い。例えば、1904年9月15日の『土』に掲載された葬儀広告の一つは次のようなもので

あった。

海軍少佐従六位勲四等功四級横山伝遺骨到着
候ニ付来ル十七日午後一時下知小学校内ニテ
仏式祭典執行後出棺仕候

但御贈花之儀ハ御断申上候

九月十四日 親族

一各団体御会葬ノ向ハ十六日正午迄御一報ヲ
乞

土佐郡下知村兵事会

1904年8月から旅順攻撃が始まり、大量の戦死者が生じ始めると、葬儀のあり方も変化していく。多数の遺骨が帰還するようになった事態を受け、複数の戦没者を弔う葬儀が次第に増えていくのである。

葬儀広告及び葬儀を報じた記事において、執行主体として親族・遺族が挙げられているものが減少し、市町村の「兵事会・婦人会」としているものがほとんどとなっていく。その他には「兵事会・婦人会・青年会」あるいは「兵事会」単独によるものも見られる。遺族の意向も尊重されていたと考えられるが、執行主体としてこれらの諸団体が前面へ出るようになるのである。

さて、ここで兵事会と婦人会について検討しなければならない。兵事会とは市町村あるいは郡に設置された軍事援護組織のことである。『土』1904年2月5日の記事「兵事会組織の注意」は、「兵事会は各市町村に於て追々に組織し居れるが尚ほ未成立の向きもあれば今日の時局速に之を組織し一朝有事の日応召者をして後顧の憂なからしむべしとの注意を各町村に為すべし」との指示が県内務部長から「各郡長へ通知」されたとする。兵事会は、日露戦争以前より各地に設置され始め、同戦争が始まる頃には県によってその設置が懲滯されていたのである。1904年8月中旬には「県下を通じ概ね設立を終」ったという（「県下の兵事会」『土』8月12日）。

1904年11月15日付『土』の記事に「軍国後援の爲め県下各町村に各種婦人会」が勃興しているとあるように（「婦人会の名誉」）、婦人会も女性を構成員とする同様の組織であった。

軍事援護とは、兵士たちが戦場において十全に

活動できることを目的として、銃後において行なわれるさまざまな事業のことである。具体的には、徴兵された兵士・帰還した傷痍軍人・彼等の家族、そして戦没者の遺家族に対する援助が中心的な活動である。「兵役義務心の昂揚」を目的とした諸行事など、兵事全般に対する協力活動も含まれる。

日露戦争期には、県下に多くの軍事援護団体が発足し、その活動を始めていたのである。兵事会という名称はとくに定められたものではなく、また全国的に共通するものでもなかったようである。高知県内ではほとんどの市町村でこの名称が使われているが、「尚武会」（潮江村など4村）・「戦時倶楽部」（安芸町）といったものも見られる。

日露戦争戦没者の葬儀は、主にこれらの団体によって担われていたのである。市町村に設置された団体による葬儀の執行であるため、厳密には「市町村葬」とはいえない形態である。そのため、本稿では暫定的に「公葬」としている。ただし、先に紹介した高知市長が同市の兵事会長を務めていた事例などから、両者の構成員にさほど大きな異同はなかったと推測できる。

また、先に紹介した1904年10月7日付の「遺骨の到着」という記事では、遺骨の出迎えに合わせておよそ30の兵事会・婦人会が参加していることが報じられている。両団体は、公葬の執行以外にも戦没者慰霊全般に関与していたと考えられる。

次に、公葬の具体相を簡単に見ておきたい。次に示すのは、日露戦争期に執行された典型的な公葬の葬儀広告と記事である⁽⁶⁾。

故陸軍歩兵上等兵広瀬亀次君全壺等卒松本秀吉君全三橋治之助君之葬儀於本村本月十五日午後一時執行（但雨天順延）

高岡郡北原村 兵事会 婦人会

（『高』1904年12月11日付）

高岡郡北原村出身名誉の戦死者故陸軍歩兵上等兵広瀬亀次、同一等卒松本秀吉、同三橋治之助三氏の葬儀は同村兵事会の主催を以て去る十三日同地小学校に於て執行されたり当日雨天の爲め日延べの筈なりしも遺族の希望に依り又た俄に執行する事となりしが会葬者は八百余名に及び神官の祭文各遺族の参拜あり

県知事 高岡郡長、赤十字社高知支部長、恤兵通信会長（以上代読）野田県参事会員、高岡東部各町村兵事会、婦人会及び警察官、学校職員諸団体等の弔詞あり一同厳粛に送柩し共同墓地に埋葬の式を了へたり

（「戦死者の葬儀」『高』1904年12月17日）

3名の戦死者の葬儀が村単位で執行されていること、兵事会の主催であったこと（婦人会も関与）、県知事・郡長・各種団体の弔詞が読まれたことが分かる。また、末尾には遺骨の埋葬とその儀式についても記されている。

先に、陸軍墓地に埋葬される場合、補充大隊による葬儀の後に埋葬されると述べた。同様に、市町村で執り行なわれた公葬においても、そのほとんどが埋葬を以て終了としている。そのためか、「葬儀」ではなく「遺骨埋葬式」という表現を使った公葬の報道も見られる。

日露戦争によって多数の戦没者が生じたという事態を受け、彼らの葬儀だけではなく、彼らをどのように埋葬するのかについても大きな問題となる。以下、埋葬について検討する。

1904年10月1日の『高』に極めて興味深い社説が掲載されている。それは「陣歿将士の葬式 市町村葬にすべし」と題した以下のようなものである。これまでの戦死者の葬儀は「各兵事会に於て、或は遺族に於て之を営み死者の先塋の次に埋葬し」ていた。しかし、「是れより一切市町村葬と為し、墓所も各市町村に於て共同墓地を設け其の市町村出身の陣歿者を一定の場所に永眠せしむるの方法に出でんことを希望す」る。すなわち、市町村葬の執行を提唱すると同時に、各市町村毎に戦没者専用の共同墓地を設置すべきであるとしているのである。つまり、陸軍墓地と家墓地の中間的な存在ともいえる形態の戦没者墓地を設置することが提案されていたのである。

先の社説との関わりは不分明だが、高知県庁も同様の方針を示している。社説が掲載されたのと同じ月、「各町村に共同墓地を作り埋葬する」ことを「勧誘」する通達を「各市町村役場に向け」て発したという（「共同埋葬に就て」『高』1904年10月14日）。

このような墓地の設置についての初めての報道が、1904年10月7日付『高』の紙上に掲載されている（「軍国県民の活動」）。これは高岡郡多ノ郷村（現在は須崎市の一部）の動向を報じたものである。これによれば、同村の兵事会は戦死者の遺骨を埋葬するための墓地の設置を決定し、その工事を村内の男子の出役により実施するとしている。設置の理由は、「今回の戦争にて名誉の戦死を遂げたる村内出身軍人のために其の偉勲を表彰し後世子孫をして尽忠報国の観念を喚起せしむる」ためであるとされている。この墓地は1905年2月に竣功している（「共同墓地の竣工」『高』2月1日）。

他の市町村にも同様の墓地が設置されていった。高岡郡宇佐村（現在は土佐市の一部）では、これまで「共同埋葬地の設けなかりし為め…止むなく先塋の次に葬」っていたが、「村長西村庸徳氏及び兵事会発起とな」って共同墓地を設置することとなり、1905年1月14日に着工したという（「共同墓地」『高』1月13日）。先に紹介した北原村の「共同墓地」も同様のものであると考えられる。同村の墓地は1904年末までに設置されている。

1905年7月末の時点で、戦死者の「名誉を表彰し永く祭祀絶たさらしめんか為め其遺骨を埋葬する共同墓地を設けたるもの今日迄既に五十五ヶ町村に及」んだ。また、「其多くは市町村住民の醸金に依り若くは住民一同其の築造の労役に服し居りたるもの」であるという（「時局に関する県の状況（続き）」『土』7月30日）。

ただし、すべての町村にこのような墓地が設置されたわけではない。公葬を報じる他の記事には「先塋の次に埋葬」した、つまり家墓地へ埋葬したことを示す文言で終わっているものも少なくない。この点については、後に検討する。

「共同墓地」に統一された呼称はなかった。「軍人共同墓地」、「共有墓地」、あるいは「軍神墓地」とする村もある。それらの呼称の中で、もっとも一般的なものは「忠魂墓地」である。高知市の墓地が「忠魂墓地」と名付けられたことにより、この呼称が普及したようである⁽⁷⁾。以下、本稿では「市町村に設けられた戦没者専用の共同墓地」を忠魂墓地と呼ぶ。また、忠魂墓地は、高知県に特

有な形態の墓地と言われており、現在まで他府県では確認されていない。

Ⅲ 高知県全体の状況

これまで、高知県の日露戦争戦没者が遺骨として帰還してから、埋葬されるまでの過程の概略を述べてきた。このような状況は、高知県全体においてどの程度一般的だったのであろうか。以下、高知県全体の状況について検討する。

日露戦争の戦没者について、地元2紙を調査した結果、市町村による629件の「公葬」が確認された。これらの対象人員の合計は1,526名である。高知県出身戦没者のおおよそ6割について、その葬儀の概略が判明したのである。

ここで、『日露戦役土佐武士鑑』（高知武揚協会、1916年）という史料を紹介したい（以下、『鑑』と略称する）。『鑑』は、日露戦争に従軍した高知県出身の兵士たちを顕彰するために編纂・発行された書籍であり、「殊勲者一千百十三名陣亡者二千三百七十名廃兵（増加恩給ヲ受クルモノ）四百四十七名」の戦歴を出身市町村毎に掲載している（「凡例」）。扱われているのは特務曹長以下の階級の者、すなわち曹長・軍曹・伍長・上等兵・一等卒・二等卒であり、将校は掲載されていない。志願して軍人となった者ではなく、徴兵されて兵士となった人々を対象としているのである。

『鑑』に掲載されている戦没者の項目では、彼らの戦歴から死亡時の状況、さらに埋葬の態様についても記述がなされている。例えば、「遺骨ハ先塋ノ次ニ葬ラル」・「遺骨ハ全村軍人共同墓地ニ葬ラル」・「忠魂ハ郷土忠魂墓地ニ安ンゼラル」・「遺骨ハ朝倉陸軍墓地ニ葬ラル」などの文言が多くの項目の末尾に見られるのである。記載の内容とその詳略にある程度のばらつきはあるものの、埋葬についての基礎的な情報を得ることが可能なのである。

以下、『鑑』に掲載されているの高知県下の全196市町村⁽⁸⁾を対象とし、新聞史料から得られた情報も合わせて整理した結果を述べていく。

まず公葬についての状況を見る。戦没者全員の公葬を確認できたのは50町村、全員の公葬が執行

されたと推測できるものは49町村である。既に述べたように、その大半は「兵事会・婦人会」の主催であり、市町村そのものが執行した葬儀は検出できなかった。

また、公葬の執行が検出できなかった町村は29あった。新聞史料の性格、すなわち全ての公葬が報道されているとは限らないこと、新聞記事自体が全て残存しているわけではないことから、記事が存しないことを根拠に「なかった」と断定することは難しい。しかし、公葬の執行、忠魂墓地の設置のどちらも行なわれなかった町村も一定数あったと推測すべきであると考えている。

墓地については以下のような結果を得た。忠魂墓地の設置が記されているのは113市町村である。日露戦争の終結後に設置されたものも含め、『鑑』の刊行された1916年（大正5）まで、県下の過半数の市町村に忠魂墓地が設置されていたのである。

そのうち、戦没者全員を埋葬したとされているのが56町村、戦没者のほぼ全員を埋葬しているのが14町村あった。残りの43町村は、忠魂墓地に埋葬された戦没者と、家墓地に埋葬された戦没者とが混在している。つまり、忠魂墓地が設置されていても、同墓地に葬ることが義務とはされておらず、遺族による埋葬先の選択が可能であったと思われる町村も一定程度見られるのである。また、戦没者全員の公葬が確認され、かつ全員がその町村の忠魂墓地に埋葬されている町村も18検出できた。

先に触れた多ノ郷村では、戦没者全員の公葬が執行されたと推測され、かつ全員が忠魂墓地に埋葬されている。つまり、「尽忠報国」と言った言葉に象徴される、国によって示された戦時下の国民のあり方を積極的に受容した村においては、公葬の執行や忠魂墓地の設置・埋葬といった動向が明確にかつ多く見られたのだと考えられる。ただし、国家的な価値観の受容といった要因のみではなく、経済力という要因もあったことも想定できる。つまり、経済力も含めて「弱い兵事会」しかなかった町村では、公葬・忠魂墓地ともに見られなかった可能性が高いと考えられる。

最後に、個人毎の埋葬先について検討する。『鑑』

において忠魂墓地に埋葬されたと記されている戦没者は1,171名、家墓地に埋葬されたとされているのは1,014名であり、はっきりと記されていないため不明なものは258名であった。

陸軍墓地へ埋葬したとされているのは22名に過ぎない。県全体で見ると、国の施設である陸軍墓地に葬られた者はごく僅少であったことがわかる。つまり、「陸軍埋葬規則」に示された原則はほとんど踐行されなかったのである。

また、忠魂墓地へ葬られた人数が最多となっているが、「不明」の多くが「〇〇（地名と思われる）の墓地へ埋葬」といった表記であることから、最も多くの戦没者が葬られたのは家墓地であろうと推測される。

忠魂墓地という形態が相当な早さで広く普及したことが見て取れるものの、個人のレベルで見ると、家墓地埋葬者が過半数を占めていると考えられる。埋葬という局面において、「国のために亡くなった兵士」を特別扱いしなければならないという規範が広く強く定着していたとまではいえないと思われる。

おわりに

これまで述べたように、高知県下の地域社会において、多数の戦没者が一度に生じるという事態に初めて直面したのが日露戦争であった。この時、彼らの葬儀・埋葬が大きな問題となる。その結果、市町村の軍事援護団体によって公葬が執行され、多くの市町村に忠魂墓地が設置されていった。どちらの局面においても市町村が大きな役割を果たしていたといえる。

「国営」であり、原則的な埋葬地である陸軍墓地への埋葬を、それが可能であったにもかかわらず、遺族たちはほとんど選択しなかった。国家意識やその価値観を受容していた地域においても、公葬と埋葬は市町村単位で行なわれていたのである。半数を越えるであろう戦没者が家墓地に葬られていたことから、埋葬という局面では戦没者を特別扱いするという強い規範が定着していたとまではいえないことも判明した。

以下、今後の課題について若干述べておく。

これからもさらに「戦争と高知」研究を深化させていかなければならないと考えている。日露戦争期に関して言えば、兵事会・婦人会などの軍事援護団体がどのような機能を果たしていたのかなど、市町村内の地域秩序についてさらに検討を加える必要がある。その中に、改めて戦没者慰霊の問題を位置付けていかなければならないだろう。

また、本稿では、日露戦争期に形成された戦没者慰霊のあり方の「原型」を示した。これを踏まえ、この後にこの「原型」がどのように変容していくのか、太平洋戦争期、さらには戦後までその動向を追跡し、近代の高知における戦没者慰霊の全体像を描く努力を続けていきたいと考えている。

全国の動向と比較し、その中に高知のあり方を位置付けなければならないのはいうまでもない。高知の戦没者慰霊にどの程度の普遍性があり、どの程度の特异性があるのかについてはまだほとんど分かっていないのである。

四国各県に置かれた歩兵連隊は全て第11師団の下にあった（善通寺＝歩兵第12連隊、松山＝同第22連隊、徳島＝同第43連隊）。このような共通点をもつ四国四県における戦没者慰霊のあり方にはどのような類似点があり、どのような差異があるのであろうか。高知県以外の三県でも戦没者慰霊に関する研究が進展し、比較検討が可能となることを期待したい。

注

- (1)「戦没」の語義は、「戦場で死ぬこと。戦死・戦傷死および戦病死の総称。」（『広辞苑 第六版』）である。本稿では、「戦没」をこの語義で使用している。よって、「戦没者」は「戦争が原因で死亡した兵士」の意である。
- (2) 検討に用いた主たる史料は、『土陽新聞』・『高知新聞』の地元2紙であり、高知市立自由民権記念館蔵複写版を使用した。以下、それぞれ「土」・「高」と略記する。
- (3) 原田敬一「陸海軍墓地制度史」（『国立歴史民俗博物館研究報告』102集、2003年）による。
- (4) 同条は1904年7月16日に陸軍省令第20号によって改正されている。引用したのは改正後の条文である。
- (5) ただし、4回目は帰還後の連隊によるものである。高知朝倉陸軍墓地の設置と、同墓地への埋葬の様相については、拙稿「高知朝倉陸軍墓地について」

日露戦争期の動向を中心に一」(高知大学人文学部人間文化学科『人文科学研究』14号、2007年)を参照。

- (6) 日露戦争期から太平洋戦争期までの同村における戦没者慰霊については、拙稿「高知県高岡郡北原村における戦没者慰霊 一忠魂墓地の設置から忠霊塔の建設まで一」(『海南史学』48号、2010年)を参照。
- (7) 高知市の忠魂墓地については、拙稿「高知市による戦死者慰霊 一忠霊塔の建設(一九四一年)を中心に一」(『海南史学』44号、2006年)を参照。
- (8) 同書では後免町・野田村が「後免野田組合」、田村・立田村が「田村立田組合」と、それぞれ一括して扱われているため、それに従った。

報告 2

善通寺における 乃木神社・護国神社の建設

香川県立ミュージアム専門学芸員

野村 美紀

はじめに

1896年(明治29)、四国を管区とする第11師団が、善通寺村(1901年、町制施行)に設置されることが決定し、以後、善通寺は軍都として発展した。現在も師団司令部や偕行社など、師団関係の建物が多数現存し、隣接して建つ乃木神社と護国神社もそれらの中であって、軍都・善通寺の面影を伝えている。

護国神社は、戦時下においては、戦没者の祭祀を行い、集団参拝などを通じて地域住民の戦意を高揚する役割を担っていた。しかし、各地の護国神社が造られた時期や、経緯はさまざま、各地域の実態の解明は不十分である。また、隣接する乃木神社についても、香川県を含め、全国に6ヶ所建設されているが、乃木希典を顕彰するために建てられたという以外に、各地での建設の経緯などはあまり詳しく紹介されていない。

よって本稿では、軍都善通寺に建設された2つの神社に着目し、香川県における建設過程を具体的に検討する。

なお、本稿では「善通寺」を第11師団が設置された地域を示す言葉として使用し、同地域にある真言宗善通寺派総本山善通寺については「総本山善通寺」と表記する⁽¹⁾。

1. 軍都善通寺の成り立ち

まず、善通寺が軍都として発展していくまでの経緯について述べておきたい。香川県に軍隊が創設されたのは1871年(明治4)高松城内に大阪鎮台第2分営が設置されたのが始まりである。1874年には高松から丸亀に移転して丸亀営所となり、翌年、丸亀歩兵第12連隊が編制された。第12連隊は、丸亀城内に設置され、広島第5師団の管轄下に置かれた。

表1 全国の乃木神社

	名称	所在地	竣工	例祭
1	那須 乃木神社	栃木県那須塩原市石林	1916. 4. 13 (鎮座祭)	9月13日
2	京都 乃木神社	京都市伏見区桃山町	1916. 9. 13 (竣工)	11月3日
3	函館 乃木神社 (戦後 東京乃木神社の分社)	北海道函館市乃木町	1916. 9. 13 (遷座祭)	9月13日
4	長府 乃木神社	山口県下関市長府宮の内町	1920. 2. 13 (遷座式)	9月13日
5	東京 乃木神社	東京都港区赤坂	1923. 11. 1 (鎮座祭)	9月13日
6	善通寺 乃木神社	香川県善通寺市文京町	1937. 5. 3 (竣工奉賛会)	10月3日

乃木神社『乃木神社由緒記』(2009年)、藤岡洋保「大正期創立の乃木神社の様式について」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』1999年)より作成

日清戦争後の三国干渉を経て、日本は軍備の増強を進めることになり、1896年に6箇師団の増設が決定した。このとき、四国を管区とする第11師団が善通寺に設置されることになったのである。善通寺は、近世には総本山善通寺の門前町と周囲の村落からなる地域であったが、師団の設置によって、善通寺駅と総本山善通寺南門にいたる道が設定され、その南側に師団の設備、北側に商業施設が並ぶ市街地が形成されていった(2)。

第11師団の設置場所として、丸亀や高松なども候補とされたようであるが、広大な土地を確保でき、四国内からの交通の便がよく、地下水が豊富であるなどの理由で、最終的に善通寺(善通寺村、吉田村、麻野村)に設置することが決定した(3)。1901年には、善通寺村・吉田村・麻野村が合併して善通寺町になっている。

現在も、善通寺は陸上自衛隊の駐屯地であり、師団司令部の建物も使用されている。

2. 乃木神社の建設

(1) 建設にいたる経緯

乃木神社は、陸軍大将・乃木希典(1849～1912)が明治天皇の大葬の日に自刃した後、その顕彰を目的に各地で建設の計画が進められた(表1参照)。神社建設の計画は、1912年(大正1)の乃木の死後間もなくもちあがり、善通寺以外の5ヶ所は1923年までに完成している。

乃木は第11師団の初代師団長を務め、日露戦争では第11師団が乃木を司令官とする第3軍に編制されたという関係から、善通寺でも乃木將軍遺蹟

会が発足し、神社の建設が計画されたことが1914年2月14日の『香川新報』に掲載されている。

乃木神社と遺蹟会

善通寺町の有志は今回『乃木將軍遺蹟会』なるものを設け之れが事業として一社を建立し併せて演武場を設け毎年盛大なる祭典と共に演武大会を開き以て將軍と四国健児との縁故深きことを永遠に伝へ且つ国民道徳の涵養に資する所ありと

香川県内には、同じ時期、つまり乃木の死後間もない時期に、乃木の遺蹟を保存する動きが他にもみられた。師団長時代に乃木が宿舎としていた金倉寺(現 善通寺市)の客殿の保存、また乃木が先祖ゆかりの場所として保存に尽力した白峯合戦古戦場(現 坂出市)に記念碑を建てる計画などである(4)。

金倉寺や古戦場の記念碑についての計画は実行に移され、現在まで保存されているが、乃木將軍遺蹟会の神社建設計画については、その後新聞記事に取り上げられることがなく、詳しい事情は不明ではあるが計画は具体化しなかったものと思われる。

その後、1928年(昭和3)になって四国乃木会が発足し、改めて神社建設の動きが活発化する。同年12月15日の『香川新報』には次のような記事が掲載されている。

善通寺町に四国乃木会を組織し社殿を建立
善通寺町松崎正次氏発起の乃木神社建立に就ては安藝晋中将久野廉大佐末澤同町長大河原同署長等の賛助を得、四国乃木会なるものを

設け会員組織で建設費を集むる事とし場所は師団司令部裏手鶴ヶ峰本部頂上と定め其同地二町歩は字生野の部落所有の所此程寄附となる。目下青年が勞力奉仕として山麓から道路を開きつゝある

この記事によると、善通寺町の松崎正次が発起人であり、会員を募り会費で神社建設費を集める計画であることがわかる。発起人松崎正次は、1936～40年の間、善通寺町の町会議員を務めた人物で、陸軍省製作フィルム配給等の事業を行っていることから⁽⁵⁾、陸軍との関わりが深い人物だったと考えられる。

また、四国乃木会の設立趣意書には、「曩に現第十一師団長松井中将閣下、普く管下陣没将士の塋域に就き、各々一塊の靈土を収めて合祀の禮を執り、更に軍神乃木將軍の靈殿を営まんとせらる。(中略)於是蹶然奮起して同志を糾合し、將軍遺愛の地に小祠を建設し、英魂を慰むると共に、弛廢せる現代の民心を振作せんとす。』⁽⁶⁾とあり、松井石根が師団長だった時期(1929年8月～1931年10月)に、戦没将士を合祀し、さらに乃木を祀る施設を建設する計画があったことが記されている。

後述するが、松井師団長時代の1930年、陸軍墓地内に戦没将士の合葬墓が作られている。それと合わせて乃木神社の建設が計画されていたということになり、四国乃木会の結成は大正初期の地元有志のような形ではなく、軍部(師団幹部)の意向を受けて松崎が発起したものと考えられる。

(2) 建設地の変更

次に建設地について検討する。神社建設の計画が持ち上がった1928年の時点では、建設予定地について、「場所は師団司令部裏手鶴ヶ峰本部頂上と定め」⁽⁷⁾とあり、神社を建設し、附属施設として護摩堂・合宿所・講堂などを合わせて建設することになっていた。

それが、1932年1月30日の『香川新報』には、「善通寺町四国乃木会では豫てから同町内へ乃木會館を建設すべく計企しその建設地を物色中の處、今回乃木將軍と縁故深い元四三跡東方空地六千坪を坪當り二円で町から払ひ下げを受け総工費四万円

を投じてこれが建築に着手することに決定した」とあり、神社ではなく乃木會館を「元四三跡」(1925年、徳島に移転した歩兵43連隊跡地)に建設することを伝えている。

善通寺町長は、建設地変更の事情として、神社としては許可にならないから乃木會館を建設することになり、會館であれば人が集まりやすい場所に建設したいという乃木会の意向があったことを、1932年1月招集の町会で述べている⁽⁸⁾。しかし、最初に神社が建設され、乃木會館はついに建設されなかった。

1936年3月に四国乃木会から内務省に提出された乃木神社の創立申請書には、「善通寺ニ於ケル大将(乃木-筆者)ノ遺跡トシテハ第十一師団司令部其ノ他各兵營内何レモ所縁アレドモ一般民衆ノ隨時參拜ニ便ナラズ、然ルニ歩兵第四十三連隊址ハ今ハ民有地トナリタルヲ以テ乃木神社建設ニハ四国唯一ノ適地」⁽⁹⁾とあり、一般の参拝に便利な場所に乃木神社を建設することが目的とされていたことがわかる。当初の予定地、鶴ヶ峰は参拝に便利な場所とは言えず、結局會館が建設されなかったことから、本来の目的はやはり神社建設で、第11師団と乃木の関わりを実感させる神社に多くの人を参拝させることを意図して計画が進められたものと考えられる。

(3) 着工から竣工まで

1935年6月本殿が竣工し、引続き乃木會館や社務所などを新築する計画であったが、翌年1月14日の『香川新報』は次のように伝えている。

乃木神祠建設に田代師団長が力コブ 師団関係でも寄附募集 各分会へも依頼状

善通寺町の四国乃木会は去る昭和五年松井大将の時の第十一師団長たりし際、同師団は最も関係深い軍神乃木將軍を祭祀する乃木神祠を建設し以て軍隊精神に資し、且民心の作興すべく熱心に首唱され同会を設置し、故白川大将を総裁に久野大佐を会長に推し松井師団長顧問となりて神祠建設の為三万七千円の予算で寄附金募集の所善通寺町は二千坪の地所を神域として寄進し各方面から多大の賛同あ

ったも白川大将が薨去したので其の後松平伯爵を総裁に仰いで事業を継続して来たが昨年迄に漸く一万円の寄附金を得たのみで夫れを以て神殿の建説に費し昨年六月完成したも其の後寄附金の募集意の如くならず社務所並に拝殿其他附属の設備を完成し難く為に祭神を鎮座すること出来ず従て仮神殿のまゝ雨露に晒されある状態であって同師団創立初代の師団長にして而も軍神として世人の尊崇措く能はざる乃木將軍の英霊を奉祀すべき神殿を斯くの如き状態に放任することに田代現師団長大いに遺憾として此際出来る限り同会を後援することゝなり(後略、下線-筆者・以下同様)

この記事にあるように、本殿竣工後、寄附金の募集が思うように進まず、附属設備の建設が進んでいない状態を放置しておけないということで、田代皖一郎師団長が寄附金募集に協力することになった。具体的には将校・下士官・兵にそれぞれ割当を決め各部隊ごとに集金、在郷軍人にも依頼するという組織的な活動を行った。その結果、1937年5月に拝殿、社務所、鳥居等がすべて完成し、竣工奉賛会が行われた。

竣工間近の1937年3月19日、四国乃木会は奉賛協議会を開き、竣工奉賛祭や大祭・月並祭について話し合った。その様子を伝える『香川新報』の記事は次の通りである。

善通寺乃木神社の大祭は十月三日と決定
月並祭は毎月三日 きのふ奉賛協議会
善通寺町の四国乃木会では十九日午後一時から乃木神社社務所で協議会を開いた。出席者



写真1 善通寺 乃木神社

は久野会長、遠山副会長、松浦町長、鷹塚連合分会長、大久保尽中校長、金刀比羅宮笹井技手其他と師団からは清水経理部長、佐藤高級副官等出席し建物は全部調ふたが此上は玉垣の新調と道路に面する第一鳥居を建立すべく寄附金を集むることゝし竣工奉賛祭は五月三日に行ふて名誉会員から善通寺丸亀の各団体長県知事各部長関係課長主なる在郷軍人町村長会長功労者等五百名を招待し祭典後種々余興を行ふことゝ定めた。尚是迄月並祭を毎月十三日に行ふてゐたが毎月三日に改め例祭を乃木將軍第十一師団長に任命日たる明治三十一年十月三日に付毎年十月三日に行ふこと等協定した。(後略)⁽¹⁰⁾

この記事によれば、それまで13日に行っていた月並祭を毎月3日に、例祭を乃木の師団長任命日である10月3日に行うことを決定している。

他府県の乃木神社では、京都を除き例祭は9月13日、つまり乃木の命日に設定されている(表1)のに対し、善通寺の乃木神社では、10月3日に設定し、それに合わせて例祭日まで変更している。このことは、神社が乃木の顕彰の場というよりも、乃木と善通寺との関わりや、師団の創設を象徴する場所であることを強調しようとする意図の表れと考えることができる。

3. 護国神社の建設

(1) 建設地の選定

香川県護国神社は、1938年(昭和13)香川県招魂社として建設が計画された。護国神社という名称は、1939年の内務省令によって招魂社が改称されたものである。

招魂社は、幕末から明治維新前後に国事に尽くした殉難者の霊を祀るために創設され、その後の戦争による死者を合祀したもの、西南戦争や日清・日露戦争の後、戦没者を祀るために創設されたものなど、創設の時期やその後どのように発展していったかは地域により異なっている⁽¹¹⁾。

香川県では、丸亀歩兵第12連隊や善通寺第11師団の招魂祭、また郡・市や町村単位で招魂祭は行われていたが、香川県全域を崇敬区域とした県の

招魂社と位置づけられる施設はなく、練兵場に臨時に斎場を設けて実施する師団の招魂祭が県レベルのものにとらえられていたようである。

1934年、内務省は「招魂者創立内規ニ関スル件」で招魂社に関する国の方針を明らかにする。その中では、「招魂社ナキ府県ニ在リテハ其区域一円ヲ崇敬区域トナスモノニ限リ一社創立ヲ認ムルコト」とされ、府県ごとに招魂社は原則一社とすることが示されていた⁽¹²⁾。これを受けて、「招魂社ナキ府県」である香川県は、その整備に取り組むことが必要になり、1938年6月に県知事を会長とする香川県招魂社建設期成会が発足した⁽¹³⁾。

県招魂社の建設計画が明らかになると、歩兵第12連隊の所在地・丸亀市が積極的な誘致運動を行った⁽¹⁴⁾。

県下交通の中心地であり又最も古き歴史を有し本県下壮丁の九九%までが入隊して創設以来幾多の事幾度の戦争に於いて輝く〇〇を先頭に武勲赫々幾千の英霊をまつる陸軍墓地を兵営郊外に有する丸亀歩兵第〇〇〇隊の所在地丸亀市に香川県招魂社を設置するのが英霊はもとより県民総意の然らしむる處であると丸亀市では三十日午前十時市記念館に市民代表の市会議員並に区長連合会長・市教育部会長、各種団体長五十余名を緊急招集、各方面に向つての今迄の経過報告と向後の対策を協議（後略）⁽¹⁵⁾

この新聞記事にあるように、丸亀市の主張は、県下交通の中心地であること、歩兵第12連隊が第11師団よりも古い歴史を持つこと、香川県の壮丁のほとんどが入隊する県民にとって縁の深い場所であることにより、県招魂社建設地には丸亀がふさわしいとするものである。

また、1938年の師団の招魂祭は、各県ごとに実施することになったが、香川県では善通寺ではなく、丸亀の練兵場を会場として実施している⁽¹⁶⁾。これらのことから、丸亀に建設すべきだという主張にも、十分な根拠があったと言える。

これに対し建設期成会は、次のような結論を示している。

本招魂社は県内一円を崇敬区域とする神社な

るが故に情に於ては歴史に豊み而も県民子弟の最も多く入営する軍隊の衛戍地区内に建設するを適当とすべく理に於いては周囲、状況神域として最も適当にして将来に亘り其の森巖を損ふ虞なく且祭祀を厳修するに適したる場所たるを要すと思料せられ之等の点を慎重考慮の上候補地を採求したる結果発起人の賛同を得て善通寺町元歩兵第四十三連隊の跡地の一部を以て適地と認めたり⁽¹⁷⁾

「情に於いては」丸亀に建設するのが適当としながらも、「理に於いて」神域として、祭祀を執り行うのに適当な場所であることを考えて検討した結果、善通寺町の歩兵第43連隊跡地・つまり乃木神社隣接地が適当であるという結論を出したのである。その結論に至った背景について、さらに検討を加えたい。



写真2 香川県護国神社

(2) 建設地決定の背景

前述の通り、建設地に選定された歩兵第43連隊跡地は、1925年（大正14）に連隊が徳島へ移転した後の場所で、善通寺町はここに3つの尋常小学校を統合、尋常高等小学校も合わせて移転する計画をたて、土地を購入していた。しかし、尋常小学校の統合移転計画は難航し、1932年尋常高等小学校のみ同地に移転していた⁽¹⁸⁾。跡地のうち、約2千坪は乃木神社建設地として四国乃木会に払い下げられ、招魂社建設地に決定後、約6千坪が町から県に寄附された⁽¹⁹⁾。つまり、建設地とされた場所は、十分な広さの土地が確保できる場所であり、隣接地には乃木神社がすでに建設されている

ことから、将来にわたって神域としての環境を保てる判断されたものと思われる。

さらに周辺に目を向けると招魂社建設地として適当な場所と判断する条件が整っていたことが確認できる。

第1に、松井石根が第11師団長だった時代に計画した合葬墓である。これは、1930年に完成し、3月10日の陸軍記念日に墓前祭が行われている。この年は日露戦争25周年にあたり、県内各地で記念行事が行われた。

合葬墓は、松井が師団長に就任した折、陸軍墓地を参拝し、将士の合葬墓がないことを遺憾に思い建立を計画したとされるが²⁰、「我が将卒の艱苦欠乏頗る甚大であつて其激戦振は振古未曾有と称せられ」「我師団の損害は全国各師団の第一位」²¹という日露戦争の旅順戦・奉天会戦を戦った第11師団の顕彰のため、日露戦争25周年の記念日に合わせて建立されたものと思われる。戦没将士の墓の浄土を収集して葬ったというこの合葬墓については、1930年3月11日の『香川新報』に建設委員の発表内容が紹介されており、その中に「一般官民に於かれましても機会ある毎に御参拝あらむことを希望致します、夫れが為には昼間陸軍墓地の表門は常に開放して御参拝に便せらるゝ筈であります」とあるように、一般の参拝を前提としていたことがわかる。1933年には、「満州事変戦没将士合葬之墓」が同じく陸軍墓地に建設されている。



写真3 戦没将士合葬之墓（善通寺陸軍墓地）

2番目には、1937年に乃木神社が完成していることが挙げられる。

3番目は、1940年に総本山善通寺の境内に忠霊堂が建設されていることである。現在、忠霊堂は聖霊殿という名称に変わっているが、建物は建設当時のまま残っている。建設計画について、1938年3月14日の『香川新報』には次のように掲載されている。

本堂（忠霊堂－筆者）は多宝塔式六角の宝玉形造りと謂ふべきものを設けて夫を納骨堂となし先に従軍布教師森諦圓師の其筋から分祀され持帰つた〇〇部隊の戦病死者将兵全員の遺骨を夫に納め其前へは五間四方の拝殿を建築して位牌を祀ること、し毎年春秋二回に庭儀大供養を実施し忠勇義烈なる忠魂の霊を慰めるもので（後略）

また、寄附募集のために作られた「忠霊供養殿建設趣意書」²²にも、「新に忠霊供養殿を建設して、遺骨と共に支那事変戦没将士の霊牌を奉祠し、日々の御供養を捧げて、忠霊を慰め、菩提を弔ひ、以て鎮護国家の祖風を宣揚いたしたい」とあり、日中戦争の戦没者の供養を目的に建設されたことがわかる。遺骨を持ち帰った従軍布教師森諦圓は、香川県三豊市の出身の真言宗の僧侶で、戦後仁和寺門跡、真言宗御室派管長を務めた人物である。戦前・戦後を通じて同じ真言宗の僧侶として善通寺とのつながりも深かった。

この時、忠霊堂に合わせて護摩堂も新しく建設され、1940年4月に竣工、10日から16日まで忠霊堂で落慶・追悼法要が営まれ、17日から7日間は護摩堂の完成を記念して、国威宣揚祈願祭が行われた²³。

なお、総本山善通寺の南大門は、1907年（明治40）に日露戦争の戦勝記念として再建されたもので、馬に乗ったままで通れるように十分な高さを確保して造られたものと言われている。このことから、総本山善通寺は、軍都にある最大の寺院として当初から師団との関わりは深かったと言え、また国民精神総動員強調週間の行事や皇軍武運長久祈禱会、時局大講演会を主催するなど²⁴、住民の戦意高揚に一定の役割を果たしていた様子もう



写真4 総本山善通寺 忠霊堂

かがえる。

以上のように、第11師団の周辺には、昭和初期以降戦没者を慰霊・顕彰するための施設が整備されていたという状況が確認できる。この状況が招魂社建設地としてプラスになると評価された、つまり丸亀よりも招魂社の役割を効果的に果たせる場所と判断されたものと思われる。

建設中の1939年、内務省令によって招魂社は護国神社に改称され、多くの団体の寄附や奉仕によって、香川県護国神社は1941年に完成した。

おわりに

善通寺における乃木神社と護国神社の建設の過程を詳しく検討した結果、明らかになったことは次の通りである。

乃木神社の建設については、建設時期・経緯ともに他府県のものとは異なり、善通寺においては乃木個人の顕彰よりも、第11師団との関わりを強調するという意図のもとに建設されたと考えられる。

初代師団長である乃木希典は、第11師団の始まりを象徴し、また乃木の指揮下で戦った日露戦争の旅順攻略戦は多くの戦死者を出しながらも、第11師団の名を高めた輝かしい事蹟であった。だからこそ、乃木を顕彰し、乃木との関わりを広く知らしめることは、第11師団にとって重要な意味を持っていたと言える。

つまり、師団の兵士たちの士気を高め、住民や参拝者に郷土部隊である第11師団を支援する意識を持たせる、そのための装置として、戦時体制に向かっていく時期に改めて乃木神社の建設が計画

されたと考えることができる。

護国神社の建設過程では、建設地の選定について検討した。誘致運動を行った丸亀に建設される理由も十分にあったが、乃木神社の建設の意図を考えると、やはり隣接する場所に護国神社が建設される必要があったと理解できる。2つの神社は、隣接して建っていることによって、それぞれの役割をより効果的に果たすことができたのである。また、参拝に訪れる人は、師団の施設を目にし、周辺にある陸軍墓地や総本山善通寺忠霊堂も参拝することができる、そのことも護国神社建設地の選定において重要な要素であったと考えられる。

満州事変以後、増加し続ける戦没者の慰霊・顕彰が重要な課題となる中で、国の方針のもとに全国で護国神社が整備された。香川県護国神社の建設もその流れの中に位置づけられるものであるが、その過程や周辺の状況を検討することによって、乃木神社の建設など地域独自の動きと連動する形で建設が進められたということが確認できた。

今回検討した香川県の事例を、他府県のものと比較することにより、その特徴をさらに明確にしていくことが今後の課題である。

注

- (1) 総本山善通寺編『善通寺史』（2006年）によれば、善通寺は1931年（昭和6）に大本山に昇格、1941年に真言宗善通寺派総本山に昇格する。総本山昇格以前も含め、本稿では史料の原文を引用する以外は、「総本山善通寺」で統一して表記した。
- (2) 香川県教育委員会『香川県の近代化遺産』（2005年）第2章4節。
- (3) 善通寺市教育委員会『善通寺市史』第3巻 849～859頁、陸上自衛隊第13師団司令部四国師団史編さん委員会編『四国師団史』（1972年）31～32頁。
- (4) 金倉寺では、1912年（大正1）9月19日、乃木の死去に伴う法要を行い（『香川新報』1912年9月20日）、その後も周年行事を行っており、客殿および遺品は現在まで大切に保管されている。白峯合戦遺蹟に記念碑を建てる計画については、『香川新報』1913年10月25日に記事が掲載されている。
- (5) 善通寺町役場文書（史料番号1464）「庶務二関スル書類綴」の中に含まれている「第十一回貧民救済大活動写真決算報告」に松崎正次の写真・肩書きが掲載されている。

- (6) 眞田黙男『乃木将軍と四国』（四国教育図書株式会社、1935年）。
- (7) 『香川新報』1928年（昭和3）12月15日。
- (8) 善通寺市教育委員会『善通寺市史』第3巻 1060～1061頁。
- (9) 善通寺町役場文書（史料番号2025）「神社創立申請書」。
- (10) 『香川新報』1937年（昭和12）3月21日。
- (11) 白川哲夫「招魂社の役割と構造―「戦没者慰霊」の再検討―」（『日本史研究』503、2004年）。
- (12) 本康宏史『軍都の慰霊空間』（吉川弘文館、2002年）、今井昭彦『近代日本と戦死者祭祀』（東洋書林、2005年）
- (13) 1938年（昭和13）6月7日の『香川新報』に「本県招魂社の建設期成会近く誕生」の見出しで、趣意書と会則が掲載されている。
- (14) 建設期成会の発足以前から、『香川新報』に「県招魂社の新設は是非丸亀へ 卅日市民大会開く」（1938年5月29日）、「丸亀商工会議所も招魂社誘致運動」（同年6月1日）、「県招魂社建設に関し丸亀市民大会決議文を各方面へ発送」（同年6月2日）などの記事が掲載されており、積極的な誘致運動が行われたことを示している。
- (15) 『香川新報』1938年7月2日。
- (16) 『香川新報』1938年4月1日に、毎年5月に善通寺で執行されている四国四県各隊戦没将士の招魂祭を今年は中止し、各県ごとに慰霊祭を執行することになったこと、香川県では慰霊祭及び招魂祭を丸亀西練兵場で執行することが掲載されている。
- (17) 『香川新報』1938年7月2日。
- (18) 善通寺市教育委員会『善通寺市史』第3巻 209～210頁。
- (19) 善通寺市教育委員会『善通寺市史』第3巻 1075～1078頁。
- (20) 『香川新報』1930年（昭和5）3月11日。
- (21) 『香川新報』1930年3月9日。
- (22) 総本山善通寺所蔵「忠霊供養殿建設趣意の序」。
- (23) 『香川新報』1940年（昭和15）4月11日、4月17日、4月18日。
- (24) 善通寺町役場文書（史料番号1464）「庶務二関スル書類綴」。

報告 3

戦略爆撃と中小都市空襲

～第20航空軍B29による愛媛県への空襲を中心に～

愛媛県今治明德高等学校矢田分校 英語科教諭

藤本 文昭

はじめに

勤務校はかつて米軍の空襲で崩壊し、校長を含む教職員4名、生徒5名の人的被害を被った。この悲劇を総合的な学習の時間の取組みとして2002年から調査を始め、その対象領域を勤務校から今治市、今治市から愛媛県全域へと拡大してきた。また被害者側では空襲という言葉でくくり込まれている殺戮行為が、攻撃側から見ると複数の段階とその段階に応じた目的があったことも今日では明らかになっている。本稿では空襲体験者からの聞き取り調査、空襲実行者（実際に空襲を行った米兵）への聞き取り調査、戦災遺跡の発掘、そして米軍が残している日本本土爆撃に関する記録など複数の視点からB29による四国空襲、特に愛媛県への空襲を検証してみたい。

1. 空襲にまつわる俗説

全国66都市⁽¹⁾が焦土と化した米軍による日本空襲で、約41万人⁽²⁾が犠牲になったと言われている。その大部分がB29（ボーイング爆撃機29号）によるものだが、以下の一覧はB24によって空襲された久留米を含めた67都市である。これに艦載機、艦砲射撃による全国各地の都市、及び那覇をはじめとする沖縄県各市町村、北海道の太平洋沿岸地域を加えると100市町村以上に被害があった。

B29、B24によって焼夷弾空襲、原爆投下された都市（アルファベット順）

明石 尼崎 青森 千葉 銚子 福井 福岡
 福山 岐阜 八王子 浜松 姫路 平塚 広島
 日立 一宮 今治 伊勢崎 鹿児島 川崎
 神戸 久留米 高知 甲府 熊谷 熊本 呉
 桑名 前橋 松山 水戸 門司 長岡 長崎
 名古屋 西宮 延岡 沼津 大垣 大分 岡山

岡崎 大牟田 大阪 佐賀 堺 佐世保 仙台
清水 下関 静岡 高松 徳島 徳山 東京
富山 豊橋 津 敦賀 宇部 宇治山田
宇都宮 宇和島 和歌山 八幡 四日市 横浜

戦後65年を経て、空襲を記憶する人々の数は減少し、それを後世に語り継ぐことも難しくなっている。またこの語り継ぎが空襲体験者の記憶をもとに行われてきたため、必ずしも正確ではなく、強い思い込みや記憶の錯綜、更に戦後の米軍占領政策が相まって虚構を生みだしてきたことも事実である。その一例として京都空襲をあげてみよう。「京都には空襲がなかった」という俗説が戦後長い間流布していた。しかし京都は複数回にわたって空襲を受けており100人近い犠牲者があったことが現在では明らかになっている⁽³⁾。なぜこのような俗説がまかり通ったのか。

小山(2006)は、1952年4月までの連合国軍占領時代に空襲被害を語ることが米軍批判、占領軍批判とされタブー視される傾向があった、と述べている。これに加えて、当時の日本人にとって戦争による犠牲、空襲による被害はごく普通の体験であり、話題になることが少なく、忘れたいことでもあった⁽⁴⁾。この傾向が空襲の歴史的真相を歪めて伝える原因の一つとも考えられている。

岡山県では倉敷が焼夷弾空襲を受けなかったのは大原西洋美術館があったからだ、という俗説がある。日笠(2008)は、倉敷が米軍の焼夷弾空襲の攻撃目標候補にあがっていた事実を示し、倉敷も米軍にとっては小工業都市地域の一つであり米軍の徹底した攻撃の対象であったことを紹介している⁽⁵⁾。奥住(2006)が紹介している「ブランチヤード報告、『中小工業都市地域への攻撃』180都市の表」には倉敷のほかに攻撃目標候補地として金沢、奈良、熱海なども含まれており⁽⁶⁾、米軍にとって文化遺産保護は、攻撃を躊躇させる材料になっていなかったことを物語っている。これらの都市は、単に8月15日までに攻撃順序が回ってこなかったために焼き払われなかっただけである。

1945年、マリアナ諸島に基地を置くB29部隊の第21爆撃機集団(のちに第20航空軍)所属の参謀

が作成した夜間焼夷弾空襲に関する分析報告書の結論部分には次のように書かれている。「日本の市街地域に対する焼夷攻撃は、心理的価値と同時に、はっきりした軍事的価値がある。それは、一つの都市を破壊すれば、日本の戦争経済に活動的につながっている家内工業を破壊するからである。⁽⁷⁾奥住・日笠(2005)はこの結論について「心理的価値とは威嚇であり、戦意を失わせることである。一般市民に対する恐喝空襲terror raidsではないと言ったのが単なる言い訳であることが判る⁽⁸⁾」と述べ、焼夷弾による都市空襲が戦意喪失を狙った戦略爆撃そのものであったことを示している。

四国の県庁所在地などを攻撃目標にした焼夷弾空襲もこのカテゴリーに入る戦略爆撃と見なされている。

2. 四国3都市への空襲

B29による日本本土空襲は1944年6月15日から始まる。インドからガソリンを空輸し中国成都周辺の基地から北九州の八幡製鉄所、長崎、満州の鞍山などを攻撃した。八幡と鞍山のコークス炉を破壊し、戦場で用いる兵器の部品となる鉄鋼の生産を止めることがこの時期の空襲の目的であった。ヒマラヤ越えをして燃料を運び、しかもB29の航続距離をもってしても中国の奥地からの空襲では北九州にしか到達できない。とても能率的な攻撃方法とは言えなかったようである⁽⁹⁾。本格的な本土空襲には日本により近いマリアナ諸島のグアム、サイパン、テニアン島奪取が必要不可欠であった。

1944年8月10日、サイパン陥落の32日後、米軍はB29の離着陸が可能となるよう施設整備を始めた。このマリアナ基地から東京が攻撃されたのは1944年11月24日である。この時期の空襲は中島飛行機武蔵野工場が第1目標となっていたが、同時に東京市街地や港湾地域も第2目標に指定されており、後に主流となる焼夷弾空襲の側面も兼ねていた。ハンセル第21爆撃機集団司令官は、高高度からの精密爆撃を何度も試みたが、日本本土上空のジェット気流などに阻まれ、ワシントンのトップラを満足させる結果を出せなかった。⁽¹⁰⁾1945年

1月20日、ハンセルは更迭され後任にカーチス・E・ルメイが司令官に任命された。この人事に伴い昼間精密爆撃から夜間絨毯爆撃へと戦略の転換が図られた、と見る説もあれば、焼夷弾による都市爆撃はもともと精密爆撃と並んで戦略爆撃として計画されていたと見る説もある（荒井2008）⁽¹¹⁾。いずれにせよ、結果としてルメイが低高度からの焼夷弾空襲を日本空襲の主戦略に置いたことは疑う余地がない。

四国への空襲は1945年4月に始まる。この時期の空襲は3月に連続して実施された東京、名古屋、大阪、神戸など大都市への焼夷電撃戦とは異なり、軍事施設や飛行場を狙った攻撃であった。これは大きな戦略転換ではなく、米軍の内部事情によるものだった。一つ目の事情は、3月の焼夷電撃戦によりマリアナ基地にあった焼夷弾がすべて使い果たされ、一時的に在庫不足に陥ったこと⁽¹²⁾。二つ目は3月27日から5月11日まで第21爆撃機集団が沖縄上陸作戦の後方支援に動員され、戦術爆撃を九州、四国に対して実施する任務をおびていたことだった。この間、夜間焼夷弾空襲は4月13日の東京北部空襲、15日の蒲田・川崎空襲の2回だけであった。

4月末から5月11日まで今治、松山、宇和島が攻撃されたのは、前述のような事情からであり、九州、四国地方から沖縄へ飛んでくる神風特攻機を封じ込めるため、その発進地である飛行場を破壊しようとしたからである。4月26日の今治空襲を記録している米軍の作戦任務報告書には、第1目標「松山飛行場」と記されてある。しかし何らかの理由で目標が、実際には存在していない「今治飛行場」に変更され、今治市街地が攻撃された⁽¹³⁾。攻撃の中心は四国というよりむしろ、大規模な飛行場のあった鹿児島や大分であり、攻撃は昼間に実施され、使用された爆弾も建物に大きなダメージを与える500ポンド（約250kg）から2,000ポンド（約1t）一般目的用爆弾（図1）であった。

5月14日、17日に名古屋市街地が再び焼夷弾によって空襲され、25日には東京が大規模な焼夷弾空襲を受けた。29日には横浜が1回だけの空襲で壊滅し、攻撃目標は西日本に移る。6月1日に大



図1. 500ポンド一般目的用爆弾（米国立公文書館所蔵）

阪、5日に神戸、7日に再び大阪、15日には大阪と尼崎が焼夷弾空襲を受けた。これで大都市への空襲は終了し、攻撃の矛先が中小都市へと移る。6月17日に鹿児島、大牟田、浜松、四日市、19日に豊橋、福岡、静岡、28日に岡山、佐世保、門司、延岡、7月1日に呉、熊本、宇部、下関、そして四国3県の県庁所在地、高松市、徳島市、高知市が7月3日（実際には午前零時を過ぎているので4日というほうが正確である）、ほぼ同時に空襲された。この日、姫路も焼夷弾によって焼かれている。これらの都市はいずれも海岸線に面しており、夜間のレーダーを使った攻撃に適していた。当時のレーダーは内陸部よりも沿岸のほうがより鮮明に解析されるため、攻撃目標は海岸線沿いに広がる都市が選ばれる傾向にあった。また中小都市への空襲は、一晩に3～4都市が2～3時間程度の誤差はあるものの、ほぼ同時に攻撃される特徴を有していた。

夜間の空襲に用いられた焼夷弾には数種類あるが、その中でも対日戦専用に関発されたのがM69焼夷弾（図2）である。この焼夷弾は、木造の日本家屋内でナフサとパーム油が混ざったゲル状油脂が噴き出すように設計されていた。M69は単体

でB29に積み込まれるのではなく、製造段階で38本が束ねられ、E46集束焼夷弾（図3）と呼ばれる約250キロの「親爆弾」の中に仕込まれる。この「親爆弾」が上空1,500m付近で解束し、「子爆弾」であるM69が飛び出す仕組みになっていた。このような集束焼夷弾こそ、現在、使用禁止が叫ばれているクラスター爆弾の原形である。

マリアナ基地に配備されたB29部隊は、終戦時点で5箇航空団（wing）あった。サイパン島に第73航空団、テニアン島に第58航空団と第313航空団、グアム島に第314航空団と第315航空団が展



図2. 製造中のM69焼夷弾（米国立公文書館所蔵）



図3. E46集束焼夷弾（H・Rバーン氏提供）

開していた。1箇航空団の基準兵力はB29、180機である。中小都市空襲では、この航空団がそれぞれの攻撃目標を担当し、各航空団のB29を攻撃目標に向かわせている。つまり、高松市を攻撃したB29の航空団と徳島市を攻撃したB29の航空団とは異なる。高松市を攻撃したのはテニアン西飛行場から飛び立った第58航空団116機、高知市を攻撃したのはサイパン島イスレー飛行場から飛び立った第73航空団125機、徳島市を攻撃したのはグアム島北飛行場から飛び立った第314航空団129機であった。米軍作戦任務報告書によると高松市への最初の爆弾投下は7月4日午前2時56分、最終の爆弾投下が4時42分である。高知市への初弾投下は7月4日午前1時52分、最終投下が2時52分。徳島市への初弾投下は7月4日午前1時24分、最終投下が午前3時19分。

B29は指定された航路、巡航速度で飛行し、攻撃目標上空で爆弾倉に積み込んだ爆弾を一気に吐き出し、また指定された航路で基地に戻る。「B29が頭上を悠然と旋回していた」という空襲体験者の証言があるが、攻撃目標上空で旋回しようものなら、他の攻撃機と接触する危険性がある。B29は目標上空では地上に対して水平を保ち、等間隔で焼夷弾を投下するよう飛行していた。高松空襲に参加した元B29搭乗員はこの日の空襲について次のように書いている。「爆撃航程は高度10,000フィート（約3,000メートル）に設定されていたが、火災による乱気流が激しく、木材の焼けるにおいて機内は充満していた。⁽¹⁴⁾」（バーン2008）目標上空を飛ぶ高度も事前に定められており、搭乗員たちはそれを順守するため、必死であったことが窺える。実際のところ彼ら末端の兵士に悠然とする余裕は無かった。すべては緻密に計算し尽くされた作戦であり、それを勝手に変更することは許されなかった。

3. 中小都市空襲の真の狙い

7月6日に千葉、明石、清水、甲府、9日に仙台、堺、和歌山、岐阜、そして12日に宇都宮、一宮、敦賀、宇和島が空襲された。この日、宇和島は雨が降っており空襲の「効果」が十分に発揮で

きなかった。米軍は空襲後、その効果を確認するため、必ず偵察機を攻撃目標に送る。上空から写真撮影を行い、市街地の面積の何割を焼くことができたかを検証する。この日の空襲で一宮は市街地の0.8%、宇和島は14%しか焼失していない、という結論がでた。そして一宮、宇和島は7月28日に再度空襲されることになる。

7月16日に沼津、大分、桑名、平塚、19日に福井、日立、銚子、岡崎、そして26日から27日にかけて松山、徳山、大牟田が焼き払われた。大牟田も6月の空襲で効果不十分と判断され再度焼夷弾による空襲を受けた。28日に津、青森、宇治山田、大垣が焼かれ、一宮と宇和島が2回目の空襲を受けた。8月1日に八王子、富山、長岡、水戸、5日に佐賀、前橋、西宮、今治が焼夷弾で焼き払われ、6日には広島に原爆が投下される。8日に八幡、福山が攻撃され9日には長崎に2発目の原爆が投下された。中小都市空襲として最後に狙われたのは終戦の日、8月15日未明に攻撃された熊谷と伊勢崎であった。

6月17日から8月15日まで計16回行われた中小都市空襲の真の狙いは何だったのか。日笠(2008)は岡山空襲を準備する際、米軍が用意した「目標情報票」の第4項「(目標の)重要性」のしめくくりの言葉に注目している。その言葉とは次のようなものである。「岡山への空襲は、たとえより小さな都市でも、その都市が戦争遂行上少しでも重要な働きを果たすものならば、見逃されるとか無傷でいることはできないという、さらなる警告となるべきものであらねばならない。」⁽¹⁶⁾

今井(2007)も中小都市空襲に対する焼夷弾攻撃は、単に損害を与えるだけでなく「派手に宣伝して日本側の戦意を挫き、米国民にB29部隊の存在をアピールし、連合国の勝利に寄与することを印象付けようとしていた」と述べ、その証拠として空襲予告ビラで日本国民に心理的圧力をかけたことをあげている。予告通りに空襲を実施すれば、米軍の戦闘能力を誇示し、日本軍部の厳しい報道管制を受けている日本国民にも実物教訓を示すことができる、と⁽¹⁷⁾。

B29部隊も自らこの点を『第20航空軍小史』

(Brief History of the Twentieth Air Force) で認めている。「第20航空軍による最後の5カ月間の働きは、敵を力で押し返した歴史的教訓でもある。この炎の5カ月、B29は堅固に守られた敵の国土を焦土と化し、膠着した戦局を勝利へと導いた。炎の5カ月に、1,000機の米軍機と20,000人の米兵が強情な敵から家屋敷を奪い、恐怖と死をもたらし、事実上荒廃した土地だけが残る状態にまで貶めた。⁽¹⁸⁾ (日笠・藤本2007)」少々乱暴な言い方をすれば、3月9日の東京大空襲から終戦までの5カ月間、つまり夜間焼夷弾空襲に戦略を転換してからの米軍の空襲目的は、軍事的価値に重点を置くよりもむしろ日本国民への心理的圧力、威嚇に重点を置いたものであったと言えるかもしれない。特にそれが顕在化するのが6月17日以降の中小都市空襲であった。日本国民の焦燥感を煽り、厭戦気分を盛り上げることによって戦争の早期終結を図ろうとした米軍の狙いがこの「炎の5カ月」という言葉に表れている。

4. 四国で最も多く米軍に狙われた愛媛県

マリアナ基地の第21爆撃機集団は1945年7月16日をもって改組され第20航空軍となる。四国へのB29による大規模な夜間焼夷弾空襲が高知県、香川県、徳島県では各県庁所在地のみであったのに対し愛媛県では今治市、宇和島市にも及んでいる⁽¹⁹⁾。

愛媛県内への空襲は表1で示すように約44回あったと思われる。米軍資料や日本国内で記録されたものを列挙しているが、詳細不明の空襲も含まれている。また空襲回数のカウント方法も特に定められていないため、同日であっても攻撃時間が異なるものは、それぞれ1つとして数えた。

空母から発進したのはすべて艦載機である。米軍資料から判明したものを記したが、元史料の文字が潰れ判読不明のものもあった⁽²⁰⁾。表1中で戦闘機によらない大型爆撃機による空襲が27回ある。戦争末期の8月になると、沖縄から飛来してきたB24によって松山が攻撃されているが、それを除けば、爆撃機による空襲は、マリアナ基地から飛んできたB29によるものであった。

愛媛県への空襲で特徴的なことは次の3点である。

- ① 県庁所在地松山市のほか、今治市、宇和島市などが合計4回、大規模な夜間焼夷弾空襲を受けている。
- ② 松山海軍航空基地が合計19回艦載機、B29による攻撃を受けている。
- ③ 第509混成群団が模擬原爆パンプキンを4回投下している。

夜間焼夷弾空襲の規模と回数、その他の攻撃規模や回数から判断すると四国4県の中で愛媛県が最も米軍に狙われていたと推測できる。その攻撃目標の43%は松山海軍航空基地であった。四国には7か所の海軍航空基地と1か所の陸軍航空基地があったが戦闘機隊が展開したのは松山と徳島(海軍)、高松(陸軍)だけであった。池田(2005)によると、これらの戦闘機隊が米軍機の迎撃出動をしたのは3月19日の艦載機来襲時だけであった²²⁾。沖縄支援作戦の一環で標的となった松山基地は、5月4日と10日にB29の大規模空襲を受け、事実上その機能はマヒ状態であった²³⁾。

模擬原爆パンプキンとは、長崎型原爆と同じサイズのTNT火薬を使った爆弾のことである。色や形がカボチャに似ていることからパンプキンと俗称されるようになったという。米軍は原爆投下の訓練として日本本土に42発、終戦直前に7発、計49発、この模擬原爆パンプキンを投下した²⁴⁾。通常用いられる爆弾のサイズとしては最も大きく、10,000ポンド(約5トン)の重量があった。松山海軍航空基地に投下された爆弾の多くが500ポンドであったことを考えると、いかにこの爆弾が巨大であったかが想像できる。この巨大爆弾を積み込むには特殊な施設と特別仕様のB29が必要であった。その特殊な任務を担ったのが第509混成群団であった。第313航空団と同じテニアン島北飛行場に展開していた第509混成群団は、原爆投下を実行するために編成された部隊であり、その存在や行動は他のB29部隊からも判らないように極秘にされていた²⁵⁾。

爆弾の中身がプルトニウムやウランでないとしても、前述のような巨大爆弾である。地上で炸裂

した際の威力は大きかった。新居浜に投下された模擬原爆パンプキン2発のうち1発は住友化学工業氷晶石工場に着弾(図4)、死傷者17人、もう1発は住友軽金属製造所第3精錬工場に着弾、重軽傷者28人と記録され、その工場施設に大きな損害を与えた²⁶⁾。西条では現在のクラレ西条工場内の空き地で爆弾が炸裂した。巨大なクレーターができたが損害そのものは軽微であった²⁷⁾。8月8日、宇和島に投下された模擬原爆は坂下津にあった宇和島海軍航空隊の兵舎に着弾(図5)、定員分隊12名、練習生5名、不明1名計18人が亡くなったという²⁸⁾。米戦略爆撃調査団は戦後、新居浜



図4. パンプキンによる被害(新居浜)(住友化学提供)



図5. パンプキンの炸裂の瞬間(宇和島坂下津(米国立公文書館所蔵))

表1. 愛媛県空襲状況 (2010年10月末日までに判明したもの)

	年月日	時間	場所	機種	所属部隊	機数
1	1月31日		保内町	B29	第21爆撃機集団 詳細不明	1
2	3月18日		八幡浜港	F4U-1D	空母イントレピッド第10爆撃戦闘機隊	7
3	3月18日	13:10~13:45	八幡浜	F6F-5	空母ヨークタウン第9爆撃戦闘機隊	16
4	3月19日	7:30	西条・新居浜・松山	F4U-1D	空母イントレピッド第10爆撃戦闘機隊	10
5	3月19日	8:45~10:45	長浜・新居浜・大角鼻	F6F-5	空母ホーネット第17戦闘機隊	16
6	3月19日	7:15	松山西飛行場	F6F-5	空母エセックス第83戦闘機隊	16
7	3月20日	3:45~5:30	松山西飛行場	TBM-3D	空母エンタープライズ第90雷撃機隊	8
8	4月26日	8:47~9:32	今治	B29	第313航空団	15
9	5月4日	8:09~8:25	松山飛行場	B29	第314航空団第330群団	21
10	5月8日	7:36~8:25	今治	B29	第313航空団第9群団	11
11	5月8日	8:00	新居浜	B29 ?	第313航空団 ?	?
12	5月10日	7:26~7:37	松山飛行場	B29	第9群団、第6群団	18
13	5月10日	9:00	宇和島市	B29	第314航空団	1
14	5月14日	13:55	松山西飛行場	SB2C-4	空母ベニントン第82爆撃隊	6
15	5月14日	13:55	松山西飛行場	TBM-3	空母ベニントン第82雷撃機隊	6
16	5月14日	13:30	松山西飛行場	F6F-5	空母ベニントン第82爆撃戦闘機隊	6
17	5月14日		松山西飛行場	F6F-5	空母ホーネット第17戦闘機隊	15
18	5月14日	13:55	松山西飛行場	TMB-3	空母ホーネット第17雷撃機隊	5
19	5月14日	11:45	松山西飛行場	F6F-5	空母ベラーウッド第30爆撃隊	13
20	6月22日	9:00	宇和島市	B29	第58航空団	1
21	6月29日	0:29~1:02	宇和島市	B29	第313航空団	3
22	7月2日	4:00	宇和島市	B29	?	?
23	7月13日	23:28~1:26	宇和島市街地	B29	第314航空団	124
24	7月22日	23:00	宇和島市	B29	?	
25	7月24日	7:45	新居浜	B29	第509混成群団	1
26	7月24日	7:45	新居浜	B29	第509混成群団	1
27	7月24日	5:50	新居浜・松山西飛行場	F6F-5	空母ティコンドロロガ第87爆撃戦闘隊	16
28	7月24日	13:40~14:30	新居浜・松山西飛行場	F6F-5	空母ティコンドロロガ第87爆撃戦闘隊	11
29	7月24日	8:21	西条	B29	第509混成群団	1
30	7月24日	13:20	八幡浜	F6F-5	判読不可	11
31	7月25日	10:40	八幡浜	F6F-5	空母サンジャシント第49爆撃戦闘隊	1
32	7月25日	10:30	宇和島市	F6F-5	空母サンジャシント第49爆撃戦闘隊	2
33	7月26日	23:08~	松山市街地	B29	第73航空団	130
34	7月29日	0:17~1:25	宇和島市市街地	B29	第314航空団	29
35	8月6日	0:05~0:47	今治市街地	B29	第58航空団	65
36	8月6日	1:53、3:05	松山西飛行場	B24	第7航空軍(沖縄)第494爆撃群団	各1
37	8月8日	9:23	宇和島市	B29	第509混成群団	1
38	8月8日	2:14	松山西飛行場	B24	第7航空軍(沖縄)第494爆撃群団	2
39	8月10日	3:30	松山西飛行場	B24	第7航空軍(沖縄)第494爆撃群団	1
40	8月11日	3:38	松山西飛行場	B24	第7航空軍(沖縄)第494爆撃群団	1
41	8月12日	10:25	松山西飛行場	B24	第7航空軍(沖縄)第11爆撃群団	20
42	8月12日	10:22	松山西飛行場	B24	第7航空軍(沖縄)第494爆撃群団	23
43	8月14日	14:16	長浜	B29	第58航空団	2
44	8月14日	午後	松丸村	B29	第58航空団	1

注1 「松山西飛行場」は米軍の呼称であり、「松山飛行場」と同じ、松山海軍航空基地を指していたものと思われる。

注2 地名は空襲当時のものを用いている。

注3 No.1 保内町への空襲は『愛媛県警察史』⁽²⁾には記載されているが、米軍資料では特定できない。No.44の松丸村(現在の松野町)への空襲は米軍資料には記載されているが、8月14日に空襲された記録や証言が現地で得られていない。

を訪れ、パンプキンの威力を詳細に調べ、記録を残している⁽²⁹⁾。

5. 空襲実行のための情報

都市空襲を実行するに当たって、米軍は偵察機で攻撃目標上空を飛び、解像度の非常に高い写真を撮った⁽³⁰⁾。それらを合成しリトモザイクと呼ばれる座標のついた合成航空写真を作る。今治のリトモザイク（図6）を見ると、攻撃目標である市街地を黄色の円で囲っている。その中に特に重点を置くべき工場などの目標を番号で表す。これらの工場の位置は写真で見える屋根の形状や米軍の捕虜となった日本兵から聞き出した情報などを総合して確定した。

日本軍の捕虜を尋問したMIS (Military Intelligence Service) 所属の日系2世のグラントヒラバヤシ氏は、「捕虜になり自暴自棄となった日本兵に親切に対応し、丁寧に接することで自分たちの故郷の情報を聞き出すことが容易であった」と語っている⁽³¹⁾。何も知らない日本兵捕虜が、心を開いて自分の故郷の話をする、実はそれが空襲するための情報として用いられていた⁽³²⁾。米国立公文書館に保存されている膨大な日本兵捕虜尋問調書には、その捕虜が勤務していた会社や工場、

軍事施設の有無など図解入りで細かく記録されている。図7は日本人捕虜の尋問調書に描かれた愛媛県新居浜市の沿岸部分である。

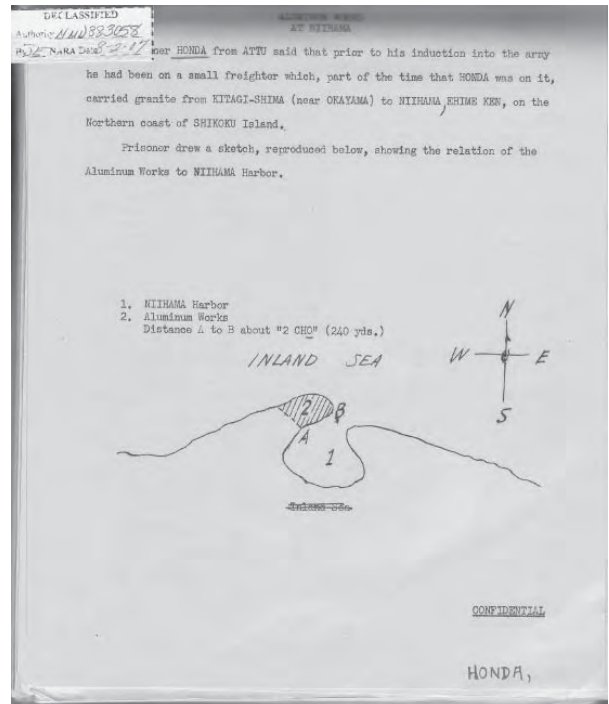


図7. 日本人捕虜尋問調書（米国立公文書館所蔵）

6. 米軍側の太平洋戦争に関する総括

米軍上層部は、精密爆撃こそ主たる戦略であるという信念を持っていた。夜間焼夷弾空襲を実行したあのカーチス・E・ルメイでさえ、「高高度精密爆撃のやり方がすべての基礎基本である」という態度を常に持ち続けていた⁽³³⁾。焼夷弾を用いた都市焦土作戦を提案してきたのは彼ら軍人ではなく、むしろ科学者や民間人であった。事実、対日戦専用のM69焼夷弾の開発を担ったのはスタンダード石油副社長R・ラッセルであり、戦争を早期終結させるために「最小の兵力で最大の損害を与える」のが都市焦土作戦であると主張したのはレイモンド・イーウェルという化学者とその研究グループであった⁽³⁴⁾。ルメイが焼夷弾による低高度攻撃に踏み切ったのは、この民間人が主張する対費用効果を狙ったものであった。ルメイという人物は、早期に戦争を勝利へと導くという目的のためなら軍人としての信念を一時的にかなぐり捨てることも、市民を殺戮することも厭わない司令官であった⁽³⁵⁾。



図6. 今治市のリトモザイク（一部拡大）（米国立公文書館所蔵）

米軍の日本本土空襲は前述のように大戦末期の5カ月に集中している。4月～5月中旬までの沖縄上陸作戦の支援時期を除くと大部分が焼夷弾による攻撃である。これらの空襲は先に述べた情報収集、グアム島にあるマリアナ基地司令部での攻撃計画の立案、各部隊による実行、そして検証と総括を繰り返しながら行われた。米戦略爆撃調査団は1945年9月から12月にかけて来日し、空襲によって荒廃した全国各地を調査し、その最終報告を1946年7月にワシントンの上層部に提出し、自分たちの太平洋戦争における対日戦略を次のように総括している³⁶⁾。

- ① 制空権を獲ることが戦略上最優先課題である。
- ② 制空権を獲るためには陸海空の戦力が共同で作戦を遂行するべきである。
- ③ 敵から制空権を完全に奪うことは不可能だが、味方の損害が許容範囲内になる程度までには安全性を高めておく必要がある。
- ④ 空からの攻撃には様々な制限がある。たとえ補給路を断っても一般目的用爆弾では洞穴などに隠れた残存の日本本土外の日本軍陸戦部隊を殲滅することはできなかった。超距離爆撃機の飛行航続距離は、1,500マイルに制限されていた。仮に飛行できたとしても、緊急着陸のための日本本土により近い基地と戦闘機による護衛が不可欠であった。これらは今後の課題として残るだろう。
- ⑤ ヨーロッパ戦線での検証から、敵の戦争継続資源を攻撃し、決定的打撃を与えるには精査して選んだ攻撃目標に継続的な精密爆撃を行うことが必要である。
- ⑥ ヨーロッパで戦争が起こるまで陸海軍ともに航空戦力の重要性を認識せず、過小評価していた。そのため航空戦力そのものが質量ともに日米開戦当時、劣っていた。開戦後に機能改善と量産に踏み切ったが、もっと早期に準備しておくべきだった。1943年末までには日本が意識していた以上に米軍は航空戦力を重視し、よって最終的な勝利

を得ることになった。

- ⑦ マリアナ諸島を奪取する前に、潜水艦に諜報活動させ、日本船の破壊と石油基地や金属工場を破壊するため、中国の基地からB29に低高度爆撃と機雷敷設を実施させておけばもっと効果的であった。
- ⑧ 米軍は日本国内の情報不足に悩んでいた。米軍が日本の軍艦ではなく商船を狙い、早期に機雷敷設を始め、1945年4月段階で日本国内の鉄道施設破壊に踏み切っておれば、日本はもっと早く経済的に窒息状態になっていたであろう。
- ⑨ 戦時ではなく平時から諜報活動に従事し、国防力をつけるべきである。

米軍は何のために調査団を結成し膨大な資料を短時間にまとめさせ上記の総括をしたか。次の戦争に備えるためである。戦後65年間に米国が歩んだ跡を追えば自明である。

7. 空襲による犠牲者の数

表2は、四国4県での空襲犠牲者数である。行政や民間団体が調査した結果であるが、規模の大きな空襲になればなるほど調査団体によって犠牲者数が曖昧になる。なぜこんなに犠牲者数が異なるのか。その理由として、概数でしか把握できないほど当時は混乱していたということ、戦時下行政や軍部ができるだけ被害や犠牲者数を公表しないように情報操作をしていたことなどが考えられる。マスコミや一般市民への弾圧や統制が強められていた時代だけに事実を掴むことは困難であった。

空襲の被害を伝える当時の新聞は、事実を伝えるのではなく、無理やり国民を鼓舞しようとする言葉で満ちていた。「わが本土決戦への戦力の蓄積はかかる敵の空襲によって阻止せられるものではなく、かへって敵のこの暴挙に対し、滅敵の戦意はいよいよ激しく爆煙のうちから盛り上がるであろう」(1945年3月11日付朝日新聞)この記事を読んだ空襲体験者は当時これをどんな気持ちで読んでいたことか。東京に限らず、全国各地で空

表2. 四国4県における空襲犠牲者数

市町村名	県名	経済安定本部	建設省	被災都市連盟	第一復員省	戦略爆撃調査団	東京新聞
	徳島県	570	1166	741	1070	1070	1710
徳島市	徳島	570	1166	741	1070	1070	1700
海南町	徳島						8
松茂町	徳島						2
	香川県	927	1273	1316	1274	1273	1359
高松市	香川	927	1273	1316	1274	1273	1359
	愛媛県	1132	1093	1236	987	870	1097
松山市	愛媛	353	251	411	380	380	251
今治市	愛媛	522	454	551	342	242	551
宇和島市	愛媛	240	371	274	248	248	278
八幡浜市	愛媛	4	4		4		4
新居浜市	愛媛	13	13		13		13
	高知県	647	401	401	447	447	487
高知市		401	401	401	447	447	487
合計	四県	3276	3933	3694	3778	3660	4653

襲後に発行された新聞には「損害軽微」、「軍官民は不敵な敵の盲爆に一体となって対処」などのフレーズが踊っていた。奥住・早乙女（2007）は「いまあらためて読み返すとき、まさに滑稽としか言いようのない内容である。国民は、目と耳を、そして口をふさがれていたも同然だったのだ」と述べている³⁷⁾。

戦後になっても自治体が犠牲者の追跡に力を入れたところとそうでないところで、犠牲者数の信頼度が異なる。空襲・戦災を記録する会全国連絡会議では、民間団体として各地域の空襲犠牲者数を再調査しようと試みている。しかし調査を完全にしようとすればするほど、どうしても不明部分が残るものである。奥住（1988）は「戦争においては、市民個人の存在は無に帰する。一空襲の犠牲者数が何千何百何十何名などと端数まで示してあるのは、実は全くの虚構に過ぎない」と述べている³⁸⁾。戦後65年を経た現在では、その虚構を根拠あるものに訂正しようとする自体不可能なのかもしれない。

おわりに

四国在住の空襲体験者の大部分が語り継いでいるのは火災を起こさせる夜間焼夷弾空襲のことである。米軍が地方の中小都市を空襲し始めたのは、

戦争の早期終結を意図したものであった。その意図こそ戦略爆撃と呼ばれる概念である。

戦略爆撃とは戦場への爆撃ではなく、その後方にある非戦闘地域、都市を組織的に爆撃することで戦争継続能力を奪い、戦争を早期に終結させる、という考え方である。これは第1次大戦後にアメリカのビリー・ミッチェルという軍人が提唱したものであった。この発想は航空機の発達とともに現実味を帯びてくるようになり、世界史上、最初に戦略爆撃を実行したのは日本軍だと言われている。これについても1937年のドイツ・イタリア軍機によるスペインのゲルニカ爆撃、さらに遡って1920年代のモロッコでのリーフ戦争にまでその起源を求めることができる（荒井2008）³⁹⁾。しかし都市そのものを対象とした長期的・意図的・継続的な爆撃として日本軍の重慶爆撃を最初の戦略爆撃と位置付けることは可能であろう。

戦略爆撃は、1938年12月から1941年9月まで続いた日本軍による重慶爆撃に始まり、現在に至るまで殺傷力、命中度を進化させながら戦争の手段として使われている。クラスター爆弾や劣化ウラン弾が非人道兵器であると問題になったことも記憶に新しい。これらの兵器は戦争が終わっても後遺症を残す。だから非人道的と言われるのであろうが、どの兵器にしても人を不幸にさ

せる点ではすべて非人道的であると見なさねばなるまい。夜間焼夷弾空襲で使用された焼夷弾について、1983年に発効した特定通常兵器使用禁止制限条約第3議定書「焼夷兵器の禁止または制限に関する議定書」によって文民に対する使用が禁止された。新兵器が開発されるごとに後追いで禁止条約や制限条約が結ばれる。せっかく締結した条約にも、その有効性に問題を残す「抜け道」を作ってしまう、というのが国際社会の現状である。

空襲がいかに凄惨なものであったかを体験者が語り継ぐのは何のためか。それは2度と同じ悲劇を繰り返してはならないという警告と戒めを後世に伝えるためである。非人道的な兵器そのものの開発や空爆を禁止させる議論ができる環境を作るために、国際世論を強めていかねばならない。

本稿は、日本空襲という本土に住む人々が犠牲を強いられた局面だけを取り上げてきたため、国内に家族を残し「国のため、家族のため」に一命を賭して戦った人々について触れることがなかった。論を閉じるにあたり、筆者が最近取材した元日本海軍戦闘機パイロット原田要氏の言葉を紹介したい。原田氏は、真珠湾攻撃、ミッドウェー海戦などに参加し、多くの米英軍機を撃墜した。海外では「エース（優秀なパイロット）」と称される氏であるが、自分が放った銃弾で火だるまになりながら苦悶の表情を浮かべ、落ちて行く米英パイロットたちの姿が94歳の今になっても忘れられないと言う。「戦争とは『何の恨みも憎しみもない人と人とが殺しあわなければならない、相手を殺さなければ自分が殺される。そして最終的には弱い女子供に犠牲のしわ寄せを強い、未来をも破壊に追いやる、冷酷無比の極限』が実態だ、と私は確信し、深く反省し、戦争の起こらない世の中が永く続くことを祈り、平和の尊さを声を大にして叫び、自分が多くの人命を奪った行為の償いを、余生のすべてに背負い果たしたいと心に誓っている現在です。(原田2010)⁴⁰⁾

【付記】本稿は、第3回四国地域史連絡協議会（徳島大会2010年7月25日）で「近代四国における戦争と地域社会」をテーマに口頭報告した内容に加筆・訂正したものである。参考・引用文献は日本語訳が出版されているもの、または国立国会図書館で検索できるものを使用した。発表、出版に際してご助言下さった皆様にお礼申し上げる。

注

- (1) 奥住喜重 (2001) 『米軍新資料 八王子空襲の記録』 揺籃社、pp.40-41。
- (2) 東京大空襲・戦災資料センター (2009) 『東京・ゲルニカ・重慶 空襲から平和を考える』 岩波書店、p30。
- (3) 福林徹 (2007) 「京都空襲再考」 『空襲通信 一 空襲・戦災を記録する会全国連絡会議会報』 第9号、pp.37-48。
- (4) 小山仁示 (2006) 「自治体史における空襲・戦災の叙述について — 『姫路市史』 の場合 — 」 『戦争と平和』 第15号、pp.53-63。
- (5) 日笠俊男 (2008) 『空襲の史料学 一 史料の収集・選択・批判の試み —』 大学教育出版、pp.83-89。
- (6) 奥住喜重 (2006) 『B-29 64都市を焼く 1944年11月より1945年8月15日まで』 揺籃社、pp.103-109。
- (7) 奥住喜重・日笠俊男 (2005) 『米軍資料 ルメイの焼夷電撃戦 参謀による分析報告』 吉備人出版、p77。
- (8) 奥住喜重・日笠俊男 (2005) 前掲書、p103。
- (9) 北九州の戦争を記録する会 (2000) 『米軍資料 八幡製鉄所空襲』、p241。
- (10) 永沢道雄 (2003) 『なぜ都市が空襲されたのか』 光人社、pp.172-175。
- (11) 荒井信一 (2008) 『空爆の歴史—終わらない大量虐殺』 岩波書店、pp.128-129。
- (12) 奥住喜重 (2006) 前掲書、p71。
- (13) 藤本文昭 (2005) 「米軍資料から見る今治空襲の全容」 『今治市の戦災 あなたに伝えたい』 今治市の戦災を記録する会、p220。
- (14) H・Rバーン (2008) 『63年目の攻撃目標 元B29搭乗員飛行記録』 創風社出版、p155。
- (15) 松野町在住の金谷透氏の調査によると、7月12日の宇和島空襲の余波は三間町の4か所、則（すなわち）、迫目（はざめ）、是能（これよし）、中間（なかいだ）でも確認されている。中間では乳幼児一人と男児一人が死亡。このうち男児は、空襲翌日の13日に地上に落下していたE46集束焼夷弾のプロペラ信管を触っていて暴発、腹部に致命傷を負い死亡したという。
- (16) 日笠俊男 (2008) 前掲書、p83。
- (17) 今井精一 (2007) 「大戦最末期の都市空襲と前橋空襲」 『空襲通信 一 空襲・戦災を記録する会全国連絡会議会報』 第9号、pp.26-36。

- (18) 日笠俊男・藤本文昭訳 (2007) 『日本上空の米第20航空軍』 大学教育出版、p14。
- (19) 小数機のB29による一般目的用爆弾を用いた空襲は四国各地で記録されている。高知県への空襲については、梅原憲作 (2004) 『高知市空襲と県下の戦災』 土佐史談第230号、pp.126-138 が詳しい。
- (20) 艦載機空襲の記録は国立国会図書館憲政資料室所蔵のマイクロフィルム“Navy and Marine Corps Aircraft Action Reports 1944-1945”Entry No.55で検索できる。
- (21) 愛媛県警本部 (1978) 『愛媛県警察史』 No. 2、pp.535-537。
- (22) 池田宏信 (2005) 『昭和二〇年八月、愛媛の本土決戦準備始末』 晴耕雨読、p24-25。
- (23) 5月10日の松山海軍航空基地への空襲に参加した元B29搭乗員は、松山に向かう爆撃航程でリン性爆弾による日本軍の迎撃があったと証言している。日本軍の開発した対空爆弾「タ弾」の可能性が考えられるが、この迎撃がどの基地から行われたのか不明である。
モーリス アシュランド (2008) 「戦争当時のこと」 『今治市の戦災 あなたに伝えたい 第2集』 今治市の戦災を記録する会、p68-70。
- (24) 工藤洋三 (2008) 『写真が語る日本空襲』 現代史料出版、pp167-178。
- (25) H・Rバーン (2008) 前掲書、p83。
- (26) 平田堅一 (1998) 「あの戦争と私」 『新居浜史談276・277合併号』 新居浜郷土史談会、p20。
- (27) クラレ西条工場回顧編纂委員会 (1987) 『クラレ西条工場五十年の回顧』、p23。
- (28) 池田宏信 (2005) 前掲書、p130。
- (29) 愛媛大学・今治明德高校矢田分校が編集した映像記録『愛媛の空襲』には米戦略爆撃調査団がカラーフィルムで撮影した新居浜市惣開町、菊本町の住友工場群での被害状況が紹介されている。
- (30) 工藤洋三 (2001) 「写真偵察機F-13」 『空襲通信 - 空襲・戦災を記録する会全国連絡会議会報』 第3号、pp.35-41。
- (31) 今治市の戦災を記録する会 (2008) 『あなたに伝えたい 今治市の戦災 (映像版)』 で日本兵捕虜への対応をヒラバヤシ氏が語っている。
- (32) 四国・九州地域に関する米軍の諜報資料の記録は国立国会図書館憲政資料室所蔵のマイクロフィルム“Records of the U.S. Strategic Bombing Survey” Entry No.44: Joint Army-Navy Intelligence Studies (JANIS),1944-1945: Roll Number8-10にあるNo.84,SouthwestJapan: Kyushu, Shikoku and Southwestern Honshu, Vol1-2で検索できる。
- 尚、日本兵捕虜からの情報収集については、中田整一 (2010) 『トレイシー日本兵捕虜秘密尋問所』 講談社、pp.134-165が詳しい。
- (33) 日笠俊男・藤本文昭 (2010) 「米軍資料『第21爆撃機集団 戦闘搭乗員マニュアル』について」 『空襲通信 - 空襲・戦災を記録する会全国連絡会議会報』 第12号、pp.2-6。
- (34) 奥住喜重 (2006) 「イーウェルからブッシュへ、日本の都市を焼夷攻撃せよ」 『空襲通信 - 空襲・戦災を記録する会全国連絡会議会報』 第11号、pp.11-16。
- (35) E・バートレット・カー (2001) 『東京大空襲 B29から見た3月10日の真実』 光人社NF文庫、p137。
- (36) 米戦略爆撃調査団最終報告は国立国会図書館憲政資料室所蔵のマイクロフィルム“Records of the U.S. Strategic Bombing Survey”Entry No.2: Final Reports of the United States Bombing Survey,1945-1947で検索できる。この最終報告は108本のレポートから構成されているが、ここで紹介するのは1本目の“Summary Report (Pacific War)”のpp.27-32である。尚、この最終報告書に関しての憲政資料室での分類名はYD-208である。
- (37) 奥住喜重・早乙女勝元 (2007) 『新版・東京を爆破せよ - 米軍作戦任務報告書は語る -』 三省堂、p243。
- (38) 奥住喜重 (1988) 『中小都市空襲』 三省堂、p224。
- (39) 荒井信一 (2008) 前掲書、p28。
- (40) 原田要 (2010) 『九十余年を生きて 元零戦パイロット原田要 世界平和への証言』、p18。

戦時体制の進展と 徳島の農村女性

摂南大学教授
佐藤 正志

はじめに ―戦時体制期の農村女性へのまなざし

1931年（昭和6）の満洲事変をきっかけに、中国と戦争状態に入った日本は、さらに米国をはじめ連合国との戦争に突入し、戦場はアジア・太平洋全域に拡大した。戦場となった地域の人々に多大の犠牲と苦痛を与え続けた戦争は、1945年8月に日本の敗戦で終結した。この15年にわたる戦争の間、女性たちはどのような日常を過ごしていたのだろうか。彼女たちは戦争の被害者として、時代の波に飲み込まれ、流されていたのだろうか。

戦時体制の進展のなかで女性が果たした役割をいかに評価するか。国防婦人会をはじめとする「銃後」の女性の歴史を対象とした最近の研究は、おしなべて「女性を戦争や動員体制の被害者であると同時に加害者であった」との評価を行っている⁽¹⁾。本稿は、戦時体制下の徳島の女性、特に農村女性などの日常を対象に、上記の評価について検証する。

ところで、戦時体制への移行とともに、農村社会のシステムは大きく変化した。とくに徳島県においても大正末期から農村社会を揺るがした小作争議は、戦時期においても散発してはいたが、1940年に全国農民組合徳島県連会支部が解散したように、農民運動はなし崩しの後退か、あるいは強権的な解体によって終息を迎えた⁽²⁾。一方で、その間、農地調整法の制定や自作農創設政策の展開などによって地主的土地所有の後退がみられ、農村では階級・階層の平準化がもたらされ、戦後の農地改革の条件を整備しつつあった。また、戦争の長期化に伴い、青壮年男性が応召されたため、それまで農作業の中心となっていた男子労働力が不足し、女性が果たす役割や存在感が大きくなっていった。しかし一方で、食糧増産の掛け声が強まるなか、炊事、裁縫、洗濯などの家事労働や妊娠・

出産、子育て、老親介護などの負担を一身に背負っていた農村の女性たちには、さらに農業労働力の主体として一層の重荷が掛かってきたのである。

第1章 農村における「遊び仕事」の解体と 農村女性の組織化

1. 農家副業と「遊び仕事」

徳島県の二毛作地帯である那賀・勝浦両郡では、藁をなつて縄や蓆（ムシロ）を作る藁加工が、農家の副業として盛んに行われた。また、蓆を二つ折りにして、左右両端を縄で綴った仄（カマス）が大量に製造され、肥料の包装用などの需要がある大阪や和歌山などに移出された。農家副業は、農村において自給自足が崩れ始めた明治末から急速に広がっていたが、1930年代の不況期において、農家経営を支えるものとして、県や農会によって積極的に奨励された。なかでも藁加工は、1931年に県下の総農家戸数の26%、2万1600戸が従事し、生産額では約66万円に達し、全国第12位になるなど、本県副業にとって重要な位置を占めていた⁽³⁾。

この藁細工（ワラ仕事）の作業において、娘のいる家に村の若い衆（し）が数人寄っては、縄ないの仕事を手伝いながら、世間話を楽しんでいた様子が『羽ノ浦町誌 民俗編』（羽ノ浦町教育委員会、1992年）に紹介されており、藁細工の作業場が村落における男女青年層らの交流（交際・情報交換）の場となっていたことが分かる。こうした点からみれば、この藁工品生産という仕事は、単に「経済合理性」や「市場競争」によってのみ行われたものでなく、「非合理的」で「遊び」の要素を含んだ「生業」として行われていたことを示している。民俗学者の安室知らのいう「遊び仕事」そのものであったといえよう⁽⁴⁾。同様のワラ仕事の様子は、東北地方などでも見られた⁽⁵⁾。

しかし、藁工品生産が農家副業としての重要な位置づけがなされ、1930年代に至り農村不況克服のために経済更生運動が始まり生産性向上を目指した「競争」が開始されると、藁工品生産の「遊び仕事」としての要素は解体し、その仕事の性格は大きく変容していった。

2. 「愛農婦人会」による農村女性の組織化

さらに、1930年代の経済更生運動期には、農業を支える農村女性の存在と能力活用が注目され、「農事の改良発達と農家の生活改善とは、婦人の努力に俟つべきもの多」く、それを「指導し其活動を促す上に於て、団体を組織せしむる」必要から、農村での女性団体が組織化が進んだ。徳島県では、1929年から県や県農会が主導し、農事改良実行組（合）を基盤として、その「婦人部」と位置づけた「愛農婦人会」が組織されはじめた。この愛農婦人会の目的は、「婦女の愛農勤勉の良風を喚起し併て合理的農業経営並びに生活改善の遂行」することにあつた。女性の立場から農村生活の改善・合理化によって農家経済の建て直しに寄与することが期待されたのである⁽⁶⁾。こうして1932年には、表1のように、那賀郡を中心に374団体が設立された。

表1. 愛農婦人会の団体数・会員数（人）

	団体数	会員数
名東	35	1,011
勝浦	36	1,898
那賀	123	5,324
海部	12	1,412
名西	23	796
板野	27	1,286
阿波	47	1,444
麻植	15	595
美馬	45	1,911
三好	11	730
合計	374	16,407

（出所）『大阪朝日新聞』
1932年2月13日

愛農婦人会では、農業経営や農家生活の改善をテーマとする講習会を開く一方で、蒔刈作りの競技会などを実施した。農会や那賀郡蒔刈同業組合などが主催して愛婦が参加し、期限を設けて蒔の生産枚数と品質を競う「競争打ち」への農村女性の参加は、彼女らを競争に巻き込み、「経済合理性」にもとづく品質改善の担い手へと変身させていった。さらに、満洲事変を契機に戦時体制が漸次構築されていくなかで、愛農婦人会の活動は大きく変質していった。本来の農業関連の事業に加えて、発足時の会則にはなかった軍事後援事業など「銃後活動」が頻繁に行われるようになっていった⁽⁷⁾。

なお、徳島県では全国的に見られた産業組合の婦人部の結成が進捗せず、農会によって愛農婦人会を通じた女性の組織化が見られた。それは、同県では農会が産業組合より強い組織力を持っていたことを示している。また、羽ノ浦のように愛農

婦人会が組織された農村では、それは国防婦人会分会の軍事後援機能を補完していたとも言えよう⁽⁸⁾。

第2章 戦時体制の進展と農村女性の活動

1. 徳島県における女性団体の設立とその発展

愛農婦人会以外の徳島県の婦人団体についてみると、日露戦後から農村では女子青年会や処女会などが増加しつつあった⁽⁹⁾。さらに、第2次大戦期において戦時体制が進展するなかで、大日本国防婦人会を中心として愛国婦人会や前述の愛農婦人会など女性団体による「銃後活動」が盛んに行われはじめた。

そうしたなかで、徳島県では1905年（明治38）に愛国婦人会徳島県支部が軍人遺家族援護を目的に設立された。愛婦は内務省の指導監督を受け、日露戦争期に会勢を伸張させるが、戦後には平和が続いたため、軍事援護活動よりも貧民救済、母子福祉などの社会事業が活動の中心となっていた。また、愛婦は皇族を総裁とし、地方では県支部長に知事夫人が就任するなど、会員の社会的ステータスが高かった。そのため、「県庁所在地での名流婦人のサロン」となり、「一部上流婦人や有産婦人の会合」であるとの批判を受けることが多く、大衆的な組織基盤が脆弱であった⁽¹⁰⁾。さらに、大日本連合婦人会の設立（1930年、徳島県婦人会連合会の設立は1931年）や国防婦人会の勢力伸長がみられたため、1932年には会員増徴計画や分会を設けるなど機構改革を実施して、他団体と対抗しつつ組織基盤の拡大に努めた。しかし、全国的に

表2. 愛国婦人会徳島県支部会員数（1940年11月）

	女性人口	会員数	会員比率
徳島市	62,111	8,817	14.20
名東郡	13,427	1,904	14.18
勝浦郡	21,427	2,616	12.21
那賀郡	45,772	5,917	12.93
海部郡	21,577	3,176	14.72
名西郡	21,519	3,485	16.19
板野郡	56,350	6,522	11.57
阿波郡	19,682	1,953	9.92
麻植郡	25,269	3,095	12.25
美馬郡	43,732	3,911	8.94
三好郡	35,866	4,137	11.53
合計	366,732	45,533	12.42

（出所）愛国婦人会徳島県支部『昭和15年度事業概要』

表3. 大日本国防婦人会徳島本部支部会員数（1938年）

	女性人口	会員数	会員比率
徳島市	63,156	16,643	26.35
名東郡	13,701	3,532	25.78
勝浦郡	21,409	6,386	29.83
那賀郡	41,387	12,066	29.15
丹生谷	5,997	1,801	30.03
海部郡	22,135	7,189	32.48
名西郡	21,177	5,590	26.40
板野郡	46,921	11,982	25.54
撫養	9,673	3,064	31.68
阿波郡	19,361	5,114	26.41
麻植郡	14,819	5,517	37.23
美馬郡	43,969	9,600	21.83
三好郡	36,442	9,225	25.31
合計	370,174	101,509	27.42

（出所）『大日本国防婦人会徳島本部会員状況一覧表（昭和十四年一月生）』（谷家文書）

（注）合計数には、独立分会の数を含む。

は1936年に後発の国防婦人会の会員数が国婦のそれを凌駕しており、徳島県においても、表2と表3から分かるように、1940年前には国防婦人会の組織率が2倍以上になるなど、国婦の組織力が愛婦のそれを圧倒していたことを示している。

2. 大日本国防婦人会徳島地方本部の成立

ところで、大日本国防婦人会は、大阪の主婦・安田せいが大坂港からの出征、入営する兵士たちの見送りを始めたことにはじまる。1932年に設立された大阪国防婦人会とその後誕生した東京国防婦人会を母体として、1934年に設立された。

徳島県では、関西方面の国婦の活発な活動に刺激を受けた徳島市連合婦人会長の片山カズらが連隊区司令部にその設立を働きかけたが、当初は気運が盛り上がらなかった。その後、1934年に至り、徳島連隊区司令官の指令にもとづき郷軍人会の支援で各地に支部設立がなされ、国婦の組織化が本格化し、1935年3月に徳島地方本部が発足した。同会は県内全域において16歳以上の女性を組織し、出征軍人の歓送迎をはじめ、傷痍軍人や遺家族の後援、慰問品募集などを中核とする軍事後援事業を行った。この軍事後援活動は、愛国婦人会が行っていた活動とほとんど違いがなかったため、両団体間において会員の獲得をめくり激しい競争や対立を惹起した。池田などでは両団体の対立が一部にみられた。また、愛国婦人会が「県

を背景として已に相当の勢力」を有していたため、国婦に対しては徳島県もそれほど協力的ではなかった。もちろん、農村部などでは両団体のリーダーやメンバーが重複するところも多く、そうしたところでは対立が生じなかった。なお、1942年（昭和17）に国婦は大日本婦人会へと統合され解散するが、その時点において、徳島地方本部は分会数182、会員数12万6千人を擁する県内最大規模の団体に成長していた⁽¹⁾。

3. 国防婦人会の活動

国防婦人会のトレードマークである「かつぼう（エプロン）着」と「たすきがけ」姿の女性たちは、「銃後活動」をいかに担ったのであろうか。徳島地方本部が解散時に発行した『国婦 銃後の花』（1942年）から活動の一端をみておこう。

まず、徳島本部の会則には、会の目的として「銃後ノ後援」と「婦徳ノ涵養ト国防訓練」が掲げられていた。前者には「出征（在営）将兵ノ激励、凱旋（返還）将兵ニ対スル感謝・慰問、傷病将兵ノ慰問・看護、戦病死者ニ対スル弔問・慰靈、軍人遺家族ノ慰藉、救恤並ニ後援、陸軍墓地参拝」といった活動内容が列挙されている。また、後者の目標実現のために、「講演、映画見学等ニ依ル国防思想ノ普及並婦徳ノ修養、各種ノ訓練、其ノ他」等が行われることになっていた。

次に、徳島本部の具体的な活動について見ると、まず、多くの分会が出征兵士の送迎を行い、出征（在営）兵士らに慰問状を発送している。また、ミカンなどの果実や菓子、地元特産品などを慰問品として携行し、連隊や徳島陸軍病院をはじめとする県内外の軍施設を訪問している。小松島町、撫養町（現鳴門市）分会では、海軍艦隊入港の際、上陸した将兵に茶菓の接待をし、時には演芸会を催してもてなしている。1938年（昭和13）には、国婦本部の要請を受け、毛布7,000枚を集めて献納し、梅干し供出、廃品回収にも協力した。また、1936年の「満洲事変五周年記念事業」では、在満部隊宛に慰問袋6,540個を送付するなど活発な活動を行い、県本部が発足以来6年間に集めた慰問袋の総数は2万6,122個に達していた。さら

に、病死者、軍人遺家族の弔問や慰安、勤労奉仕による後援にも取り組むなど、国婦の「銃後の花」たちはきわめて活発な活動を展開したのである。



写真1. 毛布献納（徳島市新町分会）『国婦銃後の花』



写真2. 富街分会の陸軍病院慰問（『徳島婦人国防』1938年10月10日）



写真3. 池田町分会、食糧増産の開墾作業（1941年）。笑顔が見える珍しい写真。スナップ写真であったためか、自然な姿が撮影されたと思われる（『池田町婦人会史』1990年）。

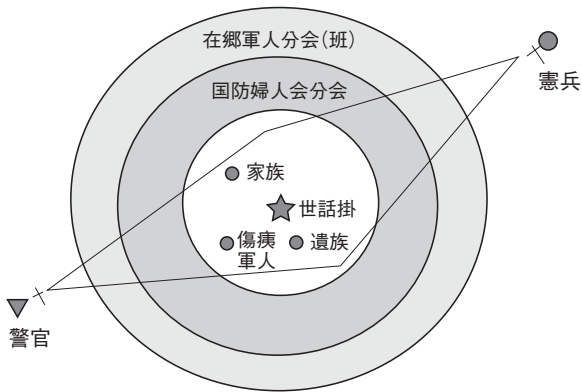
4. 国婦活動の活発化の要因

ところで、国防婦人会の活動を撮影した当時の写真の多くは、慰問袋を整理、運搬の様子や神社参拝、陸軍墓地の清掃の様子などを写したものがよく見られる。しかし、これらの、いわば「公式」の集合写真からは、個人の表情や感情をほとんど読み取ることができない。しかし、『池田町婦人会史』に掲載された写真3は、個人撮影ということもあろうが、女性たちの分会活動中の生き生きとした表情が写されており、自然な姿であろうと思われる。それでは、国婦の活動において、こうした笑顔があふれる楽しそうな場面は、どうして見られたのだろうか。また、上述のような急速な国婦の組織規模の拡大を可能とした要因は何であったのだろうか。

まず、当時の女性たちは、現在とは比較にならない程、閉ざされた「家」や社会環境のなかで暮らしていたことを指摘できよう。加納実紀代は「封建的」ともいえる家族関係（舅、姑、嫁）や夫婦関係、男女関係に対して、国婦の活動は変更を迫る「革新性」を持っていたという。以下、さしあたり前掲・加納『女たちの〈銃後〉』の指摘に即して、国婦発展の要因と特質を見ておこう。

言うまでもないが、国婦活動の基本線は、国民を戦争協力に動員する国や軍部による指導に沿って敷かれたものである。しかし、夫や舅ら家族に仕え、女が外を出歩くなどもつてのほか、とされていた当時であっても、「お国のため、兵隊さんのため」と言えば、家父長制の色濃い「家」の拘束から一時的にせよ飛び出すことができ、外で行動することが可能となった。こうした「解放感」や、女性でも一人の人間として、国や兵士のために役立つことができるのだという「高揚感」が、銃後活動の推進力となっていた。そのため、会員たちは、千人針集めをはじめ傷痍軍人の慰問、廃品回収、献金といった活動に熱心に取り組み、軍が国婦に期待した範囲を超えて活発化した。加納は「当時の女たちにとって、〈銃後の女〉は、ひとつの〈女性解放〉であった」と述べているが、国婦活動の場は、「家」や社会に対する女性達の鬱屈したエネルギーの噴出場となったのである。

国婦の組織図(軍の抱いた理念)



(出所)「大日本国防婦人会十年史」1943年、31頁

ところで、国婦に対する軍の意図としては、まず図から読み取れるように、傷痍軍人や遺家族による「反戦」「厭戦思想」などの発生を抑制するために、「当たりのやわらかい女たちをクッション」とした。また、徳島本部会則の第1条にみられるように、軍は女性を伝統的な「婦徳」の枠内に閉じ込めることを意図していた。しかし、後者については、軍の意図を超えて、国婦の女性たちの活動が拡大・高揚したことは上述の通りである。

また、加納は国婦の発展の要因として、同婦人会が軍と結びつき、その後押しがあり、とくに在郷軍人会が支援した点を指摘している。また、組織形態として「分会方式」を採用することによって、女性たちを町、村単位で組織し、地方の実情に沿った活動をしたことが普及の速度と密度を高めたといえよう。注目すべきは、職域分会を設置し、愛国婦人会が対象としなかった職種的女性をも組織した点である。例えば大阪では今里新地の芸妓が分会を組織したように、徳島市では花街・富田の芸妓が分会を組織している(写真2)。

さらに、加納は庶民が誰でも参加出来る条件として活動基盤を「日常」に徹した点が国婦の発展にとって大きな要因であったと指摘している。その一つに活動の際の服装を主婦の仕事着である「かっぽう(エプロン)着」とした点や、出征兵のためにお茶の接待や洗濯、つくろいものといった「日常」に徹したことで、庶民の女性の支持を得ることが可能となった。こうした活動は愛国婦人会とはきわめて対照的であり、国婦には「大衆的」基盤が存在したのである。

第3章 農村女性のさまざまな「銃後活動」

1. 羽ノ浦町長夫人・谷ナヲの活動

谷ナヲは、羽ノ浦町長であった谷六三郎(明治4年誕生、羽ノ浦村書記として役場に入り、明治39年から公職追放まで村長~町長を40年間歴任した)の夫人として、同町の愛農婦人会長をはじめ、愛国婦人会長、大日本婦人会支部長など各種女性団体の長を兼務、歴任した。町長夫人であることによって、戦時体制期に彼女はどのような「銃後」活動を担い、町内の各種女性団体のメンバーをリードしていったのか、その活動の一端を、谷ナヲ宛に届いた通知や通牒、書簡等を通してみたい。なお、以下引用する谷ナヲへの書簡、通知類は、谷家所蔵文書(阿南市羽ノ浦町)に依る。

まず、1942年(昭和17)6月8日には、谷町長から「軍人遺家族農耕作援助方依頼ノ件」があった。軍人遺家族のなかで「農耕作困難ナル家庭ニ対シテ」の耕作援助を「各種団体御相談ニテ御世話相成度」と依頼があった。また、同年7月23日には、羽ノ浦町銃後奉公会から婦人会宛に「出征兵士へ慰問状作製方依頼の件」が送られてきた。銃後奉公会が「婦人会の皆様と共に左記に依り戦線へ暑中見舞を兼ね慰問状をお送り致したい」ので、「戦地の兵隊さんのご苦勞に報ひる為め銃後の誠心を捧げて」の慰問も執筆の協力要請であった。羽ノ浦婦人会が各地域(大字単位だと考えられる)に設置した「班」ごとに、そこから出征した兵士に対して「なるべく土地の模様や出来事を精々詳細書いてください」との要望が付け加えられていた。

戦争末期の1944年(昭和19)3月23日には、羽ノ浦町農業会長でもあった夫の谷六三郎から愛農婦人会長・谷ナヲ宛に、「米増産講演会開催ニ関スル件」の通牒があった。「食糧増産ノ緊要性ハ益々其ノ度ヲ加」えており、それに対応して、県農事試験場主任技師による講演会が開催されるので、多数の参加を呼びかける内容であった。また、3月29日には日婦羽ノ浦町支部長・谷ナヲ宛に、「映画会開催ノ件」と題する通知があった。同支部の「熱意溢ル、皆サンノ御盡力御配慮」により

「飛行機献納資金募集」では「予期以上多額ノ献金」が集まったことへの感謝として、翌月、羽ノ浦国民学校講堂において「世紀ノ凱旋」「祖国ノ花嫁」「忠臣蔵」の3本が上映され、会員を招待することが案内された。

さらに、同年4月28日には、町長及び町農業会長の肩書きで谷六三郎より国民学校長や青年学校長、警察署、実行組長および婦人会長の谷ナヲ宛に「雑穀応急増産ニ関スル件」と題する通牒があった。それは、食糧生産のために、宅地全部、庭園、学校校地2割、工地敷地、河川敷、堤防、伐木跡と、ありとあらゆる空地の徹底的利用を呼びかける内容であり、戦争末期における食糧需給逼迫の様子を知ることが出来る。

その後、8月12日には大日本婦人会羽ノ浦町支部谷ナヲ宛に、「空襲対応講習会受講ノ件」と題した通牒があった。「時局ノ重大苛烈ニ伴ヒ空襲必至ノ状勢ニ対応スルため」に県主催の講習会が8月17日に富岡町国民学校において開催される旨と出席を要請するものであった。同日の講習科目は、「防空一般常識」「空襲対応食事」「空襲対応衣料」に関するもので、出席者の服装は「半袖モンペ」にするように指定された。

ところで、前述のように、「愛農婦人会」は、実行組と連携して農業関連事業を推進し、農業不況を克服するための農家女性の組織であった。しかし、昭和10年代後半になると、羽ノ浦愛農婦人会では、神社で兵士の「武運長久」や「戦勝」祈願を行ったり、羽ノ浦駅での応召兵士の見送りや帰還兵士の出迎えに、会員を頻繁に動員した。「英霊」の「凱旋」を弔う町葬にも多くの会員が参列し、農繁期には傷痍軍人や遺族宅で労働奉仕を行った。戦時体制の進展の中で、農業関連事業より「銃後」活動の比重が急速に増していった。

谷ナヲは、町長婦人であることで必然的に、この愛農婦人会会長をはじめ国防婦人会分会長を兼務するなど、羽ノ浦町にあった各種女性団体のリーダーとしての立場に就いた。そのため、間断なく彼女に届けられた上述のようなさまざまな要請や指令の通牒（文書）は、彼女を通して各種女性団体へ、さらに一人一人の農村女性へと「下達」

されていき、銃後活動・動員体制が推進されていた。なお、彼女は1942年に国婦と愛婦など三団体が統合され大日本婦人会が結成されるにあたり、長年にわたる婦人会活動での功績によって、感謝状を授与された。

2. 大津村大代婦人会長・岡閑の活動

1937年（昭和12）、蘆溝橋事件を契機に日中戦争が本格化すると、男子労働力の需給が一層逼迫してきた。板野郡大津村（現鳴門市）大代部落（戸数21戸うち農業者18戸、水田面積16町5反の「純農村」）からもすでに応召者が出ており、男子労働力が不足となっていた。そうしたなかで、同地域の婦人会長として活躍した岡閑の農村での「銃後」活動について彼女自身の「手記」からみておこう¹²。

まず岡は、今日農村に課せられた最も重大な事柄を「食糧の確保」であるとし、「何が何でも与へられた生産数量は必ず確保しなければならないと云ふ固い決心」を持つ。しかし、それは「個人々々の力だけでは如何ともする事が出来」ないので、「部落の人々が協同で其の責任を果」たす「協同の力」が必要であり、「農会の指導の下」で「協同作業を実行」することが不可欠であるとする。また、大代でも応召者が出たため、「労力は大変少いのでこの共同作業」には「皆が大賛成」し、共同田植、収穫、麦播、刈取などの農作業は「皆共同で行ふ様にな」った。その結果、能率が上がり、「女のみの家とか、重な人が居ない家」は「皆と同じ作柄を得て大変喜」ぶことになったのである。

しかし、もう一つ岡が提案した「共同炊事」については、「労力の節約」「婦人の過労防止」「労働する人や子供の栄養」の観点から「重要な問題」であり、「農会の指導で実行しよう」としたが、なかなか合意が得られなかった。そこで、農会が説得に乗りだし、ようやくその意義が「理解が出来」き、実現の運びとなるというように、農会＝行政の介入によってようやく合意を調達したのである。この「共同炊事」は「青年学校の女先生」の指導の下、「当番は各隣組から婦人一名宛」

子がないために、事変に対して何も奉公ができず「遺憾」である、との気持ちから、「老齢の身で蒔打ちに従事」して得た小遣い銭を2年間に10円貯めて同町の銃後奉公会に寄付した。なお、こうした藁仕事を共同あるいは個人で行い、その収入を献金した事例は多く、例えば三好郡辻町中村班の65歳の女性が「御老人であります但し事変がはじまつて以来私も戦士の一人だと毎日朝早くから」「一生懸命縄をないつづけ」、それを販売した350円を国防献金した（『日婦徳島』第7号、1943年1月20日）といったように、他にも多くみられたのは、藁細工が材料の入手や技術的にも簡便であったからである。また、前掲『徳島国防婦人』（第49号）には、同分会長の谷ナヲが20円を基金として同分会に寄付したこと、さらに40年4月19日には、同分会員が各15銭を拠出して全部で162円を集め、リンゴとミカンを購入し、徳島陸軍病院と西尾療養所の2か所に分かれて訪問し、戦病傷者に「会員自身から贈呈し親しく見舞の言葉を以て慰問」したという記事が掲載されている。

『日婦徳島』（第2号、1942年8月20日）には、古庄新町南班員が古庄駅構内外の除草や草刈りを実施し、その作業代金で会費の一部を作るとともに、残金12円80銭を国防献金として献納したことを伝えている。そして、「一年六十銭の会費が苦しいなど病人でない限り云へない様な気がする。これこそホントノ会費。ホントノ献金。ホントの日本婦人」と高く持ち上げている。また、古庄班の湯浅ヒサエは、3年前に夫を前線に送り、老父と幼い子供をかかえながらも、「農業にいそしみ内職にはげみ勤労作業や貯蓄や債券のすすめに活やくせられ銃後の花とたたえられている」（『日婦徳島』第7号、1943年1月20日）。さらに、1942年4月20日に開催された大日本婦人会県支部の第1回総会では、「建艦献金運動」を「支部員一致協力」して実施し、「愛国ノ至情ヲ披瀝」したとして、羽ノ浦町支部が表彰された（『日婦徳島』第1号、1943年4月20日）。

このように、国婦や大日本婦人会の機関誌は、会員女性たちのさまざまな「銃後活動」を「美談」とする大量の記事を掲載し、軍や国家が目指す方

向へと彼女たちの精神を喚起し続けた。そこからは、「銃後活動」へと動員するためのプロパガンダとしての役割をもった機関誌の「呼びかけ」に、農村女性たちはそれなりの「熱意」で応えていた様子が読み取ることができるのである。

まとめ

1930年代の経済更生運動のなかで、農村女性は、藁仕事などの「遊び労働」が解体すると、農作業や副業において生産競争に巻き込まれ、厳しい仕事に従事していた。家父長制の色濃い「家」や社会において、女性の地位や立場は弱かった。しかし、戦時体制の進展とともに、男子の徴用により、農村女性の存在感がにわかに大きくなった。しかも「お国のため、兵隊さんのため」と言えば、「家」の束縛から一時的にせよ飛び出し、外で行動することが可能となった。彼女たちは、「家」を飛び出して得られた「解放感」や「高揚感」に突き動かされ、「銃後活動」を熱心に推進していった。こうして、戦時体制下の女性たちは、愛する家族や知人を戦争で傷つけられ失う被害者になると同時に、総力戦を「主体的」に担う存在ともなったのである。

こうした戦時体制期の女性たちの行動や思いは、決してこの時代の女性たちだけの問題ではないだろう。現在、私たちが当然のように生活し、仕事をするなかで、そのことが何らかの形で他国の人々の抑圧や人権侵害、戦争に「加担」することになっていないのかどうか、という問いかけが必要ではないか。彼女たちの歩んだ歴史を深く学ぶことによって、私たちの立ち位置、今、私たちが日本社会や世界のなかで果たしている役割を見抜く歴史的判断力とでもいうべきものを獲得することが可能となるのではなかろうか。

注

(1) 戦間期から戦時体制期の女性史については、近年多くの研究成果がみられる。女性の戦争への関わりについて論じた代表的なものを挙げると、川名紀美『女も戦争を担った』冬樹社、1982年、藤井忠俊『国防婦人会 日の丸とカッポウ着』岩波書店（新書）、1985年、東京歴史科学研究会婦人運動史部会編『女と戦争 戦争は女の生活をどう変えたか』昭和出版、1991年、加納実紀代『女たちの<銃後>』増補新版、インパクト出版会、1995年、若桑みどり『戦争がつくる女性像』筑摩書房、1995年、深江誠子「戦時下の農村女性たち」（鶴見和子他監修『女と男の時空 日本女性史再考10』藤原書店、2000年、所収）早川紀代編『軍国の女たち』吉川弘文館、2005年、小和田美智子「戦争拡大と農村婦人会の軍事援護活動—静岡県磐田郡富岡村の場合」『総合女性史研究』14、1997年、板垣邦子「日本の農村女性の境遇と婦人会—昭和恐慌から戦後へ—」歴史科学協議会編『歴史評論』612号、2001年、津村薫「銃後の女性の戦争協力を問い直す」『女性ライフサイクル研究』14号、2004年などがある。

また、徳島の女性史の基本文献、資料としては、大日本国防婦人会徳島地方本部『国婦銃後の花』同上、1942、徳島県教育会『徳島県教育沿革史 続編』同会、1959年、がある。また、「明治・大正・昭和・女のおんな史 県内婦人団体にみる」1-37（『徳島新聞』1983年1月8日～4月4日連載）が愛国婦人会の発展について詳しい。池田町婦人会史実務委員会『池田町婦人会史』池田町婦人会、1990年、は現時点で徳島県の地域女性史として纏まった唯一のものである。

- (2) 拙著『農村組織化と協調組合』御茶の水書店、1996年。
- (3) 農林省経済更生部『副業参考資料 藁製品ニ関スル調査』1935年。
- (4) 安室は、「生計活動としての意義よりも遊びの要素が原動力となって行われる労働であると規定する。そのため、金銭収入など経済的な面についてはあまり多くは期待されない。しかし、だからといってまったく労働として経済性や成果物が無意味なわけでない。民俗学では、『小さな生業』や『マイナー・サブシステム』と呼ぶものであると、概念規定をしている（安室『「遊び仕事」としての農』『農業および園芸』83-1、2008年）。
- (5) 朝に藁を持って作業場に出かけたものの、一日中花札などの遊びに夢中になり、そのまま藁を持って帰るといった例が紹介されている（石本敏也「仕事と遊び—藁細工の伝承—」新潟県民俗学会『高志路』351、

2004）。

- (6) 小石李一『漁村更生の理論と実際』大日本水産会、1936年、194頁。
- (7) 拙稿「一九三〇年代における農家副業の展開と農村女性の組織化」徳島地方史研究会『阿波・歴史と民衆IV 生業から見る地域社会』2011年、所収。
- (8) 産業組合中央会徳島支会『徳島県産業組合拡充五ヶ年計画』1932年、87-88頁。
- (9) 前掲「明治・大正・昭和・女のおんな史 県内婦人団体にみる」『徳島新聞』。
- (10) 前回・藤井『国防婦人会』93-94頁。
- (11) 前掲『国婦銃後の花』57頁。
- (12) 岡閑「先駆者としてのなやみ」古瀬伝蔵編『戦ふ農村婦人』1942年、223-231頁。

§ 2

プロジェクトに寄せる思い

MACの担当学芸員 バレリー・ウォール氏からのメッセージ

In 1927 the local museum in Spokane, Washington received as a gift a precious doll from Japan as part of the Japanese American Friendship Doll Exchange program. Aside from her beauty and fine craftsmanship, what was special about this doll was her mission of peace and friendship. The people of Spokane have always known her as Miss Tokushima. The museum, also known as the Eastern Washington State Historical Society/ Northwest Museum of Arts & Culture retells Miss Tokushima's story of good will at every opportunity. We were pleased and proud to have been included in this project so that the story of the Friendship Doll program could be told in Japan. The tour of the doll in Tokushima adds a rich layer of meaning to the doll for her caretakers at the museum. It is particularly meaningful that after all of these decades Miss Tokushima still inspires friendships and good will between people of different countries, as has been my experience as part of this project. As the doll's steward, I thank the Tokushima Prefectural Museum for their desire to have Miss Tokushima here for a while and for taking such great care of her.



Valerie Wahl

Valerie Wahl

ミス徳島の里帰りに感動

文化庁文化財部美術学芸課長

栗原 祐司

私がいわゆる「答礼人形」に初めて出会ったのは、2002年7月から10月までロサンゼルス of 全米日系人博物館で開催された特別展「友情へのパスポート」展においてである。同展では、ミス大日本、ミス香川、ミス大阪府、ミス富山、ミス鳥取の5体とその弟人形1体、そして日本から里帰りの「青い目の人形」6体が集められ展示されていた。ほぼ子どもの大きさに近く、かわいらしい微笑みを湛えた市松人形と日米間の不幸な歴史との関係に大いに興味を持ち、私は早速、高岡美知子先生の大作『人形大使』（日経BP社）や武田英子先生の『人形たちの懸け橋―日米親善人形たちの二十世紀』（小学館文庫）等の関連書籍を読んで理解を深め、いわば“答礼人形フリーク”たらんとした。

2001年9月から2005年3月までニューヨーク日本人学校に赴任していた私は、現地校や現地コミュニティとの交流や相互理解の促進という職務のかたわら、日米の文化交流や日系アメリカ人の歴史について調べていたこともあって、赴任期間中にアメリカで確認できる44体の答礼人形をできるだけ多く見ようと心がけたのである。現存する答礼人形の所在地は高岡美知子先生の調査によって判明していたが、すぐに、答礼人形に会うのは容易ではないということがわかった。なぜなら、それらの多くは各州の博物館等に保存されているとはいえ、展示されていない場合がほとんどだからだ。ただし、ミス香川は、戦前から一貫してノースカロライナ州自然科学博物館で常設展示を行っている。2004年には、ニュージャージー日本人学校の子どもたちがボストンに修学旅行に行った際、ボストン子ども博物館で特別にミス京都府を見せてもらった。言うまでもなく、日本人学校の子どもたちにとって答礼人形は、日米の交流史を考える上でまたとない教材であった。ニュージャージー州には戦時中に西海岸で強制収容所に収容された日系人の方々が今でも集住しているシーブルックという町があり、そこも訪問することに

よって、より一層理解が深まったのではないかと考えている。また、2002年の9月から10月にかけて、ミズーリ州のセントジョゼフ博物館で「アメリカ中西部の答礼人形たちの再会」展が開催され、同館所蔵のミス兵庫のほかミス静岡、ミス宮城、ミス北海道、ミス三重の5体が集められたが、残念ながらこれを観に行くことはできなかった。このほか、所蔵されている博物館には行ったものの、事前に連絡をしておかなかったため見せてもらえなかったこともある。

日本に帰国後は、里帰りをした答礼人形に会いに行くことに努めた。平成19年には福島県立博物館でミス福島、長崎歴史文化博物館でミス長崎、茨城県近代美術館でミス茨城に、そして21年にはパラミタ・ミュージアムでミス三重に直面した。また、横浜人形の家では一時帰国中のミス福岡に会うことができた。

「ミス徳島」は昭和63年に初めて里帰りをしているが、その時はそごう徳島店でわずか数日しか公開されていない。なぜなら、社団法人国際文化協会の主催で実現した「答礼人形里帰り展」は、ミス徳島を含む19体の答礼人形が全国10か所で巡回展示しなければならなかったからである。実は、この関係で、徳島県に唯一残る「青い目の人形」であるアリスちゃんが、国会に登壇したことがある。昭和63年2月29日の衆議院・予算委員会で、徳島県選出の遠藤和良議員（当時）が委員長の許可を得てアリスちゃんを議場に持ち込み、披露したのである。遠藤議員の答礼人形の里帰りに対する支援に関する質問に対し、当時外務大臣だった宇野宗佑元首相は「私も（略）幼稚園を代表して県庁へその人形をもらいに行った代表の一人でございますので、非常に懐かしいことを御質問賜りましてありがとうございます。」とエピソードを披露している。また、中島源太郎文部大臣（当時）は、「御指摘のように大変心温まる催しでございますし、また私どもとしても日米六十年間の友好のきずなを再確認をする、そして日米の友好と親善をさらに高めるという意味でも交流面でも非常に有意義なことでありますので、文部省としてもこの催しに後援をさせていただくということ

にいたしております。」と前向きな答弁をしている。

私が答礼人形に関して強く心を惹かれ、半ば義務感のようなものも感じているのは、この人形交流のプロジェクトは、周知のとおりアメリカ人宣教師シドニー・ギュリック氏と日本近代資本主義の父渋沢栄一氏が中心になって進められたものだが、文部省（現・文部科学省）も深く関わっていたということもある。「青い目の人形」の受け入れに際して、日本では文部省が窓口となり、全国の小学校や幼稚園等に人形の配布を行っており、答礼人形を贈る際にも、当時文部省普通学務局長であった関屋龍吉氏が責任者として一緒に渡米し、答礼人形とともに全米各地を巡回しているのである。関屋龍吉氏が昭和5年に記した『アメリカへ行ったお人形の日記』という日本の児童向けのパンフレットには、三つのお願いが述べられている。一つは、何年か後に着替えを送ってください、もう一つは日本に贈られたアメリカの人形の世話を十分にしてください、三つめにアメリカの地図を出していつか日本人形の居場所を訪ねてください、ということだ。私はまさにこの三つめのお願いを実行していることになる。

しかし、残念ながら、その後日米両国は不幸な戦争に突入することになり、日本では「青い目の人形」が焼き捨てられるなどの憂き目を見ることになった。関屋氏は、こうしたニュースを聞き、「口惜しいというかなさけないというか、あふれる涙を禁じ得なかったのである。」「世には背負った子に浅瀬を教わるの諺もあるが、私はこの尊い童心を広げて、ただ人形交換のみがその手段とはいわないが、真の世界平和の基礎造りをしたいものと切望するのである。」と述べている。（関屋龍吉『社会教育事始め』（顕彰会出版局））人形の交流に平和の祈りをこめた先人たちの思いを、現代に生きる我々はしっかりと引き継いでいかなければならないだろう。

今回徳島県立博物館等で開催された「徳島平和ミュージアムプロジェクト」は、ミス徳島とアリスちゃんの展示にとどまらず、それを核としつつ戦前・戦時中の徳島県民の生活をあわせて紹介しており、戦争と平和について考える上で効果的な

展示内容であったと思う。私も「青い目の人形」の紙芝居を見学したが、こうした関連行事を随時開催するとともに、ワークシートやスケッチコーナー、ハンズオンコーナーなども用意しており、かなり子どもを対象として意識していることもうかがわれ、好印象であった。

最後に、我田引水になるが、私のこうした答礼人形に寄せる思いは、拙著『ミュージアム・フリーク in アメリカ』（雄山閣）の中でも一章を設けて記述し（pp.134～142）、その表紙にもマンガ家の久世番子氏のデザインで恐竜の骨格に乗って髪をたなびかせる答礼人形を登場させた。本書は平成21年12月に出版したものだが、実はその中で、ミス徳島の里帰りに向けた機運が高まっていることとミス三重の里帰りが実現したことを述べ、最後に「ぜひ、徳島県でそのような動きが盛り上がることを期待したい。」と結んだ。今回ミス徳島の里帰りが実現したことは、実に感無量であり、感慨に堪えない。



拙著の表紙にも答礼人形を登場させた。（『ミュージアム・フリーク in アメリカ』）

答礼人形「ミス徳島」 再び「平和と友情の使者」として

株式会社吉徳代表取締役社長

山田 徳兵衛

昭和2年(1927)の日米親善人形交流は、日本の人形界にとっても、また本年創業300年を迎える私ども吉徳の永い歴史の中でも、今なお忘れがたい大きな出来事でした。当時、答礼人形の製作の指揮をとったのが私の祖父にあたる吉徳十世・山田徳兵衛であり、また近年の答礼人形達の里帰りに際しては、初めの頃の数体を十世が手がけ、その後は、先代の心を受け継ぐ父十一世・山田徳兵衛が一昨年(2019)に他界するまで、その大多数の修復監修を務めました。

吉徳では昭和49年に里帰りした「ミス広島」を手始めに、数え挙げればこのたびの「ミス徳島」が実に36体目の修復となります。300年の吉徳の歴史の中で、その当主が父子3代にわたり、この答礼人形にかかわるといってもまことに希有なことで、これも人形が結ぶなにか不思議な縁でありましょうか。

「ミス徳島」は昭和63年の『青い目の人形交流展』で「ミス大日本」と共に里帰りした答礼人形19体の中の一体でした。その際は、展示前の応急修復を施されただけで、4月から9月まで、5ヶ月もの長期にわたる国内10ヶ所の巡回展示に耐えたのでした。その後、改めて吉徳に入院、ここではほぼ3ヶ月をかけて本格的な修復を受けましたが、その際テーピングされた右足の脛の剥落と膝の布の剥がれの修復、さらに脱落した左足の親指の接合から汚れた足袋の洗濯に至るまで、すべてを指揮したのは亡き父でした。

あれから22年、このたび地元の皆さんの善意が実を結び、「ミス徳島」の本当の里帰りが実現しました。

人間ならばことし84才となる答礼人形。その修復の難しさは、誕生した当時の初々しさと、年月のもたらした風格とを、併せて生かさなければならぬ点にあります。幸いにしてこれまで手がけた答礼人形たちの痛々しい症状を記したカルテ及

び手術記録が吉徳にあり、それを参考に、今回は不肖私も父の遺志を継いで、細心の注意を払いながらさらなる修復治療を進めました。

このたびの里帰りで、県内各地での展示を通して「ミス徳島」自身が見聞きした日本の伝統・文化をお土産に、再び「平和と友情の使者」として星の国に渡り、元気な姿で多くの人々に平和と友情の大切さを語り続けてくれることを切に希望しています。

徳島県の宝もの、そして日米両国の宝ものである「ミス徳島」に深く心を寄せる者の一人として、これからも答礼人形の修復を続けると同時に、この人形交流について後世にもしっかりと伝えていきたいと思っています。



調査・修復を終えたミス徳島と筆者

「平和の使者」—青い目の人形

藍住町国際交流協会会長

友滝 洋子

戦後65年目に当たる2010年、徳島県立博物館で開催された徳島平和ミュージアムプロジェクトによる特別陳列『海を渡った人形と戦争の時代』は、戦争体験世代にも戦後生まれの世代にも、忘れ去ることのできない日本の激動の歴史をしっかりと脳裏に焼き付けるに余りあるものでした。併せて、1920年代、アメリカとの関係に不穏な空気の流れる中、人形という使者に友情と平和の願いを込め、日米関係の修復に努めたキリスト教宣教師ギュリックと実業家の渋沢栄一の功績を確認するに十分な内容でもありました。

神山町神領小学校のアリスは、日米両国の架け橋になるべくアメリカから贈られた約12,000体の青い目の人形の1つで、県内にたった1つ現存するものです。今回、「ミス徳島」の20年ぶりの里帰りに際し、県立博物館では2体の人形を同時に展示し、戦争の悲惨さと平和の尊さについて考える大切な機会を私たちに与えてくれました。

1989年、神山町神領小学校の児童やPTAが始めた、アリスをペンシルバニア州ウイルクインズバーグ市へ里帰りさせたいとの活動は、その3年後の1992年、ついに実を結びました。初めての里帰りを果たしたアリスは、沢山の仲間（人形）を伴い神山に戻って来ました。多民族国家アメリカらしく、肌の色、目の色、髪の色も様々な十数体



上演中の様子（徳島県立博物館）

の人形たちとアリスは、会場を大いに盛り上げ、神山町は国際交流、国際親善に更なる歩を進めることとなりました。

原田一美著『嵐の中に咲いた花 青い目の人形 アリスちゃん』を拝読したのが、ちょうどこの時期でした。身長40センチ、ブロンドの髪に青い目、むっちりとした手と足の人形アリス。日米間の戦争が激化する中、平和の使者であるアメリカ生まれの人形たちは日本の各地で処分され始め、ここ徳島もその例外ではなく、県下でも沢山の人形たちが焼き払われて行きました。神山のアリスを守るため、女性教師と生徒たちの精一杯の努力が、存在の危機にあった小さな人形を救ったのです。平和と親善を心から願う人達の真摯な願いと想いが、人形を大きな圧力から守り抜いたのです。

小さな平和の使者アリスの物語に心を打たれ、紙芝居として作成したのは、今から8年前でした。



紙芝居の表紙



紙芝居の最後の場面

そして、このプロジェクトに際し、アリスの紙芝居を上演する複数の機会に恵まれたのは何よりも幸いでした。

2010年8月15日、9月5日の両日は、「ミス徳島」とアリスの並ぶ県立博物館展示会場の中で紙芝居「青い目の人形アリスちゃん」を上演し、小さなお子さんからシニア世代まで、幅広い年齢層の40余名の方々に熱心に耳を傾けて頂きました。続いて、海陽町立博物館でも2日間の上演、最終は10月17日、松茂町歴史民俗資料館での上演でした。どの会場でも、紙芝居への関心は高く、平和の使者である人形とその時代背景を十分に理解して頂けたのではないかと考えています。

優しい面持ちの「ミス徳島」とあどけない表情のアリスは、平和の使者としてその大きな役割を果たしました。しかし、世界では今も紛争が絶えません。平和と親善を願うのは世界共通の願いであるにも拘わらず、悲しい争いが存在するのも事実です。戦争を体験した日本は世界の平和を希求する国として、また、私たちは世界平和を希求する国民として、平和と親善の視点から国際交流・国際理解に努めていかなければならないと確認した次第です。

巡回展のお手伝いを経験して

海陽町立博物館ボランティア

郡司 宏子

ある日、海陽町立博物館の年間計画に、「青い目の人形巡回展」と書いてあるのを見つけました。ふと思い浮かんだのは、実家の父親の書齋に置いてあった原田一美先生の著書『青い目の人形』でした。どのくらい前でしょう、「この本はお父さんが梶田務先生と一緒に挿絵を描いたから、あなたに一冊あげるね。」と母から言われていた本でした。しかし、実家を離れあちこちと居場所を変えているうちに、本は棚に置いたままになっていました。

そうしているうちに今春から海陽町に住むことになり、実家に置いてある自分や父の作品を整理していると、「青い目の人形挿絵原画」と書かれた大きな包みを見つけました。その中にはたくさんのエスキース（下絵）と挿絵の原画が入っていました。挿絵をみていると本の内容が記憶の中から蘇り、エスキースやスケッチからも光景が浮かび、一点一点がすばらしい物でした。

そのような出来事があり、博物館で答礼人形のミス徳島とアリスちゃんが展示されることを知った時、「すごい、実際に人形に会える。」とワクワクし、巡回展のお手伝いに参加しようと楽しみにしていました。8月1日には学芸員の夫と県立博物館へ見学に行き、原田先生の講演も聴きました。展示は美しく、資料もわかりやすくまとめてあり、戦争や当時の情勢によりどのような事があったのか、人形の役割など充実した内容で大変勉強になりました。

さて、海陽町の巡回展では大規模な事はできません。それでは挿絵を使ってその背景にどのようなお話があるのかを考えられる様な工夫をしようと、挿絵の展示が決まりました。展示のお手伝いをしたり、子どもたちと一緒に人形の絵を描いたりしながら、見学にこられた方々の反応を観察しました。お歳を召した方々は、二体の人形に愛おしそうに声をかけ、様々な想いをかみしめておられました。また、松茂町でのお別れ会でも報告さ

せていただきましたが、小さなお子さんを連れてこられる若いお父さんお母さん方が、人形を前にして、「この子達はあなた達と同じ年くらいに見えるけど、80歳くらい年上のおばあちゃんでね、戦争があった大変な時代を経験しているんだよ。」と挿絵や展示してある資料や本を参考にしながら、子どもに分かるように説明している姿が大変印象的でした。食い入るように人形をみて、着物の柄までスケッチして行った子たちにも感心しました。見学にこられた方々は、まるで人形達が伝えようとしている事が伝わって来たのではないかと思うほど長い時間をかけ、一生懸命にご覧になられていました。そこにいるのはただの人形ではなく、まるで久しぶりに会った古い友達のようにも思えました。それは私たちが平和で暮らせている事への感謝を改めて感じさせてくれました。

初めてミス徳島を見たとき、彼女に今の日本が、徳島が、どのように映ったかを聞いてみたいと思いました。たくさんの人々が平和を願って人形を通じた交流に関わったように、今回のプロジェクトにも県立博物館をはじめたくさんの方々の尽力があったと思います。さらに、資料を一つ作るのでも大変な研究や調査が必要であることも実感し、展示物の扱いなども近くで見学でき、貴重な体験をさせて頂きました。

現在もいろいろと国際間において不安定な情勢がみられますが、日本がいま平和であることがいかに尊い事であるのか、再考の機会を与えてくださった事に感謝いたします。

ありがとうございました。

「海を渡った人形と戦争の時代」 特別展から平和を考える

実行委員会副会長(財団法人徳島県国際交流協会)

村澤 普恵

昨年「海を渡った人形と戦争の時代」特別展の実行委員会副会長を仰せつかりました。(財)徳島県国際交流協会に勤務するという立場から、県内に住む外国人の皆さんにも、海を渡った人形のこと、そしてこの特別展のことを広く知っていただくことが私の役目であったと思います。

終戦の1945年8月15日はとても暑い日だったと両親から何度も聞かされたことを思い出します。「海を渡った人形と戦争の時代」特別展初日の7月17日も、酷暑と言えとても暑い日でした。この初日に、私は母と一緒にこの展示を見に県立博物館へと足を運びました。

当日は、米国から贈られた人形への答礼人形について、長年に渡って調査・研究してこられた、元武庫川女子大学教授の高岡美知子先生が会場に来られ「ミス徳島」について語ってくださり、また人形にまつわる紙芝居を披露してくださいました。

太平洋戦争が始まる14年前の1927年、日本で生活した経験のあるシドニー・ギューリック宣教師が、険悪になりつつあった日米関係修復を目的に、全米から集めた人形1万2千体を日本に贈り、その返礼として、ギューリック宣教師と親交のあった実業家、洪沢栄一氏が中心となり、徳島など各道府県などから人形58体が米国に贈られました。このことについて、私は随分昔に聞いた記憶がありますが、その当時、人形に親善大使を託すという日米の人々の優しさに思いを馳せたことを思い出します。日米の人形がお互いの国に贈られたにもかかわらず戦争は起こってしまい、多くの人が命を落とし、また人形も敵国の象徴として多くが処分されたとのこと。人形をも憎み処分するなど正気の沙汰とは思えませんが、それが戦争なのでしょう。

この特別展を一緒に見に行った母は終戦時20歳でした。目の前で母の友人が焼夷弾の直撃を受け

亡くなったという話を聞いたことがあります。その母はこの特別展を見て、ミス徳島の気品ある美しさに心奪われたそうです。着物などは、丁寧に修復されたとのことですが、とてもきれいで、かわいらしく気品があり、日本の特別大使としての風格を備えている人形でした。母は「よく何十年もの間アメリカで大事にされ、帰国して私たちに会いに来てくれた」としみじみと話していました。戦争体験のない私も母と同じ思いでした。

この特別展では、人形の他に、空襲の熱で溶けた瓶、焼夷弾の部品、戦意高揚のためのポスターなども展示されました。愛らしい人形を見た後に見る、異様な溶け方をした瓶、焼夷弾の部品などは、戦争の悲惨さを際立たせていました。

私は1980年代から90年代初めにかけて米国に住んでいました。米国内のいくつかの博物館に、日本から贈られた人形が収蔵されているにもかかわらず、当時それらの人形を見る機会を逸してしまったことをとても残念に思います。

戦争を知る世代がますます少なくなり、米国と戦争をしたことを知らない世代も多くいます。戦争を知らないで育つことほど幸福なことはありません。しかし、過去に戦争があったということ、そして今も戦争や内戦で苦しむ人々が世界中にいるということは紛れもない事実です。「ミス徳島」が見て来た戦争をきちんと理解し、そのことを私たちは、外国人の方たちを含めた多くの人々に対して責任を持って引き継ぎ、平和の尊さについて語り継いで行かなければなりません。そして、それらのことを語り継ぐとともに、私は、今生きている自分の命は誰にもらったのか、自分の幸福は誰によってもたらされたのかを真摯に考え、今生きていられることに改めて感謝をしたいと思いません。

親善人形異聞

実行委員会委員（児童文学作家）

原田 一美

県内でたった1体残っている神領小学校の青い目の人形アリスちゃんが、ウイルキンスバーグ市への里帰りの途中、お隣りのピッツバーグ市にあるカーネギー自然歴史博物館を訪ねた。平成2年8月8日のことである。

当時世界一の富豪といわれ、鉄鋼王と称されたアンドリュー・カーネギーが、1907年に創設したものだ。恐竜館、極地館、鉱石館などに分かれ、展示物は絵画、彫刻にまで及ぶ。その数1万点以上、全米屈指の規模と内容を誇っている。

だが私たちの目的は、それらの見学ではなかった。

そこに日本から贈られた答礼人形の1つ、「ミス高知」が保存され、アリスちゃんの来訪を待ちわびているのだ。

19世紀の面影を残す白亜の殿堂の前に立った私は、胸にこみあげてくる感慨と、押さえきれぬ興奮に足がふるえた。

これは単なる対面ではない。

64年前、日米の子どもたちが、友好と親善と平和の願いをこめて、交わし合った人形である。その熱い思いとは裏腹に、戦争という狂気の嵐に翻弄されながら、それぞれがたどった軌跡を語り合うのだ。

アリスちゃんの場合、もし阿部ミツエさん（故人）という、愛と信念と勇気に満ちた女教師の庇護がなかったらその命はなかった。

また大南信也さんという、情熱と実行力にあふれたロマンチストがいなかったら、この里帰り対面式が実現し得なかったことは明白である。

ならばこの堂々とした大理石づくりの博物館で歳月を送ったミス高知には、どんな人生の過去が秘められているのだろうか。

私ははやる胸を押さえ、アリスちゃんのあとについて、応接室へ入った。

しょう洒な部屋には館長のジェイムズ・Eキング博士が、にこやかに控えている。かたわらに、

2人の若い女性に支えられて「ミス高知」が立っていた。

私は息をつめて見つめ、問いかけた。

ふさふさとした黒髪。しもぶくれの丸顔に浮かべた微笑。金襴のはこせこを胸にさし、薄緑色の総しぼりの大振袖を身にまとった姿のはなやかさ。それでいて気品に満ちた美しさに、私は魅了された。

着付けに少々の乱れはあるが、非の打ちどころのない保存状態に安堵し敬意を捧げた。

今は亡きミツエ先生に代わって、次女の石田妙子さんに抱かれたアリスちゃんは、そっと手をさしのべた。その小さい手の上に、館長さんがミス高知の手を重ねた。カチッとかな音がした。期せずして大きな拍手が湧いた。

海を越え時を越え、悲惨な戦火をくぐりぬけて生きのび、今こうして出会えた2つの人形の胸中を思いやるとき、つい目頭が熱くなった。

「ミス高知は、戦争中展示物から外され、倉庫で大切に保管されていました」

館長さんはミス高知の手を握りしめながら、言葉を続けた。

「このたびの皆様の訪問を機に、あらためて出してきたとき、この黒髪の中に2本の白髪を発見しました」

ええっ、白髪が！

一瞬、声にならない声がどよめきになって部屋を駆け抜けた。

私の背すじに、戦慄が走った。

甘ったるい感傷の舞台から、奈落の底に突き落とされた衝撃だった。

しゆく然として襟を正し、ミス高知を凝視した。

表情には何の変化も見られなかった。ただ黒いつぶらな伏目勝ちの瞳が、濡れたようにつややかさをまし、閉じた小さな唇が今にも開きそうに思えた。

私はその瞳に、確に涙を見、閉じられた口から切々と訴える声を聞いた。

「苦勞したんだな、お前も」

かたわらの後藤団長のつぶやきは、私の思いだった。いや、ここに立つ31人全員の、すべてが

洩らした溜息の代弁だった。

人形が単なる人形でなく、「ひとがた」「形代」として、命を移して語り合える我々とは違い、子どものおもちゃ、一芸術作品として見るのがこの国の人の通例であるとか。

ミス高知は、水泡に帰した平和の願いを恨みながら、日米異質の人形観の不満、無念さを、白髪に変わった2本の髪の毛にこめ、訴えかけているように思えてならなかった。

人形は生きている。

アリスちゃんも「ミス高知」も、平和の尊さを語る生証人として、またお互いの文化を理解し合うかけ橋として、生き続けている。

その存在は、燦々として降り注ぐペンシルバニアの陽光よりまぶしかった。

(「徳島ペンクラブ選集」Part14 [1996年] 所収)



神領小学校児童にアリスの話をする筆者

人形交流は人間交流 —「ミス徳島」里帰り展に

実行委員会委員（元・武庫川女子大学）

高岡 美知子

1 昭和2年の日米人形交流

1927年、アメリカで日米移民を締め出す法律が通りそうになった時、親日派のシドニーL.ギューリックがアメリカの子供達に呼びかけて12,739体の「青い目の人形」を日本に贈り、日本でも特製の83cmもある市松人形58体を贈った。アメリカで270万人、日本で260万の人々が関わった一大親善運動であった。

太平洋戦争で「青い目の人形」達は敵として処分され、「人形に罪はない」と勇気を持って隠した人もあり、現存332体、「答礼人形」は44体が確認されている。

2 里帰り展

1974年「ミス広島」をさきがけとして、現在までに34体が里帰りして修復・展示されている。「ミス徳島」も1988年、国際文化協会等の主催で「徳島そごう」で5月20日から10日間、19体の内の1体として展示されたが、期間が短かったのと、アメリカの学芸員の監督の下での修復と時間の不足で、人形自体に十分な修復ができていなかったし、県民との接触はみなかった。

今回は、文化庁の支援と実行委員会事務局（徳島県立博物館）の尽力により里帰りが実現したことを、心からうれしく思うものである。

3 展覧会の盛況

開館直前の7月13日夜、アメリカの学芸員に運びこまれた「ミス徳島」と付属品一式は目を見はる美しさであった由。人形の元の制作者である東京吉徳人形店から専門のスタッフを招いて、前日見事に着付直しをした「ミス徳島」は輝くように美しかった。徳島県で唯一体生き残った「アリス」とも勿論初対面。どんな話をしたのか、知りたい限りである。

主会場の県立博物館では隣室の展示により、「徳

島県下での戦争」の被害がいかに大きかったかが目のあたりに感じられ、来館者のアンケートを見ても、戦争がどのように人の目を曇らせるかを考えさせる契機を与えたことで有意義であった。

私が案内を差し上げた人達は徳島県下の友人・知人、かつての勤務先の武庫川学院の教職員・家族であった。とりわけ武庫川学院のアメリカ分校で毎年3月のひな祭と11月の文化の日に「ミス徳島」を招いたことを覚えている卒業生達が、島根・兵庫・三重・名古屋・岐阜等から家族や友人を連れて多数訪れ、にぎやかであった。

各種プログラムの中で、「ミス三重」里帰りの際、三重県の中学生と教員で作られた「おかえりなさい『ミス三重』」という紙芝居を借用して、大型画面で1日に何度も上演したことが大変効果的であった。

8月22日（日）に2時間ずつ、2回に分けて行われたワークショップ「絵手紙をかこう！」の人气が高く、小学生が楽しんで参加した良いプログラムであったと思う。

できれば、「『ミス徳島』へ」、「『アリス』へ」という、スケッチとメッセージを自分で書いて、氏名・年齢も書くハガキ大の用紙を用意すれば、余計に思い出も長く残っていくのではなかったかと私は考える。



アリス&ミス徳島

徳島平和ミュージアムプロジェクト事業 「海を渡った人形と戦争の時代」展に寄せて

実行委員会委員（神山町神領小学校）

大栗 仁

平成22年2月に徳島県立博物館より、戦後65年を迎えた今、戦争と平和をテーマとした徳島平和ミュージアムプロジェクト事業「海を渡った人形と戦争の時代」展等を開催したいので、本校の青い目の人形「アリス」を出展してほしいとの依頼を受け、参加させていただくことになりました。

本校のアリスは日米関係が悪化しだした昭和2年に、アメリカ合衆国の親日家であったシドニー・ルイス・ギューリック博士が提唱された「友情の人形交流」運動によって、日本へ送られてきた12,739体の人形の1体として、昭和2年3月22日に本校にやってきました。しかし、その後の太平洋戦争の勃発により、これらの人形の大多数は敵性人形と指摘され悲惨な運命をたどりましたが、幸いにも、アリスは当時、本校の教師であった阿部ミツエ先生によって物置に隠され守られました。昭和53年に発見され、同年、文楽人形師大江巳之助氏によって修理され、現在に至っています。

アリスは本校の子どもたちにとって、先輩たちから引き継ぎ守り続けてきた大切な宝物であり、子どもたち一人ひとりの大切な友だちとなっています。日々、職員室前の廊下の陳列ケースの中で、子どもたちの生活を見守っています。また、卒業式や入学式など大切な学校行事には本校児童の一人として参列し、卒業生・入学児童を祝福しています。そして、子どもたちはアリスを通して、国際平和の尊さや世界の子どもたちとの友情の輪を広げていくことの大切さ学ぶため、毎年、工夫しながら集会活動として「アリス祭り」を実施しています。

去る平成22年8月10日、本校93名の全校児童は、徳島県立博物館のご配慮により、「海を渡った人形と戦争の時代」展を見学させていただきました。この見学によって、子どもたちはこれまでのアリス祭り等を通して学んできた内容とともに、20年ぶりに徳島へ里帰りした答礼人形「ミス徳島」に

ついでに学習、また、戦争と人々の暮らしについてもより深く学ぶことが出来ました。これからも、県下に1体だけとなっているアリスを大切に守り続けていくとともに、アリスを中心として、国際理解・平和・人権学習をより深め、友情や思いやりの心など豊かな人間性をもった児童の育成に努めていきたいと思っております。

最後に、このような学習の機会を与えていただきました徳島県立博物館の大原館長様、長谷川人文課長様をはじめ館員の皆様に心より感謝いたします。



アリスが贈られてきた当時の神領小学校



アリスも「出席」して行われている神領小学校の入学式

徳島で出会ったドラマ

事業アドバイザー（ハンズ・オン プランニング）

染川 香澄

仕掛けとしての絵手紙

絵手紙と聞くとカルチャー教室や公民館での講座を思い浮かべるかもしれませんが、博物館で描く絵手紙の有効性には目を見張るものがあります。それはずばり、絵手紙が博物館の資料をじっくりじっくり見る「仕掛け」となるからです。徳島県立博物館での絵手紙ワークショップでも、こどもたちはよく資料を観察してくれました。その様子を少し振り返ってみましょう。

はじめに学芸員さんが今回の展覧会やミス徳島についてのお話をしてくれました。絵手紙の先生からは絵手紙はヘタでいいんだよ、お人形とニラメッコしてのびのび大きく描こうと。絵手紙は誰かに手紙として出すものなので、まずどの資料のどの部分を描いて絵手紙にしたいかを展示室内をぐるぐる回りながら見比べていきます。描きたいものが決まればじっくりその資料を見て、手の先に集中して線を描き始めます（写真1）。資料を見つめながら丁寧に描き進めると、それまで見えてなかった細かい部分が見え始めてくるのです。青い目の人形アリスのおでこにぶつめたような跡



写真1 資料と向き合いながら絵を描いている。

があるのを見つけたのは参加者でした。大人は誰も気づいてなかったのに。誰かにいじめられたのかも、と人形にまつわる史実を元に彼が想像してくれた原因は当たっているのでしょうか。

輪郭が描けたら今度は色塗りですが、ここでもまたじっくりとどんな色をしているかを観察します。頭のとっぺんから草履の先まで、人形の全身を根気よく描き込んで色を塗っていった人もいました。ミス徳島には上下に真っ白な歯が少しだけ覗いているのを見つけたのも小学生です。お道具だけを描いた人、人形のアップの横顔もありました。他の人が何をどういう風に描いているかを覗きこむ人もいます。

次は絵の横に添える手紙文を描くためにまた資料を覗き込んだり考えたり。このときには特に、最初に聞いた人形にまつわる出来事、自分の考えや思い、資料を観察したり描いたりして新たに感じたことが交じり合い、また送る相手のことも思い浮かべることにもなり、資料についてより深く考え、自分なりの熟成が進んでいく場面です。

ふだん展示を見るときのように歩きながら展示をささっと見流すのではなく、こんな風にして何度も何度も資料と向き合う機会はあまりありません。また、このように丁寧に描いた絵手紙は思い入れがことのほか深く、みんなで並べて先生の講評を受けるときには、そのひとつひとつをじっくり聞こうと耳をそばだてることになります。頑張っただけあって、人の絵手紙の中味も気になり、覗きこむように体を伸ばして見入る人も多かったです。ここでもまた資料について新たな思いがよぎり、人が描いていて自分が見落としと感じたものを、後で見に行きたくもなります。描いた数枚の中から一通を選んで、大切に思っている誰かに送付することを決めて準備を整えます。今回はそれ以外の絵手紙はミス徳島を貸してくれた米国の博物館の担当者に送ることになりました。遠い国へ送るので、ちょっとドキドキにやにやしている人もいます。米国に送る手紙の文面は、米国でミス徳島を大事にしてくれていることに感謝する内容が多く見られました。

こうしてワークショップは終わったのですが、

大切な1枚を祖父母や両親に送った人も多く、おそらくその絵手紙がその人たちの手元に届いたときには、また絵手紙の中味について受け取った人と描いた子ども達の間さまざな会話がはこぶことであろう。「絵手紙×博物館資料」の組み合わせの素晴らしさをつくづく実感します。

後日、絵手紙を受け取った米国の学芸員からは、感激して電子メールでお返事がきたそうです。ミス徳島が米国の元の博物館に返却されたときには、同館で子ども達が描いた絵手紙とミス徳島を一緒に展示したいとのことでした。

実は、私自身は歴史博物館や考古系の博物館、動物園、水族館などで実施された絵手紙のプログラムに立ち合ってきた経験があります。絵手紙は、描いているときも描いた後の出来栄を眺める時も、ポストに入れる時や受け取った人との後日談に至るまで、長い時間軸の間に何度も何度も目を凝らして資料を深く見て、資料についてその人ならではの考えを育むことのできる、博物館側としても格好の仕掛けだと感じています。

人形の愛らしさと戦争

外部の人間として関わってきた立場から、今回のプロジェクトで特筆すべきことは他にもいろいろとあります。

展覧会ですっかり話題をさらってしまった感のあるのは日本人形ミス徳島です。でも、だからと言って来館者が第2部の戦争の展示を見ないかと言えばそうではありません。何度か博物館に足を運んだときに来館者の観覧状況を見ていると、人形の展示された第1部の「人形が結んだ友情」から、順路を辿るようにして狭い通路に導かれ、第2部「戦争とくらし」へと足を延ばす人が多く見られました。第2部の戦争関係の展示についてはとっつき難いと感じる子どももいたかもしれませんが、その様子を見てか多くの保護者が小声で話しかけ、説明を加えて展示を一緒に見る様子が見られたことは嬉しい光景でした（写真2・3）。

人形に魅かれて来館した人と戦争に関心の高い人が融合して、展覧会場が今までにない温度を生むことを想像しながら企画会議をしていましたが、



写真2 第2部を見学している親子



写真3 会場入口には、子どもたちの関心を惹くように、アリスやミス徳島をモデルにした顔出しパネルが設置されていた。筆者が試しているところ。

ある程度は叶っていたと思っています。また、第1部、第2部と見た後、もう一度第1部に関連した壁面展示を見てもらいたいと関係者で考えました。どんな過去があっても、今があり未来に繋がっていることを感じてもらえていたらと思います。

展覧会の周辺

今回の展覧会は博物館始まって以来、最も大きな新聞記事となってとりあげられたと聞きました。多くの人々の注目を集めるのは、博物館にたくさんの人々に来てもらうきっかけを誘います。博物館

が苦勞に苦勞を重ねてミス徳島を招かれたことが、そんなところでも実は報われているのではと思います。

そして、県博に来館してもらうだけでなく、巡回展として3か所の会場に出かけていったのも素晴らしいことだったと思います。その会場を見に行けなかったことが、私としては残念でなりません。町立資料館や道の駅まで、県立の博物館が巡回で展示を出前するなんて素敵なことです。松茂町歴史民俗資料館では学芸員たちが興味深いブログを書いて県博とは違ったアプローチで資料や展示を解説したり、道の駅の貞光ゆうゆう館では「展覧会が始まるのを楽しみにして待っていたのよ」と来館者に言ってもらえたそうです。いろんな拡がりに繋がる画期的な巡回展でした。

展示に使った1927年の新聞記事（写真4）から、徳島で行われた青い目の人形の歓迎式典では、元総理大臣の故橋本龍太郎さんの生母が徳島のこども代表として式で人形を受け取ったことも今回わかりました。そんなエピソードから新たに研究を深めることも、誰かがいつかしてくれればと思います。

また、私にとってはもうひとつエキサイティングなことがありました。ミス徳島の構造の調査先に同行させてもらったことです。引き受けてくださったのは、東京の人形町にある創業300年になる人形店「吉徳」です。展覧会が終わって、ミス徳島が吉徳に持ち込まれたとき、奥の部屋からファイルを持ってこられました。そこには、昭和


60年代のミス徳島の詳細な修復カルテがありました。以前この人形が日本に一時帰国したときにも、吉徳で調査修復を担当していて、それがさっと一瞬で出てきたのです。知らない世界なので興奮しました。3か月後に調査が終わったときにも立ち合うことができました。特殊な足首の修理など細かな技が光りました。また、日米の梱包に対する考え方の違いなど、いろいろと興味深い話がありました。有名な日本通運の美術梱包の一端にも触れることができました。フリーランスの立場で博物館の外部から、博物館と組んで仕事をすることが多い私ですが、人形を通して博物館資料の裏側を知ることができ、博物館の奥深さと重要性を垣間見ることができました。

ほかにも、最初の時点で米国の博物館からなかなか回答が来なかったのは、同館で組織変更があり、職員数の見直しが行われたり、経営の立て直しをするために館長が代わったという海の向こうのニュースにも驚かされました。また担当の方が闘病中のため連絡が取れなくなったりと、ミス徳島という人形を通して、まるでドラマを見ているようにも思えました。人形と言う資料が今回のプロジェクトをドラマ仕立てにしたのでしょうか。いえいえ……。考えてみれば、私たちの周りのひとつひとつのすべてのモノにはこうしてドラマが潜んでいるのですね。

モノ（＝博物館資料）との出会いとは、本当に興味深いものだと実感したプロジェクトでした。ありがとうございました。



写真4 徳島毎日新聞 1927.3.21。記事には、「徳島の少女を代表する大野知事のお嬢さん」に人形が渡されると記されている。この「お嬢さん」が故橋本龍太郎さんの生母である。



付録
報道等の記録

プロジェクトに関連するマスコミ報道等には、次のような多数のものがああり、実行委員会の予想をはるかに上回る反響に驚いた。ただ、多くは答礼人形「ミス徳島」の里帰りに注目したもので、戦争展示としての側面にはあまり関心が集まらなかったのは残念だった。

以下には、実行委員会で把握している報道等の記録を掲げるとともに、徳島新聞社から提供いただいた新聞記事を掲載した。

- 2010年6月27日(日)徳島新聞朝刊「『ミス徳島』来月里帰り／県立博物館で展示へ」
- 7月5日(月)徳島新聞朝刊「ぺんるーむ」欄寄稿「歴史見つめた『ミス徳島』」(鈴木綾子氏)
- 7月14日(水)四国放送テレビ「おはようたくしまプラス」における特集「人形が結ぶ平和の心」
- 7月15日(木)
 - 徳島新聞朝刊(1面)「『ミス徳島』里帰り」
 - 徳島新聞朝刊「海を渡った人形と戦争の時代」
 - 四国放送テレビ ニュース「『ミス徳島』の学芸員が表敬訪問」
- 7月16日(金)
 - 徳島新聞朝刊(1面)コラム「鳴潮」(徳島県立博物館特別陳列紹介)
 - 徳島新聞朝刊「戦争惨禍忘れない／文化の森5館近く相次ぎ企画展」
 - 徳島新聞夕刊「みんなの知りたいQ&A：アメリカへ行った人形」
- 7月17日(土)徳島新聞夕刊「『ミス徳島』表情穏やか」
- 7月18日(日)
 - 朝日新聞(徳島版)「ミス徳島 お帰りなさい／県立博物館で特別展」
 - 読売新聞(徳島版)「戦火くぐり平和伝える」
 - 毎日新聞(徳島版)「海を渡った日米親善人形／『ミス徳島』里帰り」
 - NHKテレビ(徳島) ニュース「海を渡った親善人形」
- 7月19日(月／祝)徳島新聞朝刊「『ミス徳島』と対面／ミス岐阜の会 米人形を持参」
- 7月21日(水)徳島新聞夕刊「戦争描く本、41冊展示／県立図書館企画展始まる」
- 7月22日(木)徳島新聞朝刊「県立博物館 里帰り展示の『ミス徳島』／現存品で愛らしさ格別／元武庫川女子大学教授 高岡美知子さんに聞く」
- 7月27日(火)徳島新聞朝刊(1面)コラム「鳴潮」(徳島県立図書館企画展紹介)
- 8月5日(木)徳島新聞朝刊「『青い目の人形アリスちゃん』／原田一美さん(児童文学作家)が講演／戦争の狂気に翻弄される／平和への願い 今も息づく」
- 8月6日(金)徳島新聞夕刊「みんなの知りたいQ&A：空襲」
- 8月7日(土)徳島新聞朝刊「ふるさと歴史探検隊63：海を渡った人形」
- 8月11日(水)徳島新聞朝刊「米人形『アリス』保管／神領小児童が『ミス徳島』見学／県立博物館」
- 8月14日(土)徳島新聞朝刊 文化欄寄稿「『海を渡った人形と戦争の時代』展に寄せて／真情伝える鎮魂の鐘／十六地蔵への思い後生に」(原田一美氏)
- 8月14日(土)徳島新聞夕刊コラム「藍がめ」(神領小学校の見学に言及)
- 8月20日(金)徳島新聞朝刊投書欄「人形さえ焼かれる戦争反対」(河野未来さん／小学生)
- 8月22・23日(日・月)AIテレビ「テレビミュージアム：海を渡った人形と戦争の時代」
- 8月26日(木)毎日新聞徳島版「楽しい！面白い！／好奇心も満足／各地で体験・工作教室」(絵手紙ワークショップ紹介)
- 9月14日(火)週刊教育PRO 2010.9.14号「ミュージアム列島 東西南北 434回：ミス徳島里帰り」(栗原祐司氏)
- 10月3日(日)徳島新聞朝刊「『アリス』紙芝居に40人 海陽／戦禍くぐり抜けた米寄贈の人形」(巡回展海陽会場での紙芝居の紹介)
- 10月10日(日)徳島新聞朝刊「『ミス徳島』の巡回展始まる／松茂、17日まで」

- 10月18日（月）徳島新聞朝刊「ミス徳島巡回展終了／松茂 人形との別れ惜しむ」
- 10月25日（月）文化庁月報505号「文化庁ニュース：答礼人形『ミス徳島』里帰り／徳島県立博物館 特別陳列『海を渡った人形と戦争の時代（文化庁 美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業）』（文化財部美術学芸課）」
- 10月25日（月）ミュゼ94号「ジャーナルポケット：徳島平和ミュージアム・プロジェクト 人形は伝える 伝えるは人間」（高岡美知子氏）

- 12月23日（木）徳島新聞朝刊「県内回顧2010〈3〉郷土史／鳥居龍蔵博物館 文化の森で偉業顕彰／展覧会 『ミス徳島』が里帰り」（2010年に徳島県内で開催された展示として、特別陳列「海を渡った人形と戦争の時代」に言及）
- 2011年2月1日（火）月刊トイジャーナル2011年2月号「NEWS：答礼人形『ミス徳島』が2回目の里帰り」
- 2月20日（日）にんぎょう日本437号「NEWS：答礼人形『ミス徳島』が里帰り・修復行われる」

博物館提供）
 【上】約20年ぶりに里帰りを「ミス徳島」
 【下】神領小学校で大切に飾られている「アリス」（ともに徳島県立



日米友好願い戦前寄贈の人形

「ミス徳島」 来月里帰り

県立博物館で展示へ

太平洋戦争が始まる14年前の1927年、日米両国の友好の使者として日本から米国に贈られた人形「ミス徳島」が、約20年ぶりに2回目の里帰りをする。県立博物館（徳島市）が戦後65年を機に「人形が結ぼうとした平和の尊さを考えよう」と企画した。同館で7月17日から9月5日まで開かれる特別陳列「海を渡った人形と戦争の時代」で展示する。

ミス徳島は、オレンジ色の着物姿で穏やかな表情を浮かべる高さ約80センチの日本人形。ワシントン州のノースウエスト芸術文化博物館で大切に保管されてきた。

27年3月、日本で生活した経験のあるキュリリック宣教師が、険悪になりつつあった日米関係を憂え、友好の印として全米から集めた人形約1万2千体を日本の小学校などに贈った。返礼として、同年12月、徳島など各道府県や大都市から人形58体が米国に渡った。その中の一体がミス徳島だ。人形の台座には「徳島MISS TOKU MISU TOKU」の文字がある。ミス徳島は、現地で半世紀以上も「ミス徳島」として親しまれてきた。

27年3月、日本で生活した経験のあるキュリリック宣教師が、険悪になりつつあった日米関係を憂え、友好の印として全米から集めた人形約1万2千体を日本の小学校などに贈った。返礼として、同年12月、徳島など各道府県や大都市から人形58体が米国に渡った。その中の一体がミス徳島だ。人形の台座には「徳島MISS TOKU MISU TOKU」の文字がある。ミス徳島は、現地で半世紀以上も「ミス徳島」として親しまれてきた。

贈られた人形で徳島県内に唯一、神山町の神領小学校に残る「アリス」（高さ約40センチ）と一緒に展示する。ほかにも徳島大空襲の写真や防空すきんなど戦時下の生活を伝える品々を並べる。

友好の使者 来歴紹介

吉野川市の人形「アリス」語る
吉野川市の人形「アリス」語る



友好の使者として米国から贈られた人形「アリス」について語る原田さん（県立博物館）

吉野川市山町川東のさん(83)が1日、徳島市児童文学作家・原田一美(内)の県立博物館で、太平

洋戦争前の1947年に、米国から神山町の神領小学校に贈られた人形「アリス」をテーマに記念講演し、約80人が耳を傾けた。講演は、同博物館で開催中の特別陳列「海を渡った人形と戦争の時代」の一環。

アリスをモデルにした童話「青い目の人形」を昨年出版した原田さんは、アメリカの宣教師が日本と親善を図ろうと、金米から人形約1万3千体を集め、日本に贈った経緯などを紹介した。

日米開戦後、反米感情から多くの人形が処分されたことに触れ、「戦争では罪のない人形までも犠牲になる。日米をつなぐ人形の意味を思い返さないといけない」と平和の大切さを訴えた。

22日は、人形を描く絵手紙ワークショップがある。特別陳列では、米国から人形が贈られたことへの返礼として、日本から贈った人形の「ミス・デッド」が帰郷し、アリスと対面させることになった。9月10日まで。

徳島新聞2010年8月2日付

徳島県立博物館の特別陳列「海を渡った人形と戦争の時代」(9月5日まで)の一環として、「青い目の人形」(未知谷刊)の著書がある児童文学作家原田一美さん(83)吉野川市山町川東の講演会が、同博物館であった。原田さんは「青い目の人形アリスちゃん」と題し、神山町の神領小学校が所蔵するアリスが、日米友好の使者として米国から贈られた経緯などを紹介。人形さえも戦時に翻弄された悲惨な語り、平和の大切さを訴えた。

「青い目の人形アリスちゃん」

原田一美さん(児童文学作家)が講演

10月26日12月25日に大正天皇がともあった。しかし米国では人形は亡くなれば、日本中が喪に服して、遊ぶための道具、おもちゃだった。その暗くて悲しい雰囲気を感じ、米国から贈られた人形は今の価値が飛ぶかのように、その翌年、米国で一体3千円くらい。一方、日本からやってきたのが1万2千3百体。58体が贈られた答礼人形は1体300万円の価値がある。答礼人形は「ミス・デッド」など各県の名前を付した。その理由を語り、日本中が明るく、日本に人形を贈ろうと提唱した。

原田さんは、元キリスト教宣教師ギョーリック。日米関係が悪くなり、米国で日本人排斥運動が起る中、その提唱に乗る子どもら70万人が賛同した。

人形は、世界的には呪術的な意味合いもあるが、日本では人間の代わり、つまり「形」として、魂があり語り合えるものだった。罪やけがれを人形に移して川に流すといったこ



「戦争は狂気を引き起こす」と話す原田一美さん(徳島県立博物館)

戦争の狂気に翻弄される

け、その費用は各県が負担するとともに、米国からの人形を受け取った学校の子どもから一人ずつを集めた。

アリスちゃんが神領小学校に来たとき、そのおなかを押すと「ママ」と泣き、下着を履かせていたことがカルチャーショックだった。

日米開戦後、反米感情から多くの人形が処分されたが、アリスちゃんは、同校の女性教師が命がけで守った。その先生は78年、テレビ番組に出演し、「人形には何れも罪はつきませんけん」と、その理由を語っていた。

わたしは、罪のない人形さもあるが、戦争高揚という名目で処分される、戦争が引き起こす狂気の勢ひを感した。その番組を見たことがアリスちゃんについて調べ、「青い目の

平和への願い今も息づく

人形」を書くきっかけとなった。90年、アリスちゃんが里帰りすることになった。人間なら古里を恋しがらない人はいないだろうと、古里探しをしたのは同校のPTA副会長。バスボートの走り書きから米國東部のペンシルベニア州にある市を割り出し、市長に手紙を出すなどして、見つけ出した。

里帰りにはわたしも同行した。同州にあるカーネギー自然史博物館に、高知県から贈られた「ミス高知」があることが分かり、アリスちゃんと対面させることになった。

ミス高知の頭には本の白髪があった。人毛のためにブラウン色素が欠乏したのが原因だ。わたしたちは声を失った。人形に「お前も苦勞したんじや」と言った参加者もいた。戦争中、人形が悲しみの中で過ごしたことに思いをはせ、言葉に表れたのだらう。人形の目は涙で光っているようだった。ミス高知は、その翌年に里帰りした。

ギョーリック博士の願いは、戦いの中で水泡に帰した。罪のない人形にさえも罪を背せて葬り去ったのは急政者の考えだったが、戦争がもたらした狂気のためもある。わたしたちは今、このことを思い直さなければいけない。

特別陳列は、日本から贈った「ミス・デッド」が里帰りし、アリスとともに展示されている。観覧無料。期間中、人形にまつわる紙芝居と展示解説(29日)、人形を描く絵手紙講座(22日)がある。

徳島新聞2010年8月5日付

「海を渡った人形と戦争の時代」展に寄せて

特別陳列「海を渡った人形と戦争の時代」が9月5日まで、徳島県立博物館で開かれている。戦後65年で平和を考える貴重な機会だ。展示されている人形「ミス徳島」と「アリス」をモデルにした児童文学「青い目の人形」や、疎開児童が犠牲になった逸話を描いた「十六地蔵物語」「おかしいやんか」の著者原田一美さん(83)「吉野川市山川町」が、終戦記念日を前に、寄稿してくれた。

児童文学作家 原田 一美

の上田富雄社長であること
を知った。

言うまでもないが戦争の白川洋二教諭は聞き逃さず、思いに感動し、製作を快諾は、何の罪もない子供の命なかつた。鎮魂のモニユメント建立を児童会と職員会に提案した。

特別陳列に展示されている銅鐸型の鐘は、その事実基金づくりに全校が燃えた。熱は生存者、遺族、PTA、自治会を包む大きな炎になって燃え広がり、予降りしきる雪の中、鐘は鳴り続けた。

第2次世界大戦の末期、貞光町(現つぎ町)貞光寺へ大阪の南恩加島国民学校の3年生29人が疎開していた。が、不慮の火災で16人もが、いたいな命を失った。釣りを。それも日航機墜落の御巣鷹山に奉納されているような銅鐸型がいい横に振った。目を閉じ、黙然と合わせた手はあきれるほど黒く大きかった。この人はずいぶんではないと私は

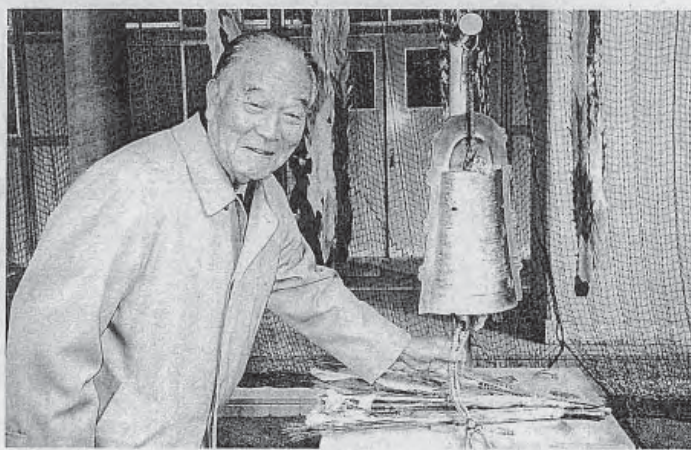
「それなのに、地元の南恩加島にはなんにもあらへん。おかしいやんか」

子供のつぶやきを、担任

上田氏は子供たちの熱い

真情伝える鎮魂の鐘

十六地蔵への思い後生に



「鎮魂の鐘」落成式に出席した原田さん
=2003年、大阪の南恩加島小学校

直感した。日を改めて訪ねた会社は、従業員8人の小さな鐘工場だった。上田氏は自分自身を励まして、奈良の大仏を铸造した河内、鑄物師の末っ子として、昔の人の腕に負けて、銅鏡、銅鐸作りに夢中ですわん。おかげさんで老後のために建てた家も土地ものうなりました。そばで奥さんが、あつぱらんと笑った。

上田氏は「なにわの名工」であり、埋蔵文化財復元の希少な技術者であり、大学の考古学講座の常任講師だった。だが「鑄物師」と誇らかに名乗る生粋の職人なのだ。

「子の霊がわてらを呼び、作らしたもんや」鐘をなでながら断言する上田氏だ。同じ疎開生活を体験した奥さんと、焼死した子と同級生だったという工場長の堀川さんが大きく大きくなすいた。純真無垢な子の祈りが天に届き、こたまとなってこの小さな町工場の人の胸を揺さぶつたのに違いない。

鐘の形と手触りと音色は、戦争の愚かさを告げている。とともに人の真情と、その生き方を考えさせてくれる、得難い貴重な逸品であることは間違いない。(吉野川市山川町)

海陽

「アリス」紙芝居に40人

米国から贈られた人形「アリス」にまつわる紙芝居に聞き入る来館者―海陽町の町立博物館



戦禍くぐり抜けた米寄贈の人形

日米友好の使者として、83年前に米国から神山町の神領小学校に贈られ、戦禍をくぐり抜けてきた人形「アリス」にまつわる紙芝居が2日、海陽町四方原の町立博物館で上演され、住民ら約40人が耳を傾けた。

地元の絵本読み聞かせグループが児童文学作家原田一美さんの原作を基にした紙芝居「青い目の人形アリスちゃん」を上演。人形を見て喜ぶ児童

の様子や、太平洋戦争により反米感情が渦巻く中で、教師らが人形を懸命に守るシーンなどを情感たつぷりに読み上げた。

新居大愛羅ちゃん(9)「海部小3年」は「人形が大切に守られてよかった」と話した。

同館では3日まで、「アリス」などを展示する巡回展「海を渡った人形と平和への願い」が開かれていく。

徳島新聞2010年10月6日付

ミス徳島巡回展終了

松茂 人形との別れ惜しむ

県内4カ所を巡回して 広島の町歴史民俗資料館 いた人形「ミス徳島」の で終了した。

里帰り展が17日、松茂町 里帰り展は7月17日か

「ミス徳島」の巡回展始まる

日米友好の使者として 太平洋戦争前の1927

松茂、17日まで



ミス徳島に見入る来場者―松茂町歴史民俗資料館

ら県立博物館、貞光ゆうゆう館(つるぎ町)、海陽町立博物館、同資料館を巡回。4館の見学者数は計約1万3千人だった。この日は各館の担当約20人が同資料館に集まり、愛くるしい人形との別れを惜しんだ。

ミス徳島は、東京都の日本人形店で表面のクリーニングや修復が行われ、来年2月ごろに収蔵先のワシントン州・ノーリスウェスト芸術文化博物館に届けられる。

ミス徳島は、22年ぶりに2回目の里帰りをした人形「ミス徳島」の巡回展が9日、松茂町広島の町歴史民俗資料館で始まった。17日まで。

ミス徳島は、米国ワシントン州の博物館が所蔵する高さ約80センチの日本人形。米国から神山町の神領小学校に贈られた青い目の人形「アリス」と合わせて展示している。新聞記事なども並べ、二つの人形が戦争によって敵国の象徴として扱われるようになった歴史を紹介している。

県内での展示は同館が最後。最終日にはミス徳島をテーマにした紙芝居とお別れ会が行われる。

徳島新聞2010年10月18日付

徳島新聞2010年10月10日付

協力者

阿南市富岡小学校 愛媛県歴史文化博物館 香川県立ミュージアム 株式会社貞光ゆうゆう館
株式会社吉徳 神山町神領小学校 吉祥院 高知県立歴史民俗資料館 渋沢史料館 真光寺
青少年育成アドバイザーの会 西予市立狩江小学校 西予市立俵津小学校
答礼人形「ミス三重」の里帰りを実現させる会（現・ミス三重の会） 徳島県立文書館 徳島市史編さん室
徳島新聞社 徳島大学埋蔵文化財調査室 徳島邦楽集団 日本郷土玩具博物館 ミス岐阜の会
三豊市教育委員会 室戸市立佐喜浜小学校 友情の人形全国交流センター 横浜人形の家
Northwest Museum of Arts & Culture

青木 勝 伊井さえこ 魚次龍雄 大原京子 大原早百合 大原俊一 鎌田邦宏 川上 恵 草分京子
郡司宏子 後藤伊都子 小藤敦見 志磨伸枝 滝澤秀幸 竹内伸子 友滝洋子 永瀬タメコ
原田ヒロエ 針谷浩一 森 恵子 山辺昌彦 湯浅良幸
Rector, Ronald Shelman, Brooke Wahl, Valerie

(敬称略、日本名は50音順、英名はABC順)

平成22年度 文化庁美術館・歴史博物館活動基盤整備支援事業
徳島平和ミュージアムプロジェクト報告書

- 発行年月日 2011年3月5日
- 編集・発行 徳島平和ミュージアムプロジェクト実行委員会
〒770-8070
徳島市八万町向寺山 文化の森総合公園 徳島県立博物館内
TEL088-668-3636
<http://www.museum.tokushima-ec.ed.jp/2010kibanseibishienjigyo/>
- 印 刷 徳島出版株式会社